

橋爪の歴史

村上喜代志 著

橋

爪

の

歴

史

村

上

喜

代

志

著

橋爪の歴史

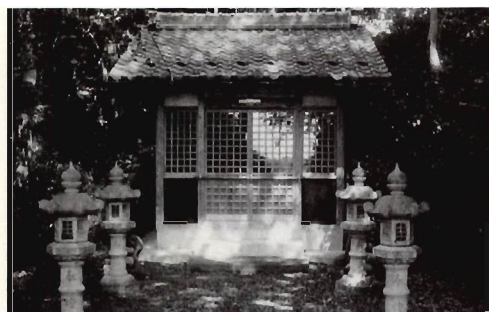
村上喜代志 著



篠塚神社



白山神社



八幡神社



岡ヶ鼻 神明神社



御鋤社



山上 巖島社



山上 招魂社



金刀比羅社と大神宮常夜燈



念長寺



阿弥陀堂（道場）



山上 青松軒宗匠碑



山頂 明治記念碑



旧日吉小学校より象鼻山を望む



多芸橋と象鼻山



名神高速道路養老サービスエリア



岡ヶ鼻 芭蕉句碑



岡ヶ鼻 杏園先生碑



岡ヶ鼻 牧田合戦碑



神明下 嗚呼日中戦碑

ふるさと創生の力 『橋爪の歴史』 発刊の意義

昭和六十二年冬、東海古墳文化研究会の方々により、象鼻山一号墳は前方後方墳であり、美濃地方最古のものと認定されて、一躍脚光を浴びましたが、橋爪地区は古来美濃国府へ向かう伊勢街道の要衝でもあり、輝かしい歴史と伝統に彩られてきました。

その反面、戦乱や洪水にも何回となく襲われていますが、この地区は多くの先賢を生み、そのよき指導のもとに、全村一致して苦難に堪え、地域発展の一途を歩いてこられました。

このたび、先人のその尊い足跡が、『橋爪の歴史』として発刊される運びとなりました。資料に基いたご研究には前人未踏の新説もあり、そのご労作に深い敬意を表すると共に、この一冊がふる里創生の力となり、町の一その発展に大きく貢献されることを固く信ずるものであります。

平成四年九月

発刊によせて

地域を愛する心が、現代社会の人々から忘れ去られようとしている今日、橋爪区を人一倍愛しておられます村上喜代志氏が、貴重な文献、古文書等を裏付の資料とされ『橋爪の歴史』を発刊されましたことは、誠に意義深いものがあり喜びに堪えない次第です。区民として心からお祝い申し上げます。

村上喜代志氏は、長年教職に従事され退職後、全国に会員を持つ歴史研究会に所属され、史実の調査や記録を機関紙に掲載、また書籍を発刊されている郷土史家であります。ふる里に人は生まれ、人の営みが始まり、そこに地域社会が形成されてよい風土が培われるものであります。私達は史実や史跡を知り先人（輩）の業績や偉徳に学び、神社や仏閣を中心とした尊い風習や慣行を、急激に変化する社会の中で今一度とらえ、風化しがちな身近の歴史としてまとめ、後世に残すことは地域文化の創造であります。

いまや経済的に高度発展をした国土、多様化して来た私達の生活の中で『橋爪の歴史』は区民の物語となり、心のよりどころともなることでしょう。

私達は、いまふる里の今昔をしのびながら、橋爪地区で推進している《ふれあいの地域づくりの輪》が広まり、心豊かに素晴らしく進展していくことを、この書の発刊を機に熱望し、著者の誠意と努力に対し深甚なる感謝の意を表します。

平成四年九月

橋爪総区長 村上 静雄

推薦の辞

村上喜代志君が教職を退いてから、既に十数年になる。

退職後、永年^{あた}温めて来た両親の日記を克明に洗い出して、「ある明治人の生涯」と題する父の伝記を上梓した。その頃から郷土の資料を収集し研究を進めていたことは知っていた。退職後、何年間か郷土橋爪の神社総代をしている間に郷土の資料を^{あさ}漁り、父の伝記の次にはこれをと決意していたものらしい。

『橋爪の歴史』を上梓するに当り、その序文を請われた。不肖の私などその柄^{がら}ではないと断ったのであったが達^たつての依頼に引き受けざるを得なかった。が、今では引き受けたことに感謝している。

最初はそれ程とも思わず読み始めたのが、その内、文の内容に惹^ひかれ他のことに心に向かず、丸一日半の通読になってしまったのであった。

彼が此れ程膨大な資料を集め執筆に全精魂を傾注していたことは知らなかった。

元教職者だけあって、若く余りその方面に興味を持たない者をも引き込んで行くだけ

の説得力も文の魅力もあった。

私は以前、源平の昔に、源頼朝みなもとこのよりともの命で加藤家の祖先が、吉野より奥州に逃避する異母弟、源義経逮捕のため伊勢よりこの地橋爪よしづねに駐屯を命ぜられ土着したらしい歴史を調べたことがあり、この土地が中世よりの重要な隠れ道であったことは知っていたが、これ程複雑な多様の土地柄がらだとは知らなかった。

現在この地橋爪に住む人も、将来に住もうと思う人も、又縁故のある人にも、一読再読してこの土地を再認識するには絶対必要なる貴重の書と推薦して止まない。

平成四年九月二十日

日本作家クラブ理事長 二階堂省

はじめに

ふとした事から、橋爪の歴史を研究したいと考えて、着手したのは昭和五十五年の春浅いころでした。

それから、いつの間にか十三年の歳月が流れてしまいました。

橋爪に関する資料は大変少なく、その収集は困難でした。断片的な資料を基にして、関連する各種の文献を読みあさりましたが、調査すればする程わからない事が多く、自分の浅学を恥じるばかりでした。

歴史は公正で冷静な目、それにある事柄と別の事柄を結び合わす透徹した推理が必要で、非才の自分には仲々の重荷でした。

読み返して不備の部分が多いのに驚き、公開せずに書齋に内蔵して置こうと思いましたが、先輩の方に「これを基にして、次の方に研究していただく資料とすればよいのではないか」と、お奨めを頂戴し、敢えて上梓させて戴くことに致しました。

小書は完成したのではなく、研究の途中でありますので、誤記、誤認、不充分、そ

の他にお気付きの点をご指摘願えますれば誠に幸甚です。

小書を基礎にして、郷土橋爪の歴史を更に発掘していただければ、筆者の喜びこれに過ぐるものはありません。

なお、小書の刊行にあたり、貴重な資料を残して戴きました諸先賢、ご指導に預りました先輩各位。また、ご多忙の処を序文を賜わりました日吉地区々長会長村上静雄氏、養老町文化財保護協会々長藤田信誠氏、日本作家クラブ理事長二階堂省氏、並びに印刷製本に格段のご労作をおかけ致しました養老町宇田出身の中邦印刷株式会社々長黒田恒彰氏に、厚く御礼を申し上げます。

平成四年十月十日

村上 喜代志

凡例

- 1 読みにくい年号にふりがなをつけましたが、年号の読み方は一定したものではなく、文献によってまちまちですが、最も一般的な読み方に従いました。
- 2 和年号のあとの（ ）内の数字は西暦年数です。
- 3 個人名の読み方も年号と同じ方式によりました。
- 4 個人名には原則として明治以後の人には敬称を付し、以前は歴史上の人物として敬称を略しました。但し「第三十七章史上の人物」については、趣旨より考慮してすべての敬称を略させていただきました。
- 5 せまい地区の事であり、筆者に関係の人物も登場しますが、公正を旨として記述しました。
- 6 古記録類を巻末に載せたいと思いましたが文章が難しく、また紙数が膨大となるので別の機会に譲りました。
- 7 参考文献は書中に記したものの以外は巻末に揭示しました。

目次

一、象鼻山古墳群	一	十一、奥州の大軍橋詰を通る	三七
二、篠塚神社	三	十二、志の塚の古歌	三九
三、篠塚神社のご祭神	五	十三、舟田合戦で石丸軍橋詰を焼く	四三
四、秦民と垂穂郷	一〇	十四、象鼻山西の激闘牧田合戦	四六
五、古橋爪（橋詰）の所在地	一三	十五、念長寺	五一
六、古橋詰を通っていた伊勢街道	一七	十六、多芸郡椿野合戦と多芸一揆	五五
七、流れ七社の伝説と篠塚神社	二一	十七、織田信秀の多芸口放火	五八
八、源義経と岡ヶ鼻	二三	十八、信長の多芸山麓放火（七坊災上？）	六〇
九、別所寺・多芸七坊の成立	二七	十九、大墳城攻撃と住民の動員	六四
十、別所寺（久保寺双寺）焼討ち	三〇	二十、竹中半兵衛の隠れたところは？	六七
		二十一、八幡神社のある加藤家	七〇
		二十二、高木氏橋爪に来たる	七二
		二十三、橋爪集落の変遷と武佐祭	七四

二四、関ヶ原合戦と橋爪……………	七七	三七、史上の人物……………	一四八
二五、牧田川の変遷……………	八〇	三八、煙火（打上花火）……………	一六七
二六、橋爪の水害……………	八七	三九、近代の象鼻山と爆弾投下……………	一六九
二七、地震……………	九八	四〇、橋爪の碑……………	一七二
二八、神社……………	一〇二	四一、戦前より戦後へ……………	一七六
二九、仏閣……………	一二〇	四二、橋爪雑記……………	一七九
三〇、橋爪の領主と明治以後の変遷……………	一二四		
三一、橋爪村高……………	一二八		
三二、牧田川両岸地域の水の争い……………	一二九		
三三、橋爪の教育……………	一三五		
三四、生活を支えた養蚕業と割畑……………	一四〇		
三五、薪炭の供給源の象鼻山割山……………	一四二		
三六、兵役と昭和大战……………	一四三		
		附表……………	一八四

一、象鼻山古墳群

「えっ、美濃で一番古い古墳が橋爪にあるんだって」
と、誰でもびっくりする。

象鼻山一号墳がそれだ。古墳とは昔の人のお墓である。昔の人といっても誰もが造ったわけではない。その附近の地域で勢力のあった人が亡くなったとき、造られたものだ。

一号墳は象鼻山の最高部、標高一四二メートル余りのところにある。この場所には現在明治記念碑が建っている。この碑は大正四年（一九一五）、大正天皇のご即位にあたり、橋爪地区の有志者が青年団の奉仕により、栄光ある明治時代を永久に記念するために建立した。

もちろん、この時は古墳とは知らず、村の人たちは、むかしここに城があり、その城跡と思っていた。

この古墳は、長さが約三八メートル高さが約四メートルの前方後方墳で、魏志に現われる邪馬台国の少しあとの西暦三〇〇年前後に築造されたものだろう、とされている。

古墳時代は四世紀から七世紀と云われるが、その最初のころのものらしい。

象鼻山には、これを入れて前方後方墳が二、方墳が一七、円墳が四〇、形状不明が三、合計六二基が現在発見されている。これらを学者の方たちは、象鼻山古墳群と名付けた。

この象鼻山の頂上からは、美濃平野の大半が展望できる。ところが、象鼻山の名は通称で正式には大字橋爪の小字『岡山』である。ほかにも通称で橋爪山とか別所山とも云う。

岡山は『美濃の中山』^{なかやま}の南端にある。中山は『美濃の御山』^{おやま}とも云い、北を中仙道、西と南を藤古川・牧田川に囲まれた小高い山の一群で、幾つかの古歌にも詠まれて有名である。

岡山に古墳のあることは明治末より知られていたが、昭和の終りころより学者が注目するようになり、昭和六二年（一九八七）二月東海古墳文化研究会の赤塚次郎氏ほか四〇名の方が六日間にわたって調査された。また、平成元年（一九八九）四月の三重大学八賀晋教授を中心とする同大学グループと県教委町教委の合同調査によって、ほぼ輪郭がつかめるようになった。

一号墳のような立派な古墳があることから考えると、その時代に既に当地方には、こうして葬られるような有力者が居住していたらしい。

それが橋爪地区であるか、或はもう少し離れたところであるかは分らないが、象鼻山よりあまり遠くない場所であるのは確かである。

二、篠塚神社

篠塚しのづかの名を持たれる神社は、橋爪のほかには岐阜県はもちろん全国的にも聞いたことが無いと、祖父平三郎氏父直広氏と三代にわたる担当神職の大橋正広氏は言われる。

全国に会員を持つ歴史研究会機関誌に、同名の神社の有無を調べて欲しいとの依頼文を昭和六一年に載のせたが回答が無かった。

氏神の篠塚神社の由緒ゆいしよを調査すれば、橋爪の起源も分かるのではないかと考えて、その研究に入ることにした。

篠塚神社の神社としての最も古い記録は美濃国神名帳に見られる。この神名帳がいつ頃編集されたかあきらかでないが、恐らく第六二代村上天皇（即位天曆元年・九四七年）から第六六代一条天皇（退位寛弘八年・一〇一一年）の藤原時代にできたものと云われている。

神名帳には美濃国三四五社、うち多芸郡一六社石津郡二三社が載っているが郡域の変遷もあり、現在の養老郡には一七社があったと推測されている。だが、この中にも確実と言えない神社が四社、場所不明が三社ある。

日吉地区では別庄の中山南明神（白山神社の境内社の中山神社がそうではないかと思われるが不確実）、それに宇田の大^{おおあがた}県明神（宇田の五社神社には大県・三島・八幡・住吉・春日の五社が祀^{まつ}られている）と篠塚神社の三社があり、いずれも正六位上の格式を持たれている。

明治二年（一八六九）六月の橋爪村神社書上帳に「古は^{いにしへ}大酒^{おおざけ}大明神、または逆髪^{さかがみ}大明神また篠塚大明神とも称し奉り候。朱印一二〇石御座候由も申伝候今は御座なく、尤も^{もつと}勧請^{かんじよう}奉る年号相知り申さず候。先々の御棟札は慶安三年流失仕り候」とある。

慶安三年（一六五〇）九月一日二日（新暦九月二十六日二十七日）の大洪水は『枝広の大水・ヤロカの大水』といわれ養老・岐阜間は舟で往来できたという。死者三〇〇六人、牧田川堤防は岡ヶ鼻^{うしかね}ほか数カ所破壊、新宮野^{みやの}ができた。徳川三代將軍家光が死ぬ前年で、領主の大垣藩主戸田氏鉄^{うでかね}が尼ヶ崎より入封して十五年目だった。

神社が流失前にあった場所は象鼻山の南の麓の岡ヶ鼻で、現在の東洋アドバンス（ブロック）橋爪工場の附近と云われ、その跡地に神明神社を^{こんりやう}建立したと伝えられている。

この大洪水に、神殿・拝殿・宝物・古記録などはすべて流失したが、二体のご神体の一体が今の境内の大樹にかかり、その地を鎮座地として再建したと云われている。

古い時代には国司（いまの県知事）が、毎月朔幣を奉ったのが例であった。朔幣とは毎月一日お供え物をして祭文を捧げることである。

昭和二二年の新憲法（日本国憲法）実施までは、養老郡の神饌幣帛料供進指定村社三二社に含まれていた。日吉地区では五社神社と篠塚神社のみであった。

三、 篠塚神社のご祭神

篠塚神社には、どのような神様をお祀りしてあるのだろうか。

ご祭神は大酒大明神おおさけまたの名を逆髪大明神さかがみと申し上げ、後世になって篠塚または信濃塚つみ大明神とも申し上げるようになった。逆髪は酒神の、信濃塚は篠塚の宛字であろうと云われる。

塚とあるのは、むかし神社の鎮座の場所が塚の上か近辺にあった事を、あらわすので

あろうし、篠はその塚の附近に篠が繁茂していたのを示す。塚とは古墳であろうが、古墳を神社に利用したのか、それとも古墳の中にご祭神またはご祭神に關係の方が眠っていられたのかは、全くわかっていないし、その塚は現在はない。

ご祭神の生前のお名前については、『養老郡志』の編著者で橋爪の生んだ大学者である大久保休吾氏が、大正年間から昭和初期にかけての研究で、秦はた河勝公はたのかかつであると推定されたが、最近数年間の調査研究によって、古事記・日本書紀・新撰姓氏録しんせんしやうじろくなどの古い書物にあらわれる秦氏はたの祖先、秦酒公はたのさけのみみ（秦造酒はたのみやつこさけ）であり、その子孫で著名な河勝公をも合祀せられている事が、ほぼ確実視されるようになった。

秦氏はたは古代中国の秦しんの始皇帝（万里の長城を造った人。BC二二〇歿）の三世孫、孝武王より出たが、秦滅亡後、子孫は朝鮮半島に逃れ秦韓という国をつくったが秦韓もまた滅亡、更に遺民は日本に渡来した。

秦氏の子孫、弓月君ゆづきのきみ（融通王）が一族を連れて大挙我が国に移住したのは、一五代応神天皇の御代と前述の古書は云う。弓月君は百濟より帰化したが、その数は一二七県九二種一八六七〇人、七〇五三戸で、これを国郡に分置して養蚕や絹を織る仕事に当たらせた。

秦の酒公は百八十種勝をひきいて、上等の絹織物を庸調（租税の一種）として朝廷に多

量献上したので、禹豆麻佐（ウツマサ後に太秦）の姓の賜つたと日本書紀にある（百八十種は多種多様の意味であらう。勝は諸説があるが令制の伴部にあたる下級管理職か）。

それ以来秦氏は古代の名族として記紀はもちろん、奈良時代の続日本紀には五三回も登場している。

秦氏の後裔の秦河勝朝臣は、欽明・敏達・用明・崇峻・推古の五朝に仕えて功績があり、特に宮中神楽の制定と会計制度の確立に力を尽くし、また熱心な仏教徒であり、聖徳太子のご寵愛が深かった。

推古女帝の摂政が聖徳太子で、推古十一年（六〇三）十一月に太子より河勝公に仏像を賜わり蜂岡寺（後の広隆寺）を造って奉納している（日本書紀）。

このことについて永久四年（一一一六）三善為康が撰した朝野群載の承和五年（八三八）一二月広隆寺縁起には「推古十一年冬に仏像を受け、推古三〇年に聖徳太子のために河勝が建立した」とある。

また、仁和（八八五〜八八八）の資材交替実録帳には「金色弥勒菩薩老軀居高二尺八寸、所謂太子本願御形」と記載されている。

聖徳太子の薨去（こうきょ）（六二）後、蘇我馬子（そがのうまこ）が政權を執り六二六年逝去した。その子が蝦夷（えみし）孫（いゝか）が入鹿である。入鹿は父をさしおいて皇極二年（六四二）、太子の御子の山背大兄皇子（やましろのおおえのみこ）を襲つて皇子を始め一族をことごとく殺した。そして朝廷における太子の残存勢力の一掃を図つた。

この時、秦河勝公も追われて兵庫県の赤穂に逃れた（大避神社由来記。広隆寺記には流罪と記してある。）その赤穂の坂越に建てられたのが大避神社（旧郷社）で、ご祭神は大避明神また大酒明神とも云い、河勝公をお祀りしてであると云う。赤穂は四十七士で名高い町である。

大酒神社は他に、広隆寺境内社、愛媛県青島、山口県仙寄、油谷にも存在するとのことだが詳細は不明である。

河勝公が前述の欽明帝からの五朝にお仕えしたとの伝承にはいささか疑問がある。欽明帝の崩御が五七一年で入鹿の乱が六四二年、この間が七一年間あり常識では信じ難い。河勝公が特に長命だったとの記録もない。

朝廷を追われた河勝公が橋爪に來られたとの確証はない。入鹿の乱で逃れたのは河勝公だけでなく、その一族もそうであつたろう。そのうちの誰かが秦の民の多数居住する

橋爪に来ることもあるのが当然である。

その人が秦民統合のための神社を建立したとしても不思議でないし、それ以前秦民が当地に分置されたときに精神的支柱として、祖先を崇拜する祠はたらのようなものを造ったとも考えられる。また河勝公が仏像を賜わったとき、仏教信仰の厚い公が有力秦族のいるところに模造を供与したかも知れない。更に壬申じんしんの乱（六七二）で戦功を挙げた橋爪の秦族の統領をも、祖先と共に祀りしたとも、ご神体から推察可能である。

ご神体は二柱あり、ご一体は高さ二尺一寸五分（約六五センチ）の仏像で観世音菩薩と云われる。木彫金泥塗の立像で、大久保休吾氏は広隆寺の仏像の模造であるとされている。

だが、広隆寺の国宝弥勒菩薩とは外觀が全く違うのでいぶかしい。太子より河勝公に賜わった仏像は百済より贈られたものと言われるから、太子本願御形とは異なるかも知れない、とも考えられる。

以前からあった仏像は慶安三年ヤロカの大水で流失したらしく、現在奉安の仏像は洪水二〇年後の寛文十年（一六七〇）に開眼供養されたと棟札にあるので、そのとき新しくお作り申したのであろう。その際の新像は以前のを模造したのか、全く別の華やかな像をつくったのかは不明である。

もうご一体は高さ七寸五分（二三センチミリ）の木彫の立像で無冠、有髭、直衣よりの衣服を召された様式の彫刻像である。ヤロカの大水の際、大樹にかかったと伝承されるのは、舎人とねりふうのこのご神体ではなかったろうか。

秦氏をお祀りした神社は養老郡には他に見られない。この神社を氏神として多年崇敬してきた橋爪が、秦の民の居住地であつたと考えても決して無理ではない。現在岡山の東に桑の木原の地名がある。この附近でとれた桑の葉で秦の民が養蚕したのかも知れない。

篠塚神社は美濃国神名帳によつても一千年、もし、秦河勝公の時代からとすれば一三五〇年の歴史を持つことになる。

四、 秦民と垂穂郷たるほこう

秦の民を多数この地に配置した理由は何であつたろうか。国郡に分置するのは中央政府の方針だったが、異国の一族をあまりに少数ずつ分散しては言語習慣の違いが生活に困難をもたらすので、かなりの数であつたろう。それだけに美濃に割当てられた秦民を

どこに置くかには、国府の役人も困ったと思われる。

当時の美濃の中心は西濃で、国府（いまの県庁）は垂井町府中にあった。国府の無い時代も東国への出入口にあたる西濃は政治文化で重要な地位を持っていた。

府中より橋爪までは二里程度（約八キロ）、遠からず近からず監督も可能である。低湿でないのでたてあな竪穴住居も建設しやすい。

古橋爪は大和・伊賀・伊勢より東山道や国府に通ずる主要道の伊勢街道に沿い、水利がよく、しかも水害に遭うことも少なく、移住の先進文化を持つ秦民族が生活を営むのに最も適当な場所と考えたのであろう。田畑や家屋の水没の恐れのないこの地は、朝廷に奉獻するための養蚕織絹にも有利であつたろう。

古橋爪に秦の民が居住していたと思われるのは、篠塚神社の由緒ゆいしよだけではない。奈良にある正倉院文書中の寧楽遺文ならいふんに優婆塞貢進解うはそくこうしんげがあるが、その一通に「秦公豊足年廿九、美濃国当嗜郡垂穂郷三宅里戸頭秦公磨之戸口」とあり、天平四年（七三二）三月二五日の日付が記載されている。

二九歳の秦公豊足が住んでいた三宅里はどこだったか。三宅里は屯倉（ミヤケ、屯家、御宅）であろうと云われるが、垂穂郷の一部であることは間違いない。象鼻山の南麓か東

麓か、いずれにしても朝廷に奉納する諸物資を収納保管した屯倉（後にはその土地をも云う）を、この地に置かれる事もうなずける。

彼らが住んでいたと思われる古橋爪は、象鼻山麓の岡ヶ鼻一帯より東南方に拡がり、牧田川河川敷を含む地域であろうと考えられる、かなりの大集落であつたらしい。

ここに名前のあらわれる垂穂郷とは何であろうか。

養老郡は古代は多芸郡たぎと云い、現養老郡と海津郡北西部や大垣市の南西部を含む広大な地域であつたが、斉衡二年（八五五）石津郡（上石津・下石津）を分離した。多芸は当芸・多伎・当耆・当嗜・多紀とも書かれる。

承平七年（九七三）に源順みなもとのとけうが撰した倭名類聚抄わななうもいじゆしやうによると多芸郡には八郷があつた。郷とは租税や労務提供、兵士の徴募等の行政単位で現在の村のことである。

八郷は富上・物部・立野・有田・垂穂・田後・佐伯・建部で、その所在地は一千年以上の昔のことでハッキリしないが、多くの学者によっていろいろと推定されている。

だが、垂穂と立野については全くと言っていい程わかつていなかった。垂穂は乗穂とかいた古記録もあるが、いづれかが、書き写しの際の誤りであろう。垂穂の方が多いので本書はそれに従うことにする。

篠塚神社のご祭神から見ても、また、他の地域にはそれらしい処が見当たらないこと、更に前述の諸般の状況から推察すると、垂穂郷が古橋爪の地域であったのは、ほぼ確実と考えられる。

ところで、ここに居住していた秦の民はいずこに消えたのだろうか。

そもそも、固有の日本民族なるものがあつた訳ではない。アイヌ、蒙古、朝鮮、南方中国、北方中国、タイ、ベトナム、カンボジアなどの混血融合した人々から日本民族は成立したと云う。秦の民も長い歴史の過程で何百回の混血を繰り返しながら、日本民族の中に埋没していったのであろう。

五、古橋爪（橋詰）の所在地

むかしの橋爪はどこにあつたのだろうか。現在の橋爪にも少しはいたかも知れないが、大部分の人たちはどこに住んでいたのか、言いかえれば、主たる集落はどこだったのか。いままでの話しの中で少しく触れたが、ここでくわしく考えてみよう。

橋爪は徳川時代の中期以前は橋詰と書かれていた。これは昔、牧田川に長い橋がかかっていて、その橋の詰に村があつたので、この名がついたと云う。

橋があつたのはいつ頃なのか。何の記録も残っていないので想像するより方法がない。

戦略上、あるいは架橋技術上より古い時代に（徳川期までも）長橋を造ることは殆どなく、この地を通る街道の重要性を示すのだが、養老山系の東麓を北伊勢よりたどる伊勢街道は、桜井より牧田川を渡って古橋爪に達し、象鼻山麓を別所を通り南宮山下より国府に通じていた。

伊勢街道については項を改めてくわしく述べるが、桜井・橋詰間の牧田川に長橋をかけて通るような人は、よほど身分が高く、大勢の随行の人々を従えた方ではなくてはならない。戦国の武将や旅人のために、わざわざ橋を造ることはあり得ない。牧田川は増水のときは急流で、木造橋は簡単に流されてしまう。

過去の歴史を見ると、一三〇〇年ほど前に三人の天皇が、平和裡に通過されているが、お二人は女帝である。お一人はお通りの時期はわからないが、お二人は一月一二月の寒い季節である。女官を交えた数千人以上の行列が、寒風に吹きさらされながら牧田川を徒歩で渡られる事は考えられない。長橋をかけたのは、この折ではないだろうか。

また、そのときの橋の位置はどこだったのか。

牧田川の現流路の西側、桜井側の右岸堤に沿い五日市にいたる約九百メートルの細長い堤防西の地域は大畔^{おおぐら}と云って古来より橋爪分で、昭和一四年（一九三九）五月発行の日吉村土地宝典にも明記されている。

更に、同宝典には岡山（象鼻山）の西端より金屋境までの牧田川河川敷全部が橋爪分となっている（高畑も橋爪に含まれていたと伝承されている）。これより推察しても、昔の牧田川は現流の西側を桜井・上方・竜泉寺・勢至^{せいし}の真下を小倉・津屋方面に流れていたものと考えられる。

大畔は、この旧流の左岸堤ではなかったろうか。

流路が変わったのはいつ頃かわからないが、大畔の地名が現在まで残っている事から見ると、そんなに古い時代ではない。「永禄九年（一五六六）大洪水、殊に西部甚しく牧田川は出水のため河状を変じたり」と不破郡志にある。

しかし、この時、現流のようになったとするのには疑問がある。

中世のころ旧流の少し下流域の勢至に鉄製品製造の鉄座が繁栄し、その鉄座確認の文書が数通残っているが、それを見ると天正一一年（一五八三）三月羽柴秀吉、同年九月池

田信輝の発したものが最後になっている。

それまで、勢至を支配する為政者が交替することに鉄座を保護する文書を出しているが、天正一一年で切れている事は、その後しばらくして鉄座が消滅したことを意味する。

鉄製品を作る原材料や製品は重量物なので、牧田川の水路を利用した舟運で輸送されていた部面が多いと考えられているが、その舟運が不可能になるのは、水深が舟が通れないほど浅くなるか、川が無くなるかである。

天正一一年以後の牧田川は、永禄大洪水の二〇年後の天正一四年（一五八六）に大洪水があり、またその前年に岡ヶ鼻が盛り上がる大地震があった。恐らく、この頃、牧田川は流路を変えたのではないか。

更にこれより六四年後の慶安三年（一六五〇）の大水のあと、領主に出した橋爪の石高の変化を見ると、大水の前は九三六石であったが、大水後は五〇〇石、荒地の高を入れて五一二石に減少している。被害の水田は現橋爪の西側と南側という。

この三度の大洪水のどれであったろうか、橋詰の真ん中を貫いて大水が流れ、大畔分だけが西側に残ってしまったのである。

そして長橋は古橋詰集落の西端の大畔より西へ、現桜井沖にあった古牧田川にかかっ

ていたのであろう。橋詰の主集落は、この長橋の詰より牧田川河川敷、象鼻山の南と東、岡ヶ鼻一帯に拡がっていたのではないだろうか。

桜井沖を古牧田川が流れている頃は橋詰にも、さしたる水害は無かったようだが、永年にわたると逐次土砂が堆積して河床が高くなり、水害が見られるようになる。織豊時代以後はその数を増し、堤防などの治水工事の発達していなかった当時は、そのたびに人家は流され田畑は埋まり、人々は塗炭の苦しみを味わった事であろう。

この永祿・天正・慶安の三大洪水以後、岡ヶ鼻の古橋詰主集落はもとより、西川原・北川原・十日市・八幡神社附近・榎^{えのきまち}町それに高畑から北の現サーブスエリアを含む牧田川河川敷に散在していたであろう民家は、他の地域に移住した人々もあつたろうが、多くの人たちは微高地の現橋爪の地に、しだいに集落を形成していったものと考えられる。

六、古橋詰を通過していた伊勢街道

伊勢街道は養老山脈の西側の上石津を通る西街道と、山脈の東側を山裾に沿う東街道

とがあるが、西街道は山中の難路で一般には東街道を云う。

美濃の政治文化の中心であった西濃、特に垂井の国府より伊勢・伊賀・大和や奈良の都に通ずる伊勢街道が、南宮神社附近から境野・別所・橋詰と美濃の中山東麓をたどり、牧田川を渡って桜井より養老・南濃・桑名方面へ經由していたことは疑いを入れない。

伊勢街道が関ヶ原あるいは今須より牧田を通して東街道へ抜けていたとも言われるが、この道はバイパスで、後世になって中仙道や北陸道より桜井へ短絡する通路として、多用されるようになったのだろう。

美濃における主要古墳の分布状況を見ると、だいたい東山道に沿って西進し、垂井あたりより南進している。

古墳築造は一千数百年前の人々にとっては大土木事業であったが、東山道から伊勢街道に沿うように存在しているのは、何を示すのであろうか。

伊勢街道は現在の東海自然歩道と重なることが多いのだが、昔は幅員も騎馬武者が疾走しながら、すれちがえる九尺程度以上あったと思われる。天皇行幸の際は更に広がったろう。地元の人は御幸街道とも桑名街道とも云う。（九尺は畳一枚半の長さ）

この街道の特徴は水路が併用できるところにある。古牧田川沿いの多芸七坊があった

ところは湊（舟着場）だったろう。牧田川より大川（揖斐川）へ出て桑名へ赴く、水路を利用した人の往来や物資の輸送は、織豊時代以前は素晴らしく繁栄したらしい。この意味で、陸路・水路両方を合わせたものを、伊勢街道と云うのが正しいであろう。

（やまとしたけるのみこと）

日本武尊（日本書記の名。古事記では倭建命）の伝説は四、五世紀の事であると云われるが、この街道を南下して伊勢の能褒野に行かれた。このとき、尊の足が『当芸当芸しく』なったので当地方が当芸野と呼ばれるようになり、多芸の語源になったと云う。

（じんしん）

壬申の乱（六七二）は皇位継承に関する古代最大の大乱であったが、大海人皇子（四〇代天武天皇）は、吉野より北伊勢を経て古橋詰を通り不破郡の野上行宮（かりのみや）に赴かれている。

四一代持統天皇（女帝で天武帝の皇后）も大宝二年（七〇二）の三河行幸のお帰りのときに古橋詰を通られたらしい。大宝律令を天下に公布した年であるが、女帝は皇位を四二代文武帝にゆずられて上皇のご身分であった。

四四代元正天皇の養老行幸は靈龜三年（養老改元七一七）と翌養老二年（七二八）の二回だが、初回の折、不破行宮より養老への途次、古橋詰をお通りになり、翌年は養老より伊勢街道をそのままお帰りになった。三七、八歳の女帝として大変なご旅行であった。

四聖武天皇は天平一二年（七四〇）に伊勢方面より養老に行幸され、一月二十六日に橋詰をお通りになり不破頓宮に入られた。新暦では二月二三日にあたる寒い季節で、牧田川を渡られるときは輿こしの中で、どう過ごされたであろうか。帰路は近江へ出られたようである。

聖武天皇は翌天平一三年に諸国に国分寺を建立する詔を出されたが、これより六八年前の壬申の乱後、この乱の功績者たちが争つて建てた川原寺かわらでら様式を持つ美濃の諸大寺は、平成四年現在二七ヶ寺発見されている。

この大寺群の造営や大垣市青野町的美濃国分寺建立の際の人員・資材を都より輸送するのに、この街道の水路・陸路が使用されたと考えられ、古橋詰はその往来で、ずいぶん賑やかであつたろう。

更に下つて源義経が兄頼朝に追われて大和方面より伊賀伊勢、そしてこの街道を北陸へ抜けた奥州への逃避行（文治三年・一一八七）。建武の中興の際の北畠顕家軍の奥州より都へ上ろうとしたとき（延元三年・一三三八）。尾張織田信長の西美濃侵攻（多芸七坊焼討ち永禄五年・一五六二）。岐阜織田軍の長島一向宗攻撃（天正一二年・一五七三、四）。秀吉軍の桑名の滝川攻め（天正一一年・一五八三）。関ヶ原合戦時の毛利・長曾我部軍な

どの伊勢路より美濃中山展開（慶長五年・一六〇〇）などにも伊勢街道は使用され、橋詰はその通過点、中継点となった。

このときの伊勢路よりの北進軍は、牧田川左岸堤に沿う道をも、右岸の道と同時に利用した地図もあり、この頃は左岸道も伊勢街道に含まれていた、と考えてもよいであろう。なお、左岸の道は岡ヶ鼻で合流して、それより北へは一本である。

七、流れ七社の伝説と篠塚神社

上石津町堂の上（旧時村）湯葉神社縁起に篠塚神社は『流れ七社』の一社だと書かれている。

八百年あまり昔の平家全盛のころ、この時村烏帽子岳（熊坂山）附近に熊坂長範を首領とする数百人の盗賊が住んでいて、日ごと夜ごとに中仙道や伊勢街道の宿場、あるいはそこを通る旅人を襲って金品を奪っていた。

長範は北陸の生まれと云い、どうして時村に住みついたか分からないが、源氏の遺臣

で源家再興のために軍資金を集めていたとか、また、権力者や富商から取りあげた財宝を貧民に配った義賊とも云う。

治承二年（一一七八）と云えば平清盛が太政大臣になつて一一年後、娘の徳子（建礼門院）が言仁親王（八一代安德天皇）をお産みした年である。長範は淡路島の葦原ヶ岳あしはらの麓、岩屋大明神の八柱のご神体を盗み、熊坂山の隠れ家にかくしたが、夜な夜な怪光を放つので驚いて川に投げた。

この川は牧田川の上流で、流されたご神体は沿岸の人に拾いあげられた。最初のは遊波明神で時村の湯葉神社に、二つ目は流彦明神で二の宮として多良の大神神社おおみわに、三つ目は長彦明神で三の宮として一之瀬の長彦神社に、四の宮は萩原で拾われて麦彦明神に、五の宮は麦房明神として牧田上野に、六の宮は七頭明神で伊勢の国の人に和田川原で拾われて三重県の川合村に、七の宮は橋爪の人に拾われ篠塚神社に祀られた。もう一体は長範がどこかに取り落したらしく不明である。

この七社を流れ七社というが、それぞれの神社の勧請年月かんじようや由緒から考えると信じ難い。長範はその四年前の承安四年（一一七四年、尊卑分脈による）三月、まだ牛若丸といつていた源義経が十六歳のとき、金売吉次と京都の鞍馬を抜けだして奥州平泉へおもむ

く際、青墓（大垣市）の長者の家に泊った。

その夜、長者屋敷に押し入った長範は牛若丸に斬られて死んだと云うから、年月に辻褄（つじつま）が合わない。

流れ七社は宝物のような何かが流されてきたのか、長範がそれぞれの神社に何かを寄進したのか。最も考えられるのは、大勢の部下を持つ長範やその一味が、時村の本拠より中仙道や養老山脈の東方地域に出動する折の連絡所、あるいは根拠地とした場所ではなかったか。

岡ヶ鼻の篠塚神社に集結し、象鼻山麓（しづく）を疾駆する盗賊の群像が睨（まぶた）に浮かぶようである。

八、源義経と岡ヶ鼻

「義経が弁慶をつれて岡ヶ鼻を通っている」と、言えば「本当かな？」と驚くだろう。義経は一の谷、屋島、壇の浦と平家軍を打破って平氏を滅（き）ぼしたが、兄頼朝に忌避（きひ）されて、日本国内を逃げまどう身となった。

文治元年（一一八五）十一月、吉野山で愛妾しずかごせん靜御前と別れた義経は、ひそかに近畿地方のいずこかに潜伏していたが、文治三年、北の方かたのう藤御前と弁慶など僅か十数名の供をつれて、はるかに遠い奥州の藤原秀衡ひでひらを頼つて二百里（二里は約四キロ）の長い旅にでる。

同行の藤御前は「平氏にあらずんば人にあらず」と言つた平大納言時忠の娘で、逃避行中に妊娠し、山形県新庄市と最上町の境の亀割山で女の子を出産し、亀鶴御前と名付けられる。

この母子は文治五年（一一八九）閏四月、衣川の高館で秀衡の息子泰衡やすひらに、義経主従が急襲されたとき、共に死んだと云われている。義経三二歳、藤御前二四歳であつた。

有名な靜御前は、義経に多くの金銀を受けて吉野で別れた後、京都へ戻る途中で財宝に目がくらんだ下男たちに、金品を奪われて雪の中に置き去りにされ、捕われて鎌倉に送られた。やはり妊娠中で生まれた男の子は殺されて、由比ヶ浜に棄てられた。

鎌倉幕府の事蹟を編年体で書いた『吾妻鏡』あづまかがみ（東鑑ともいう）は、文治三年（一一八七）

二月十日、義経が妻や郎党をひきつれ、山伏姿に身をかえて、伊勢・美濃を経て奥州に向かったとの情報が届いたと記載する。そして鎌倉が義経の所在を確認するのは平泉に入ってからで、文治三年九月のことである。

美濃で、どの道を通ったか吾妻鏡では明らかでないが、室町時代初期から中期ころに成立した『義経記』^{ぎけいき}では北陸道の愛発^{あらち}の関を通る。もちろん古来の関は廃止されているので臨時の関であろう。

ここで越前の住人敦賀兵衛^{つるがのひょうえ}の訊問^{じんもん}を受けるが何んとか弁慶の弁説で云い抜け、更に進む途中、五十騎ばかりを従えた加賀の井上左衛門に出合う。義経主従は覚悟をきめたが左衛門の武士の情で無事に通してもらう。

義経記は安宅^{あたか}の関^{くだり}の件は全くふれていないが、安宅での富樫^{とがし}の物語りは恐らく前記二種の話を合作したものであろう。

しかし、義経記も多分に小説的で史実とは言い難いが、吾妻鏡の云うように美濃を通ったのは事実らしい。

伊勢（桑名あたりか）より美濃を経て愛発へ出たとすれば、西街道か東街道か。いずれにせよ伊勢街道を北進する以外に方法はない。牧田より関ヶ原、北国街道のコースは、不破の大関小関の警戒が嚴重で考えられない。

と、すれば橋詰より垂井赤坂揖斐の径路しかない。揖斐よりは藤橋村あたりより現国道三〇三号線沿いに近江へ抜けたのだろうか。

牧田川にさしかかった時期はわからない。東街道の水路を利用すれば勢至か竜泉寺で舟より東岸に上がったろうが、山伏姿の一行が舟を使ったとは思えない。さすれば桜井で渡渉したのであろうが、蕨御前は裾をからげて一人で涉ったか、誰かに背負われたらうか。御前には侍女がついていたとも云われるが背負ったとすれば男の家来だったらう。そのころ橋詰と別所とは続き、別所寺（久保寺双寺）の万仁寺清水寺の二大寺を始め、百余の寺坊や多数の民家で、この附近は繁昌していた。

山伏姿の義経たちが、別所寺へ参詣して喜捨を乞うたか宿泊したか、或いは笠で顔をかくして足ばやに境野へ通り過ぎたか、人目を避けたい旅でもありだったのであろうか。

常勝の大將軍と云われ、数万の軍勢を叱咤した身が、あわれ、いまは象鼻山の松風の音、篠塚の篠のそよぎにも気をくばって、足弱の蕨御前たちをいたわりながら、ひそと歩く義経や家来たちの姿が、目に見える思いがする。

九、別所寺・多芸七坊の成立

別庄は現在の正式区名だが、いまだに別所と呼ぶ人が数多くいる。筆者も子供のころは他の子供たちと同じように、別所が正しい村名だと思っていた。

別所が別庄に変わった時期は明らかでないが、阿弥陀堂の半鐘の銘に「文政十丁^{ていがい}亥年（一八二七）三月中旬美濃国多芸郡別庄村広徳寺」と記載があったので江戸後期には別庄が既に使われていたのか、あるいは制作者の誤記か、よく分からない。

元禄一四年（一七〇一）の古文書、明治二年（一八六九）の神社書上帳には別所の名称が使用されているので、長い期間にわたって別所と言われていたと思われるが、江戸後期から別庄と併用されていたのかも知れない。

この別所に九十九坊を持つ大寺があったとの伝承があり、象鼻山別所寺という。

別所寺は多芸七坊の一寺といわれる。多芸七坊とは津屋の藤内寺・小倉の光明寺・養老寺・柏尾寺・勢至の光堂寺・竜泉寺・別所寺の七寺で、中世以前に栄えたが、現在養老寺以外は移転して寺名を変えたり廃寺となったりしている。

多芸七坊の名称は多芸山（養老山系北部を徳川期までこのように云った。多芸郡の山との意

味であろう)の麓に点在する七大寺であるから、そのように呼んだか、多芸郡に古来より存在する七寺の意で云われたのか分らない。両方の意味をこめているとも思われる。

七坊の創建は天平宝字(七五七―七六四)頃だと伝承されている。奈良朝華かなりし時代で弓削道鏡ゆげのどうきょうが大きな勢力を持っていた。始めは法相宗で平安時代に天台宗に転宗し、更にその後、浄土真宗に帰依した寺もある。

永祿五年(一五六二)織田信長の西美濃侵攻の折、大部分の寺は焼かれたと伝えられるが、別所寺は建武二年(一三三五)の乱で兵火にかかり焼失したとされている。

多芸七坊のような寺院が何のために建立されたか。全国の多くの寺院が経営維持困難によって併合令が出されたのが靈龜二年(七一六)で、それより年月のそれほど過ぎていない時期に、目的不明の大寺が至近距離に建立されることは考えられない。一二〇〇年以前のことで、その事情は全く分かっていないが、その頃の情勢より考えると最初は寺院ではなかった、と思われる。

壬申の乱(六七二)より奈良に都が遷うつるまでの白鳳後期に建立されたと推定される川原寺かわらでら様の式の瓦を持つ美濃の大寺は、平成四年現在二七カ寺発見されている事は先に触れた。

これらは壬申の乱に功績のあった豪族たちが創立したものであらうと云われ、西濃よ

り御嵩^{みたけ}までの古東山道に沿った地域に分布している。また、その五、六〇年後に美濃国分寺が造立されたが、それらの寺院の建立に七坊は関係があったものと思われる。

その頃の民家は殆どが四、五坪の竪穴式住居で、彼らを使役^{しえき}して見たこともない宏壮な寺院を建てるためには、都の人々の指導援助が必要であつた。

庶民にとって始めて耳にする諸物資・器材の集積。瓦や塼^{せん}（土を焼いた煉瓦みたいな建築用材の一種）の作り方。大石・大木・重量物の運搬技術。設計・土木・建築・インテリアデザインの技術者や職人の招聘^{しょうへい}など、都との人員の交流、資材の輸送は言語を絶するほど盛んであつたに違いない。

これらは大和・伊賀・北勢より伊勢街道を通つたのであろうが、多量の精緻^{せいじ}な物品や重量物の運搬は山坂の多い伊勢街道の陸路では無理である。従つて伊勢街道の水路、即ち大川（揖斐川）より古牧田川を舟運によつて遡行したのであろう。

だが昔の川でも湊（舟着場）に適する場所とそうでない所があつた。津屋・小倉・養老・柏尾・勢至・竜泉寺・橋詰は、それらの人員・資材の陸揚げと集積、輸送基地に利用されたと考えられる。

その後、役目を終了してからも、これらの基地は大和方面との往来に宿場的な要素を

もって繁栄した事だろう。そして旅人の平安を祈る程度の粗末な木像か石像の道祖神の如きものが祀られたのではないか。

時代を経て、川辺にあったそれらも、水害を避けたり或いは信仰上より逐次高地にあらがり、しだいに整備されて寺院としての体裁と機能を整え、やがて多芸七坊となったと思われる。

別所寺も始めは簡単なものであったろうし、その位置も象鼻山の南麓か東麓あたりではなかったか。

十、 別所寺（久保寺双寺）焼討ち

別所に大寺があったことは、別所白山神社の棟札や飯積八幡神社の記録に見られる。それには昔、天台山正覚院末久保寺双寺という九十九坊を持つ寺院があったと書かれている。この九十九坊とは多数をあらわす表現で、正確な数を示すものではなからう。

この久保寺双寺と別所寺とは同一寺か別の寺院か。数人の学者の研究があるが、同一

寺であろうとの意見が強い。

先の章で述べたように、最初は他の場所であつたろうが、時を経て別所の地に移つた。そのころの寺院の多くは固有の寺号（寺名）を持たなくて、土地の名を寺号としている例が多かつた。

この寺も別所に所在する寺との意味で別所寺と呼ばれたのであろう。寺としてしだいに完備して、正式の寺号がついたあとも、一般の庶民にとっては、やはり別所にある別所寺ではなかつたろうか。

現在の習慣としても「橋爪のお寺」と云つたり「中村のお寺」と呼んだり寺号とは別にその土地の名前で云う場合がある。これは寺号に限らず、娘の嫁入先や実家の里（在所）など、親戚を呼ぶときも土地の名で示すことがしばしばあるのと同様であらう。

別所には久保寺双寺のほかに大寺がなかつたと考えられるので、両寺は同一の寺であらう。

建仁二年（一二〇二）、久保寺双寺内で擾乱（騒動）じようらんが起こつたので、鎌倉二代將軍頼家が、越前の國中島城主黒田直氏の三男、次郎真与に命じて鎮撫させた。これより黒田家が代々久保寺双寺の支配役となつた。真与より九代目の三七郎正常のとき姓を久保寺と

改めた。

これを見ると久保寺双寺という寺院があつたので、それに合わせて改姓したかの如く見受けられるが、後述するように万仁寺清水寺の二大寺はあつたが久保寺名の寺院は無く、豪族久保寺氏が支配する二大寺なので、久保寺双寺と後世に称されるようになったのであろう。

正常が支配していた時期に建武の乱が起り、久保寺双寺が焼討ちされている。正常の改姓が、この焼討ちの前か後か、明らかでないが、久しく寺を保ちたいとの意がこめられている事は疑いない。

建武の乱とは、鎌倉幕府を滅ぼして、後醍醐天皇が政権を回復された『建武の中興』の折、二大勢力であつた新田義貞と足利尊氏が反目して戦つたときで、これ以後、南北朝に別れて全国的な騒乱となるのである。

白山神社の棟札によると、久保寺の鎮守白山大権現は建永元内辰歳（二二〇六）二月に願主黒田氏が建立したとあるので、黒田真与が寺内の騒動を鎮庄して四年後である。

福井県大野市の東南に中島の地名があるが、黒田氏がその城主であつたかは不詳である。だが、ここが越前中島城であるとすれば、信仰の名山である加賀の白山（はくせん）にも近く、

鎮守として白山大権現を祀ったのも、関係がないとも言切れない。

棟札には、建武二年（一三三五）五月一八日、新田氏と足利氏が戦い、足利勢の兵火によつて久保寺百余坊が焼失したので、重役の黒田三七郎源正常が、この所に勧請安置したとある。白山神社も共に焼けて再造したのであらう。

飯積八幡神社の記録では、兵火にかかったあと騒乱の時代だったから寺を再建することができず、寺の田地および焼跡の宅地を耕地として、武家の銘々は作人となり正常は地頭庄屋となった、と記載している。

また、家臣も離散した者が多数あつて、杉山善治郎は京都で中林院大納言に仕え、市橋五郎太夫は足利尊氏の臣河野武蔵守諸直に、善教法師は楠木正成の親族和田氏成の二男であつたから河内の国に帰つて還俗し和田新発意しんぱちと名乗つて後醍醐天皇に従い武名を顕し、正常の弟久保寺五兵衛は高倉三位信雄卿に仕えた。その他の諸士は行方が明らかでない者が多い、と書かれている。

これから考えると、久保寺双寺は後醍醐天皇側の新田軍に味方して足利軍に放火されたが、多数の武士が寺内にいたようである。建仁二年の騒動の際には僧兵がいたから鎮圧に武力を要したのであらうが、一三三年後のこの焼討ちの時の僧兵の存在については

不明である。ただ善教法師の例を見ると若干はいたのかも知れない。

正常より一二代目の久保寺治郎兵衛源時久のとき、足利一三代將軍義輝に寺院再建と知行の下賜を願った。天文一三年（一五四四）五月である。しかし義輝は両件とも許さなかった。これは建武の乱で足利軍に敵対したからではなかったろうか。

久保寺双寺とは久保寺氏が維持管理する二寺院を意味すると思われるが、寺院名については分からなかった。

平成三年に発見された古文書は元禄一四年（二七〇二）に書かれたものと推定されるが、それには万仁寺、清水寺の二寺があり繁昌はんしょうしていて巡礼が札を納めた、とあり、それでも（元禄のこの文書が書かれた当時）田地の字に札掛・坊の街道・油田あぶらでんなどかある、と記載されている。この字名の場所は別所地区内の南の方にあり、確認されている。

また、同古文書には、往古橋爪村岡山別所に天台宗象鼻山万仁寺ならびに地藏堂があり、地藏本尊は近江の国木ノ本村に移った。とも記されている。

昭和四八年（一九七三）四月に焼失した栗原山の象鼻山清水寺せいすいじが往古の清水寺の流れを汲むものであるかは分からないが、何かの関係があるかも知れない（この寺は山寺と呼ばれて親しまれていた）。

推察すると万仁寺・清水寺が並んで（古文書から考えると、恐らく万仁寺が南で清水寺が北で
ある）建っていたので、久保寺氏の二寺の意で久保寺双寺と称されたのではないだろうか。
それを本寺として百余坊があったのであろう。この二大寺と百余坊を維持するために
は支配役黒田一統と家来たちの屋敷、多数の民家（農工商）が要る。別庄の現戸数は二九
戸だが、寺坊だけで現在の三倍以上の面積が必要である。

その頃の別所は大きく、象鼻山南麓の古橋詰より栗原山にかけての、伊勢街道に沿っ
た地域に、多数の坊や武家屋敷、民家が立ち並んでいたのではなからうか。郡境から程
近い栗原側にも、仁王門とか橋ヶ^{はしがまち}町などの関係があると思われる場所の名が残っている。

関ヶ原合戦の古繪図に別所は「橋小別所」と記されている。思うに、寺院の発展と移
動に伴い、古橋詰よりしだいに分村していったのが別所ではないだろうか。これらの大
半が建武の乱で焼失したのであろう。

なお、この焼討ちの月日には疑問がある。

建武二年の五月一八日は足利、新田とも京都にあり、七月に北条高時の遺児時行が信濃
で兵を起して鎌倉を攻める。これを「中先代の乱」^{なかせんだい}というが、この鎮庄に足利尊氏直義^{ただよし}
兄弟は関東に下り、十月鎌倉で叛く。

官軍の総帥新田義貞は、詔を承けて十一月一九日京都を出陣し、十一月二五日三河の矢矧やはぎで交戦、更に進んで十二月五日駿州手越河原で直義を敗ったが、一二日来援した尊氏軍と箱根竹の下で戦いで味方の裏切りにあつて負け京都へ退却する。

その途中であろう、官軍は別所寺附近に踏み止どまつて追撃する足利軍を迎撃する。久保寺双寺焼討ちはこの時と思われる。従つてこの戦いは十二月一八日ならば可能である。

白山、八幡両神社とも五月一八日となつてゐるが、五月は一二月の誤りで、いずれかが古記録を誤写し、また他社がそれをそのまま転記したものだろう。

由緒ある久保寺氏は明治に至つて久保田氏と改姓した。

なお、九十九坊に存在していた僧侶たちは焼失後四散したようだが、養老郡不破郡には往古は天台宗であつたという寺院が非常に多い。この中には九十九坊を逃れた僧侶が設立した寺院が相当あると思われるが、判明しているのは橋爪の念長寺、飯積の光敬寺、表佐の宝光寺である。また不破郡志には一之瀬の天喜寺、高田の莊福寺も含まれているという。

十一、奥州の大軍橋詰を通る

別所寺焼討ちより三年後の延元三年（一三三八）正月、奥州（東北地方）の鎮守府大將軍北畠顯家は、大軍をもって京都をめざして進軍してきた。

『太平記』によれば

「去る程に国司（顯家）の勢十万騎、垂井赤坂青野ヶ原に充満して、東西六里、南北三里に陣を張る」

とあり、大勢力であったが、長途、戦いを繰返しての行軍で軍勢はかなり疲労していた。

顯家は『神皇正統記』（じんかうしやうとくき）を著した北畠大納言親房の長男で、後醍醐天皇の命を奉じて奥羽一帯を平定統治していたが、吉野の南朝の衰退を知ると、京都を足利尊氏より奪還する目的で、奥羽の大軍を率いて、はるばるこの西美濃まで西上してきたのである。

青野ヶ原の戦いでは賊軍の美濃源氏土岐頼遠などを敗ったが、不破の関附近で藤川・黒血川などに拠る足利方の高師泰・（こうのもみやす）師冬・細川頼春・佐々木氏頼らの抵抗にあつて突破できず、止むを得ず伊勢方面へ迂回することになった。

このとき、同じ志を抱く別所寺の生き残りの人々が、奥州軍に加わったかは明らかでないが、言葉の違いもあり難しかったであろう。

二百里も行軍してきた奥州軍は、疲れ果てた身体で美濃の中山象鼻山や別所寺の焼跡を眺めながら、橋詰を通って牧田川を徒渉し養老山麓の道を南進したのである。

南伊勢には顕家の弟の二男顕信と三男顕能が、後醍醐天皇の命を受けて固めていたので糧食武器の補給をしたのであろう。土岐頼遠らの追尾攻撃を執拗に受けながら雲出川くしなが、
櫛田川あたりまでおもむき、それより伊賀の名張を経て奈良に出たのである。

太平記に雪のことは書いてないが、一月でもあり恐らく不破の関附近は積雪も多く、一夫が万夫を防ぐ隘路の大軍の進撃は不可能だったのだらう。加うるに厳冬の食料の現地調達は極めて困難で将兵は飢餓に苦しんだ事も敗因の一つであらう。

関ヶ原より牧田道を桜井へ抜ける事も考えられるが、戦況と十万の大軍を考えれば大半は垂井より橋詰への道を選んだと思われる。

奥州軍はその後、奈良、河内、摂津と四ヵ月余転戦したが戦い利あらず、五月二二日和泉の国の石津（太平記では和泉の境安部野）で、大將軍顕家は二二歳を一期として戦死する。残存の奥州軍も悉く殉じたとある。

古典太平記は悲しげに語っている

「哀れなるかな顕家は、武略智謀その家にあらずといへども、無双の勇將にして鎮守府將軍に任じ、奥州の大軍を兩度まで起こして尊氏を九州の遠境に追下し、君の宸襟しんきんを快く休め奉られしその誉、天下の官軍に先立つて争ふ輩無かりしに、聖運天に叶はず、武徳時至りぬるその謂はれにや、股肱の重臣あへなく戦場の草の露と消へ給ひしかば、南朝の侍臣官軍も聞きて力を失ひける」

十二、 志の塚の古歌

古橋詰附近が「篠塚さとの里」と云われた時代があつたと考えられるが、この里、あるいは篠塚神社に関係すると思われる古い和歌が、二い伝えられている。

神もさぞ ふりくる雨は 志の塚の

うまやの鈴の 小夜深き声

作者は室町時代末期の人で正二位内大臣三条西実隆さねたかである。康正元年こうしょうに生まれ天文六

年に逝去（一四五五〜一五三七）した。内大臣実継の二男公時を祖とする三条西家の四代目で、父は内大臣公保である。

実隆は朝廷の式微を嘆いて足利幕府や有力豪族に、朝廷に資を献ずるよう大いに努めた。飛鳥井雅親に歌を学び、和漢の学に通じ連歌の発達に尽くし、有職故実に詳しくかったという。とくに古典学者として重要な仕事をし、「証本源氏」「六国史」等を著わした。また「古今伝授」「源氏学」は実隆がまとめたと言っているほど関与している。歌集に「再昌草」「雪玉集」、日記に「実隆公記」その他の著書がある。

剃髪して逍遙院と号し、法名堯空、また聴雪、逃虚子ともいった。一般には新六帖逍遙院で知られる。生前の功績を嘉せられて大正四年（一九一五）従一位を追贈されている。実隆の知行地は土岐市・茜部・その他の美濃にあったようだが、橋詰がそうであったかは分かっていない。

その所領に関する用できたのか、歌道で親交の深かった今川氏親が尾張を侵して那古野城を築造中に訪れたのか、橋詰に立ち寄った時期と理由は分らない（日本史人物総覧二七〇頁・歴史研究平成三年六月号五八頁）。

この和歌を見ると、志の塚のうまや（駅）との言葉がある。志の塚は篠塚だが塚は古墳

であろう。古墳は象鼻山にも多数現存するし、山麓の平野部にも沢山あったらしい。旧日吉小学校の運動場拡張（昭和二、三年頃）に使用した土も加藤家の所有する古墳であったし、橋爪火葬場の西にあった盛山、旧子供用埋め三昧、田圃の中のボタのような土盛りも古墳ではなかったろうか。

このような所に篠が密生していたので篠塚と呼ばれたのであろうが、現在では篠は殆ど見当たらない。

うまやの鈴とは駄鈴の事だろうか。駄鈴はむかし官吏が諸国に赴くとき、朝廷から賜った鈴で、駄馬を徴発する証しとして振り鳴らしたものである。伊勢街道に駄馬があったとする記録はないが、もし駄馬があったならば古篠塚神社のあたりは、繁盛した宿駅であったのだろう。

三条西実隆の時代に駄鈴があることは考えられないが、過去を回想して歌ったとも思われる。ふつうの庶民の馬に鈴をつけるほどの余裕は、この時代の人々には無かった。なお、ここで美濃の御山（美濃の中山）に関係ある古歌を、数首あげておこう。

◇ よみ人不知

わかこふる　みののお山の　一つ松

結ひし心 今もわすれず

◇ (新古今) 伊勢

思ひ出や みのお山の 一つ松

契りし事は いつもわすれず

◇ (続拾) よみ人不知

都をは そなたとはかり かへりみて

関越えかぬる みの中の山

◇ 亀山院

いたつらに みのお山の まつことに

なき別れにそ 年ふりにけり

◇ (曾丹集) 曾根好忠

あづさ山 みの中道 たえしより

我が身に秋の くと知りనికి

◇ 知家

いかなりし 美のおやまの 岩根松

独りつれなき 年をへぬらん

◇ (千載集) 能因法師

宮木引 あづさの杣を かきわけて

なにはの浦を 遠ざかりぬる

十三、 舟田合戦で石丸軍橋詰を焼く

明応五年（一四九六）四月、多芸荘へ軍勢が押し寄せて民家を焼いたり毀したりして里民を苦しめた。

当時の合戦は民家寺院神社を焼く事から始まった。これは敵が社寺民家に隠れ、あるいはそれを盾として戦う根拠をなくし、また敵に恐怖感を与えて戦意を衰えさせ、味方の士気を鼓舞する目的で日常茶飯時的に行われた。

第二次大戦時に、米軍爆撃機は日本の大都市のみならず中小都市まで焼夷弾の雨を降らせ、罪なき市民を焼き殺し家を焼いて、日本の戦意を喪失させた。

それは『じゅうたん爆撃』といって、じゅうたん（カーペット）を展げるように、一面に爆弾焼夷弾を撒いてゆくのである。

やる方は戦果が甚大と愉快だろうが、やられる人々にとっては、たまった事ではない。筆者も二回経験したが、立ち並ぶ家を嘗めつくし、迫ってくる天にも届くような紅蓮の炎に気も動転して打ち震えながら、老人や乳幼児を背負ったり手を引っ張って、僅かの食糧や身廻品を持ち、少しでも安全と思う方向へ逃げ惑う。残酷というか悲惨というか、誠に哀れな庶民の状況だった。

明応四年といえは応仁の乱が（一四六七）始まって約三〇年後で、天下は麻の如く乱れた戦国時代となっていた。

美濃守護土岐成頼の嫡子正房と異母弟元頼とのあいだに争いが起こり、正房には重臣斎藤利国、元頼には利国の家臣石丸利光が応援して戦った。

成頼は政房を廃して、後室の腹である元頼に家督を継がせたいと考え、守護代斎藤利国の権臣石丸利光に相談したのである。これにより土岐家臣は二分され対立した。もともと同一家臣団なので親子兄弟叔父甥の肉親が争うことになるが、これが戦国ではありふれた事なのである。

四年三月より合戦となり、その後、尾張の織田、近江江南の六角、江北の京極、越前の朝倉、伊勢の北畠など隣国の豪族をも引きこんでの大乱に発展した。

船田は岐阜市茜部にあり石丸の本城である。合戦は翌年まで続き諸所で行われたが、総称して船田合戦という。

明応五年四月利光の子の利高は近江南岸で兵を集め、伊勢の北畠の援助を得て北勢から美濃に侵入した。父利光は兵四千を率いて津島から狐穴・竹鼻を経て墨俣に迫った。

この両軍のうち多芸郡に入ったのは地理的に見て恐らく利高軍であろう。橋詰などの民家を焼きつつ象鼻山附近より中仙道をめざしたが、江北の京極軍が斎藤方の援軍として、関ヶ原垂井より岐阜方面へ向かっていたので、それを避けて東へ抜けたらしい。

この石丸軍には丸茂・遠藤・犬飼・宮川・高木の諸氏も加わっていたという。結局、元頼と石丸父子は負けて、五月城大寺城きだいじで自刃した。

舟田合戦で勝った斎藤利国とその子利親はその年の冬、石丸軍に味方した近江の六角軍の討伐に出兵したが、反撃されて父子ともに討死した。栄枯盛衰は世の習い、勝利の美酒の醒めない半年後のことである。蓮如上人の入寂（二四九九）三年前であった。

十四、象鼻山西の激闘牧田合戦

西濃の多くの寺院が浄土真宗に改宗する頃のことである。

大永五年（一五二五）春、江州小谷城の浅井亮政は八千の兵を率いて垂井に出陣、青野や赤坂あたりを侵して伊部清兵尉を敗死させ、更に太垣城に足を延ばして斉藤五郎を討ち取ったが、それよりは進めなかった。

その年の八月、亮政は同盟関係にある越前朝倉勢の援けを得て、革手城（岐阜市川手）の美濃守護土岐氏に痛撃を与えるべく、不破郡多芸郡の村々に放火しながら、またも押寄せてきた。

このたびは方向を変えて関ヶ原より南東へ進み、朝倉勢は右翼となり萩原へ、浅井勢は山村を経て先鋒は象鼻山麓まで達した。

美濃明細記に云うこの不破郡に放火とは関ヶ原や垂井の西部であろうし、多芸郡の放火は岡ヶ鼻の古橋詰をさすのであろうが、牧田・乙坂も入るだろうか。

中仙道方面は陽動作戦で、東軍の土岐勢に「美濃の中山」の北に出るか南に侵出するかを判断を惑わせる作戦であつたろう。橋詰より東に進んだ形跡はない。

象鼻山頂よりは西南東の平野を一望に見渡せるので、皆までとはいかないまでも、監視所の設置は戦国の世には必須であり、若干の兵力と狼煙の設備はあったのではないか。浅井勢が象鼻山を占領したもようはない。

八月二日（新暦八月三〇日）朝、急報により西美濃の将、安八郡西保城主不破河内守、池田郡本郷城主国枝大和守、池田郡小寺山城主稲葉備中守、大墳城主丸毛兵庫頭等が五百余騎を率いて急拠栗原山に馳せ向かった。と美濃明細記にあるが、これは象鼻山のことで、古代より近世までは象鼻山が栗原山の一部とされているふし、が諸書に見られる。

ここで驚くのは、これらの諸将が迎撃の体勢に移ったのが非常に速いことである。恐らく、これらの部隊はそれぞれの城から出撃したのではなく、大墳城などに集結して待機していたのであろう。急を聞いても安八郡や池田郡からでは時間がかかるし、もっと近くの西美濃の諸将もいる。

これは浅井朝倉勢が侵攻するとの事前情報を得た美濃側が、中仙道口、多芸口などに部将を振り分けて、警戒部隊として配置していたのであろう。

駆けつけた東軍は射手二百余人を象鼻山に陣取らせて援軍を待つ。高所に弓隊を置くのは、矢が遠くまで届くのと、敵が攻めにくいからである。

そのようすを見た西軍（浅井勢）は後退のようを見せる。これは西軍の策である。五百余騎ぐらいの東軍を突破するのは、西軍の大部隊ならば訳はない筈である。

当時、牧田川は沢田村より桜井上方竜泉寺の真下を南流し、乙坂前はかなり広がった。

西軍は、三方を山と川に囲まれ東南だけが開いている牧田盆地に東軍を誘いこみ、大打撃を与えようとした作戦だったと思われる。従つて橋詰まで進出して誘いをかけ逐次退いていったのであろう。

午後二時頃、革手城より応援軍一七〇〇余騎が土煙りを立てて、栗原山（岡ヶ鼻であらう）に急ぎ駆けつける（美濃明細記）。

狼煙で知ったとしても、この応援部隊が革手城より出動したとしては少し早過ぎる。途中に大河もあるし一七〇〇余騎といつても大半は徒歩である。

川中島合戦の上杉軍でも騎馬武者は一〇人に一人だったという。美濃勢にそんなに馬がいたとは思えない。揖斐川の西岸あたりのどこかに、西部方面の遊撃部隊として在陣していたのであろうか。人数もその程度のものである。

東軍の総指揮官は土岐頼芸である。この頃の美濃守護は兄の政頼だが名代みよくだいであらう。

彼の命令で東軍は牧田へ進撃する。血気にはやる若武者たちは、江州勢の引くを追尾

して牧田まで押寄せ西軍を追崩す。

頼芸の本陣が乙坂を越えたとき、不意に西軍の伏勢四百余騎が大橋・三田村・雨森等の諸將に率いられ、谷間よりあらわれて頼芸の旗本へ槍をそろえて突きかかる。

戦いで側面や背後からの攻撃が軍にとつて最も苦痛とするところで、弱点を突かれた東軍は忽ち乱れ立ったが、旗本にあつた驚見・日根野・不破・牧村等の勇將は味方を叱咤して火花を散らして必死に戦う。

そこへ更に、思いもよらない山かげから月瀬・寺尾・大野木を始めとした五百余騎が、ときの声をあげて横あいより切つてかかる。頃合いよしと正面の西軍本軍が討つて出る。牧田川と山村、乙坂山に挟まれた地域で両軍数千騎がおめき叫んで死闘するが、長途を馳せてきた東軍主力は人馬共に疲労しており、何カ所かに分断され、やがて散り散りになって敗走し多数の討死を出す。

敗軍の中で稲葉勢は決死の抵抗をしたが、ついに六一歳の備中守通則を始めとして子の通勝・通房・通明・豊通・通弘の父子六人は郎従多数と共に討死する。

丸毛勢も本拠大墳城が至近距離にあり、西軍が勢いに乗つて東進すれば真つ先に影響を受けるので、將士とも勇戦大奮闘をしたのであろう、丸毛は国枝とともにあとで恩賞

感状を貰っている。

この戦いには橋爪を始め養老町地域の多くの人が丸毛勢に参加し討死負傷したであろうが、その名前は残っていない。

八月の暑くて長い日もようやく暮の色を見せ、美濃諸將の応援軍も陸続と駆けつけて東軍はしだいに増えてくる。

そのようすを見た西軍は多芸山麓（牧田の北部西部南部の山であろう）に退いて陣取りしたが、翌早朝江州へ風の如く引揚げる。誠に鮮かな浅井亮政の采配ぶりであった。

稲葉家は兄五人が討死したあと、長良崇福寺の僧門にあつた一七歳の末弟が還俗して相続する。これが良道（よしみち）である。牧田合戦で討死した兄通明の娘阿牟（あむ）は明智光秀の重臣斎藤内蔵助利三に嫁し七男三女を儲けたが、その末つ子が春日局である。

浅井亮政の子が久政その子が長政で、その室に織田信長の妹お市が入り二男三女ができたが二男は殺され、三女の長姉茶々は秀吉の側室淀君となつて秀頼を産み、次女の初は京極高次に再嫁して常高院と称された。末妹の小督（おさう）は三度目の夫、徳川秀忠との間に三代將軍家光を産み従一位崇源院となる大幸に恵まれた。家光の乳母が春日局である。

祖父を浅井軍に殺されたお福（春日局）が浅井の子孫の乳母になる誠に数奇な戦国の運

命であつた。

十五、 念長寺

橋爪の象鼻山念長寺は、建武二年（一三三五）に焼討ちされた別所寺九十九坊の一坊舎主の慶順が、当地に逃れてきて一道場を開創したのが基となっている。

このときは天台教義を弘教したが一九三年後の享祿元年（一五二八）五月、本願寺十世証如に帰依して阿弥陀仏の繪像を受け真宗に改宗した。この僧もまた慶順と云う。牧田合戦の三年後である。

この附近の寺院は、従来天台宗が最も多く臨済宗・真言宗・法相宗等があつたが、これらの寺院は臨済宗を除く殆どが、応仁の乱ころより天文の頃までの六十余年で、浄土真宗八世蓮如・九世実如・十世証如に帰依して改宗している。

畿内・北陸・東海でも、この頃の真宗（一向宗）への改宗が多く、それに伴って各地に一向一揆が頻発し、守護や大名も手を焼いた。

はんしやう

念長寺の現在の梵鐘は戦後のものだが、以前のは正徳四年（一七一四）正月一九日鑄造の銘があるものだった。徳川七代家継が將軍となって二年目、「絵島生島事件」で大奥老女絵島が処罰された年である。更に二年後には八代吉宗が將軍職に就いた。

昭和五、六年頃であったか、象鼻山の頂上附近から山火事となり、橋爪から見ると山は噴火山のように、もうもうと煙をあげた。そのとき、この鐘を長時間乱打したところ、熱を持ち鐘が赤らんだので、水をかけつつなお打った。その際、鐘にヒビが入り音色が悪くなったと同寺の三男正丸氏が語った。

この梵鐘は今はない。その理由は次のようである。

大東亜戦争（日本政府が昭和一六年に布告した正式呼称。アメリカ政府は太平洋戦争と呼称する）が盛んだった昭和一八年（一九四三）頃、戦争に多量消耗する金属類を国内各所から回収した。これを金属供出と言った。この折、寺院の梵鐘で鑄造以後二五〇年未満のものは供出の対象となった。念長寺の鐘は二二九年で惜しくも回収され鑄つぶされて兵器となり、お国に奉公することになった。梵鐘引き下ろしは一月一八日であった。

また、次のような話もある。

高須城主徳永左馬助昌重が、大阪城二の丸普請の不行届で改易され、領土を没収され

たのは寛永五年（一六二八）だが、そのとき徳永の一族の某が念長寺に入つて僧となつた由である。

この左馬助の父を法印式部卿徳永^{ひさまさ}寿昌（よしまさ・ながまさとも云われる）と云い、立派な人物であつた。天文一八年（一五四九）近江国徳永村に生まれ、始め柴田勝豊（勝家の養子）に仕えていたが後に秀吉に臣従し、賤ヶ岳の戦い以降かずかずの手柄を立て、海津郡松ノ木城三万石の主となつた。

関ヶ原合戦では東軍に属し、福束城（丸毛三郎兵衛兼利・二万石）津屋城（高木八郎左衛門正家・三千石）駒野城（高木九郎兵衛^{たてわき}帯刀・五千石）高須城（高木十郎左衛門盛兼・一万石）など西軍の諸城を攻落し、その功により合戦後高須城五三〇〇〇石に移封された（この折、高木一族では貞友が東軍に荷担し多良・時の大半四千石を与えられた）。

寿昌は牧田より下流の牧田川筋一帯の殆ど、養老郡内で約一三〇〇〇石を領有したが、それまで養老山脈直下を南へ流れていた牧田川の本流が、天正年間の終りの頃より東へ流れるようになったので、水はけをよくするため掘鑿^{くつさく}して現在の牧田川を作つたと言われる。

寿昌は慶長一七年（一六二二）六四歳で死去し、長子の左馬助昌重が封を継いだ。昌重は大坂冬の陣に戦功をあげたが、四九歳の寛永五年、大坂城修築にあたつて夜のうち

に石垣が崩れて堀の中に落ちこむ失態を演じた。

それを見た息子の下総守昌勝は、幕府の叱責を恐れて申し立てた内容がいけなかった。

「父左馬助は、酒をたしなみ淫に溺れて乱気で（その為に失敗をしました）ありますから私に普請の仕事を命じて下さい」

と申し出たところ、幕府は上意として

「そのような事は親子の間だから、人に知らせないよう内分にするのが当り前なのに、親が乱気ですと申し立てるのは、不孝の至りである」

と、直ちに高須徳永藩は改易、領土は召上げられて父の昌重は出羽（山形県）荘内、日ならずして新庄に配流され、子の昌勝は越後（新潟県）新発田に蟄居の身となった。

従って一族も家来たちもバラバラになり浪人したが、その一族の誰かが念長寺へ入ったのであろう。

念長寺住僧の姓は鼻橋氏であるが、象鼻山（或いは岡ヶ鼻）と橋爪の名称より名付けられたのではなからうか。

十六、多芸郡椿野合戦と多芸一揆

天文年間（一五三二～五四）に西村勘九郎（長井新九郎規秀・斎藤利政・秀竜と次々に名をかえ入道して道三と号したという）が美濃でしだいに勢力を得ると、守護土岐家や守護代の旧斉藤家の忠臣たちは、彼に対抗してこぜりあい、あいが方々で起こり、これに呼応して尾張の織田、江州の六角・浅井、越前の朝倉等がしばしば介入してくるようになった。

斉藤道三の謀叛が、はつきり現われたのは天文一〇年（一五四二）守護頼芸の弟、七郎頼満の毒殺からで、次の事がらに關係のある天文四～五年（一五三五～六）には、土岐と道三との正面衝突は未だ起こっていない。

青野の円興寺過去帳に多芸郡椿野合戦討死諸霊の記載がある。天文四年八月一七日鷹司与十郎冬明二位、多芸に於て討死。田中弥太郎、右同討死。天文五年卯月（四月）一七日白木太郎右衛門実俊多芸に於て討死とある。大久保休吾氏は橋爪に椿原の小字があり、また石畑を椿井郷石幡村とも書いたものがあるので、椿野はこれらの地方を云うのではないか、と言われている。

椿野合戦と多芸一揆（濃州一揆とも記録）が同一か別の事件かも分かっていないが、放

火などもあり、かなりの騒動があったようである。

鷹司や田中の討死は、織田・六角・朝倉軍などの他国勢の攻撃の巻添えによるのか、多芸郡に発生したと云われる一揆に関連があるのか、判然としない。

橋爪の東に、仁位と云う集落があるが、鷹司冬明二位が討死した地で、この名がついたと云う。

鷹司家は五摂家（近衛・九条・二条・一条・鷹司）の一人で、摂政関白に任ぜられる家格だから高位なのは当然だが、なぜ、この地に來たのであろうか。

この人は、揖斐郡谷汲村上長瀬の長瀬城主で、天文一六年（一五四七）一二月四日、織田信秀（信長の父）に攻められて討死した鷹司政光に関係する人ではないだろうか。

京都の公卿の筆頭の鷹司家が、どうして美濃の山奥の長瀬城主なのか、よくわかっていないが、応仁の乱以後、京都は幾たびか兵火に焼かれて、公卿の中には自分の莊園に落ちのび、或いは一族を派遣して、その収入により生計を立てた家もあるので、長瀬の鷹司家もそうだったかも知れない。

そして地方在住が長期にわたると、しだいに土着して武士化していった。天文一六年鷹司政光は斉藤道三に味方し、土岐家を応援する織田軍に攻撃され、鷹司を助けにかけ

つけた池田本郷城の国枝一族と共に、政光兄弟は一族郎党すべて城を枕に討死し、長瀬の鷹司氏は滅びた。

白木実俊の討死は冬明二位の死んだ翌年だが、この天文四・五・六年頃は多芸郡内が騒然としていて、江州の六角定頼が千二、三百人。越前朝倉勢が三千人ばかり、斉藤彦九郎宗雄（そうゆう）に協力の為、出勢していると天文日記の天文五年九月一九日の項にある。斉藤宗雄は長井規秀（後の道三）と争ったのだが、橋詰を含む多芸郡内は両軍の兵馬に蹂躪（じゅうりゃく）されたのであろう。

また、同日記の天文六年七月・八月・九月の項には近江の六角定頼に、この濃州多芸一揆蜂起の事について、何か知っているか（後押しをしているのではないか）と何回も問合わせているが、六角方は、自分たちは何も知らない、濃州の坊さん方にも、京都へ行く坊さんにも相尋ねたが何も知らないと言っている、と返書している。

記載の天文日記は、本願寺十世証如が天文四年から二三年（二五三五～五四）までの事を記したもので、証如上人日記・本願寺日記ともいわれる。

証如は、多芸郡を中心に何かが起こっている情報をつかんで、六角に問合わせたのだろうが、六角が本当に知らなかったのか、知っていて（関係があつて）ごまかしたのか分かっていない。

この頃、一向一揆と称する浄土真宗の信者の蜂起が加賀、畿内などで盛んになり、東海地方は三〇年ほど遅れて三河や長島などを中心を起こっているが、この時、すでにその萌芽が多芸郡あたりにあったのかも知れない。

十七、 織田信秀の多芸口放火

天文一七年（一五四八）八月、尾張の織田信秀は齊藤道三に追われた土岐頼芸を助けるため、多芸に入って火を放って侵伐した（信長記）とあるが、後述のようにこの年月は腑に落ちない点がある。

天文一一年（一五四二）齊藤道三に居城の大桑城（おうが高富町）を攻撃された美濃守護土岐頼芸は、逃れて尾張の信秀を頼った（頼芸はこの後、和睦して一度大桑城に入る）。これより織田勢はしばしば美濃に侵攻した。

天文一三年、織田勢は大垣城を占領し織田播磨守を城番として守備させたが、天文一六年齊藤勢に攻略された。この年の九月に織田勢は稲葉山城にまで迫ったが加納口で大

敗し、また大垣城救援に赴いたが尾張に急変があり引き返した（このとき尾張勢は五千人ほど討死したと信長公記は云う）。

天文一七年秋季には織田・斉藤両家は和睦し信秀の子信長と、道三の娘濃姫（帰蝶・鷺山殿）との婚約が成立したので、信長記に云うように一七年八月に信秀が多芸に侵伐したとは考えられない。旧暦の八月は秋たけなわである。この時期には両家の結婚の交渉はかなり進んでいた筈である。

信秀軍の多芸口放火は天文一六年の誤りではなからうか。戦国合戦大事典にも一七年の濃尾両軍の合戦は所載されていない。

しかし、一六年には尾張勢がたびたび美濃に入って諸所に放火しているので多芸口も当然その対象となったであろう。西濃においても斉藤方、土岐方は混在し、戦況は混沌としていたので、敵方と思うところは遠慮なく焼いたと思われる。

天文一六年十一月織田信秀は揖斐城の揖斐光親、大野町相羽城の長屋景興らを助けて土岐勢力を回復させるため西濃に出勢した。大垣城の織田播磨守は一月上旬に攻略されていたので、尾張勢は象鼻山下を揖斐方面に進攻したのであろう。

この場合の多芸口とは、多芸郡の入口を指すのではなく、侵伐の道筋を云うものと考

えてよい。家は焼かれ、尾張勢の鉄蹄と喊声^{かんせい}に脅かされて逃げ惑う老幼男女を、象鼻山は悲しげに見ていた事であろう。

織田信秀は、このあと僅かの年月で病死した。三月三日、四二歳だった。その死亡年については、桑田忠親氏は天文一八年（一五四九）、鈴木良一氏中野効四郎氏は天文二〇年、歴史研究平成四年一月号では天文二二年と諸説がある。

『信長記』^{のぶながき}は「しんちようき」とも云い軍学者小瀬甫庵が天正年間に起稿し、中断して慶長九年（一六〇四）に完成したもの。これに対し織田家の祐筆太田牛一（和泉守資房）が慶長五年の関ヶ原戦頃に書きあげたものが『信長公記』^{のぶながこうき}で「しんちようこうき」とも云うが、信長岐阜入城以前のことは、あまり詳しくない。

十八、 信長の多芸山麓放火（七坊炎上?）

多芸七坊などを焼いたのは織田信長であると伝承されているが、それはいつ頃だったろうか。

天文一七年（一五四八）信長と斉藤道三の娘濃姫との婚約が成立し翌年結婚する。それより濃尾両国間は短期間ではあったが、平穏な月日が続いた。

弘治二年（一五五六）、道三は子の義竜に殺される。信長は妻の父、つまり舅の仇として義竜を狙い、濃尾両国は再び戦争状態となるが大きな戦いはなかったようである。

永禄三年（一五六〇）五月、駿河遠江三河の大守今川義元を桶狭間に破って東方の脅威がなくなると、信長は美濃攻撃に全力を傾け始めた。

「永禄四年辛酉^{しんゆう}五月上旬西美濃乱入、在々所々放火」（信長公記）とある。これは激戦だったが墨俣・森部（安八町）方面で、養老町附近は被害がなかったように思われる。五月一日に斉藤義竜が三五歳で病死し、子の竜興が相続したが、そのどさくさにまぎれて尾張勢は侵攻したのであろう。

翌永禄五年（一五六二）一月、三河の松平元康（徳川家康）と同盟を結んだ信長は、五月上旬数千騎を率いて多芸山（養老山系北部）麓沿いに侵入し、寺社民家を焼き払った。

五月雨^{さみだれ}時季で河川が増水し、東部方面の進軍が困難だったので西部を進んだのか、他に理由があったのか、猛烈な勢いで山麓を北進している。

天平宝字の奈良時代より八百年の古い歴史を持つ多芸七坊の多くが、信長の兵火によ

つて焼失したとの伝承は、この時であろうか。

養老山脈の麓を南から北に、寺院神社や民家を燃やす炎は樹木にも移り、煙は山を覆つて天に立ちのぼり、東の平野からは養老山脈全体が燃えているように感じられたであろう。日ころ尊崇する寺社を、遠慮会釈もなく放火してゆく信長勢は、地獄の鬼の来襲のように見えて、人々は恐怖に打ち震えて逃げまどつた。

栗笠専了寺の記録に

「天正壬午歳じんご二月中旬頃、織田の兵乱度々に及ぶ處、既に多芸西山伽藍放火の噂、不慮に当院へ乱込み、せんかたなく早鐘を鳴らすといえども、面々、くもの子の散るが如く逃げかくる云々」とある（養老郡志）。周章狼狽しゅうしょうろうばいのありさまが眼前に見えるようである。

侵攻経路にあたる岡ヶ鼻の古橋詰や別所も荒れくるう大波に吞まれるように炎に包まれていった事だろう。

ただ、この専了寺記録の壬午歳二月は天正一〇年（一五八二）で、六月本能寺で信長は明智軍に殺されているが、二月では美濃は織田氏の本領であり、平和を保っていた筈で、年月に疑問を感じずる。

永祿六年（一五六三）以降の信長の美濃侵攻は東濃に目標を置いており、西濃には殆ど

手を入れていない。

これは西美濃の諸將を懷柔しようと、していた高等戦略によるものであろう。後章の大墳城攻防のように、美濃勢同志の戦いはあったが、七防炎上のような大規模なものではない。

元龜元年（一五七〇）同二年、続いて天正元年（一五七三）同二年の長島の一向一揆攻めも駒野（南濃町）以南の戦いで、多芸郡に戦火は及んでいない。

天正一〇年清洲会議のあと一二月岐阜城の織田信孝の挙兵の際も、西濃は秀吉の諸軍が集結したのみで、これも戦火の影響は受けていない。

このように見ると、信長の多芸山麓放火は永禄五年と思われる。

この時、織田勢は牧田川上流を渡河し、象鼻山麓より北東へ向かい、大垣・墨俣・輕海（本巣郡真止町）方面へ進出したらしい。斉藤勢と大激戦を展開し、双方の勇將が討死したが戦況は一進一退の後、信長は清洲へ、斉藤勢は稲葉城へ引きあげた。これを輕海合戦という。

なお、この折に七坊全部が燃えたのではなく、別所寺は建武の乱、津屋の藤内寺は関ヶ原合戦時と言われているし、その他にも不明の寺もある。また別所寺の焼失後にも若干の坊は建てられていただろうし、それらや全く別の寺院も焼かれているだろうが伝承だから、はつきりしない点が多い。

十九、大墳城攻撃と住民の動員

大墳城は、いまの多芸橋南詰附近にあったといわれる。押越の臨濟宗南禅寺派莊福寺は昭和初期の牧田川改修工事までここにあった。大墳城の跡地だったという。

この城の栄えていた天正ごろまでは、牧田川は現在の流路ではなく、桜井勢至のすぐ下を南に津屋方面へ流れていた。従って大墳城の北側一帯（現牧田川河川敷）も城の一部や武家屋敷があつたと伝えられるが、或いはその他にも多少の城下町らしきものや農家があり、また農耕地が広がっていたのであろう。旧莊福寺門外の池は城の外堀だったと云われている。

城主は丸毛^{まるも}兵庫頭で遠祖は清和源氏という。源頼義の三男新羅三郎義光の五世の孫が甲斐国（現山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原）で生まれて小笠原長清と名乗りやがて信濃守になった。源頼朝の挙兵に参加して軍功があり多芸郡に領地を与えられた。

長清より五世を経た長氏の四男六郎兼頼が初めて丸毛姓を称し、これより代々兵庫頭を襲称して織豊時代に至つたと云う。家紋は三階菱とする、と新撰美濃誌にある。

美濃盛衰録によると、応安のころ松井直家の子、九郎直清が府中より城主として移り住んだというが、松井氏が丸毛氏の系統の中でどのような関係にあるのか分からない。

応安（一二六八～七四）は北朝の年号で南朝では正平・建徳にあたる。しょうへい別所寺が足利軍に焼討ちされたのが建武二年（一三三五）であるから、それより三、四〇年後であるが、それと何らかの関係があるのかも、分かっていない。

いつ頃からか、美濃守護土岐家に仕えて、明応五年（一四九六）の船田合戦、大永五年（一五二五）の牧田合戦にも丸毛氏の名が見えて、この頃には確固とした大墳城主だった。丸毛氏の勢力範囲は明らかでないが、橋詰も領内に含まれていたようである。

土岐家が滅亡してからは斉藤家に仕えたが、永禄七年（一五六四）、斉藤竜興（道三の孫）に背いた大垣城主氏家常陸介・河渡城主安藤伊賀守（竹中半兵衛の舅）らは竜興に忠誠を誓っていた大墳城を攻める。

城将丸毛兵庫助長住、その子三郎兵衛長隆は三百人ばかりで一里あまり出て陣し、城近辺の百姓を老若男女を問わず、かり催して、手に手に竹竿を持たせて大軍のように見せかけ、まず進攻軍の氏家勢を撃破したので、安藤らも降参した、と常山紀談にある。

紀談では長住を兵庫助としているが、永禄一二年（一五六九）より信長公記にあらわれ

るのは兵庫頭になっている。その間に官位が上がったのだろうか。

このときの氏家・安藤軍の本拠は大垣以北なので、北の方より栗原室原方面へ進んできたのであろうが、一里余り城を出て陣したのは、どの附近だろうか。

敵の動静を知るには高地が必要であるし、高地より低地の敵を攻撃する事が兵家の戦術の根本とせられた時代で、象鼻山栗原山が利用された公算が大きい。この山地の軍勢を見過ごして大墳城へ進めば背後を遮断される恐れがあり、氏家安藤軍は思うように活動できなかったと思われる。

丸毛氏の勢力下にあったであろう橋詰・安久・金屋・直江・中村・宇田等の住民は動員され、西の山地と現橋爪や中村の北端あたりに配置されて、後方の援軍のように見せかける態勢をとらせられたのであろう。

これらの農民は、ふるえながら竹槍を持って、戦いの成行きを見守っていたことだろう。

二十、 竹中半兵衛の隠れたところは？

岩手菩提山城主、竹中半兵衛重治しげはるは、豊臣秀吉が木下藤吉郎と云った時代から、中国の毛利攻めに至るまで軍師として仕えて、秀吉が天下を取る基礎を作った。その智謀軍略は三国志で活躍する諸葛孔明しよかつこうめいにも劣らぬと称された。軍師とは参謀長の事である。

秀吉の家来となる以前は他の美濃の諸将と共に、稲葉山城主斉藤家に仕えていたが、主君竜興は暗愚で酒色に溺おほれて国防に意をそそがず、隣国の浅井・織田などが美濃を狙っている状況を憂えて、たびたび諫言したが竜興が聞き入れないので、止むを得ずクーデターという強い方法で厳しく諫めてから栗原山に隠遁いんとんした。

この栗原山と云うのは、別所より古橋詰にかけての、どこかである。と幼少より古老に何度も聞かされてきた。

象鼻山は昔は栗原山に含まれていたらしい。前述の牧田合戦に美濃の諸将が栗原山に駆けつけたとあるのも、明らかに象鼻山の事であるが、古書には栗原山となっている。

別所の白山神社の棟札には不破郡別所村とあるので、山続きの関係でこの附近の山の

全体が不破郡栗原山と総称されていたのであろう。それに対して北の部分は南宮山と称されていたようである。

近ごろ、半兵衛が隠遁したのは居城菩提山の近くで、それらしい地名もあるので象鼻山の栗原山の方は間違いである、との説が岩手の地元の方から出て来たが、これは後述のように大いに疑問である。

半兵衛重治は永禄七年（一五六四）二月六日、有名な『稻葉山城乗っ取り』のクーデターを起こした。僅か一六人の従者を率いて、かねて人質にとられていた三歳下の弟久作の病氣見舞と言って城内に入り、忽ち占拠して城下に待機させていた竹中軍と舅安藤伊賀守守就の兵二千人を入城させ、あつと云う間に稲葉山城を占領してしまった。

城主斉藤竜興は近臣と共に裏門より脱出する。半兵衛は主君の非行を改めさせるための目的だったので八月になって竜興に城を返し、竹中・安藤軍は撤兵した（竹中旧記）。その後、半兵衛は菩提山城を離れて一年ほど江州の浅井家の食客となっていたそうである。

栗原山へ隠れたのは江州より帰国してからであろう。主君を諫めたにせよ、稲葉山城を占領するという強硬手段を使って、一時期反旗をひるがえした半兵衛が、（即座に入城できる）自分の居城のごく近くの岩手附近に居住することは、自ら謹慎した者の行為とし

て、主君ならびに譜代の諸將に對しての遠慮があつたと考えるのが常識であろう。

ただ隠遁地栗原山が竹中氏の領地に含まれていたかは不明だが、仮に大墳城主丸毛氏の領内としても、同じ斉藤家の西濃地区の家臣で交際があつたのは当然で、隠遁に際し諒解があつたものと考えられる（前章の大墳城攻撃に竹中軍は加わっていない）。

橋爪の伝承では半兵衛は象鼻山上に住んでいたとも云うが、山上は強風や水利、日常生活に不便で住める訳がない。東中腹にウマヤシタの地名があり、ここに半兵衛の厩（馬屋）があつたとするが、他の時代の別の部将のもののようにも思える。隠れて住んだのは岡ヶ鼻か別所か。岡ヶ鼻は人の往来が烈しいから隠遁には適しない。恐らく別所ではなかつたろうか。

また、隠遁地は栗原の西方の山中である、との話も言われるが、当時としても栗原山の山中には人家はなかつたようで（山寺と云われた清水寺は徳川時代の万治三年一六六〇年に建立）、油断すれば殺害収奪の厳しい戦国の世に、隠遁したとは言え西濃に相当の勢力を持つ者が、いつ襲撃があるか分からない状況で、まったく附近に人家のない場所に住むのは考えられない。別所なら久保寺一族の子孫も在住し、警戒や生活面からも適所と考えられる。

二十一、八幡神社のある加藤家

橋爪の加藤家は代々私社として若宮八幡神社を守護されているが、同家の由来はどのようなであらうか。

藩翰譜^{はんかんぷ}という書物がある。これは甲府中納言徳川綱豊（六代將軍家宣^{いえのぶ}）の命により、新井白石が元禄十五年（一七〇二）に編著したもので、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いより延宝八年（一六八〇）四代將軍家綱の時代の終りまでの、八〇年間にわたる大名三三七家の経歴や系譜を収録してある。

この頭注に「加藤遠江守光泰は鎮守府將軍利仁二三代の後裔加藤権兵衛景泰の子也。景泰・美濃多芸郡橋爪庄七〇貫を領して、初は守護齊藤氏に属す」とある。

藩翰譜には「左近大夫貞泰は遠江守光泰が男也。光泰・初め織田殿の家人（作内と申しき）。元龜元年（一五七〇）の春、木村、生駒、前野等と同じく羽柴藤吉秀吉の手に属せらる。これより秀吉世の事を知り給ふに至りて、是処^{こゝかしこ}彼処^{こゝかしこ}の戦功、夙夜^{しゆくや}奉公の労を積み重ねれば、天正一二年（一五八四）、近江国高島の城を賜ひ、叙爵して遠江守に任じ、同じ

き一八年（二五九〇）、甲斐国を悉く賜ひ領しぬ（二四万石）。されば殿下（秀吉）年来の御家人にて、御覚え他に異なりし故、斯かる大名にもなし立て給ひ、時の栄世の華なりしかど、いつしかざん人の為に申しさまたげられて、御気色宜しからず。文禄の初め、朝鮮討たるべき事起りて、光泰も軍勢引具して彼の国に打渡り、是処彼処の軍し、終に陣中にて空しくなりぬ」と載せている。

また、新撰美濃志に「東黒野村黒野古城、加藤遠江守光泰の子左衛門尉貞泰、是に居れり。父光泰甲斐国二十四万石を領し、谷村の城にありしが、文禄二年（一五九三）征韓の役に彼地にて卒去し、貞泰幼稚なるにより領地を減ぜられ、僅か四万石にて美濃の黒野城に移り、慶長一五年（二六一〇）伯耆米子城に移り、六万石を領す」と書かれている。

加藤氏がいつ頃から橋爪に居住したのか分らないが、藤原時長七代の後胤景道が始めて加藤氏を名乗っている。

光泰の子貞泰は後に四国の伊予大州六万石に移封した。貞泰の子は泰興だが、その弟直泰は伊予新谷一万石に封じられ、両家の子孫ともそのまま明治に至り華族に列せられて、子爵を与えられている。

光泰の弟に光定があり、この子孫が現在橋爪に在住している加藤氏の祖先らしいと言

われる。また光泰の娘は二人あり、姉は竹中重門、妹は石河光遠いしごの室となった。

橋爪の伝承では、徳川時代の末ころに大名行列が橋爪を通り、殿様が村人を呼んで「この地に加藤と云う者が居らぬか」とたずねた。

その頃、加藤家は没落して一農家になっていたので、村人は叱責と難儀のかかるのを恐れて「さような者は当地には居りませぬ」と答えた。大名行列はそのまま通り過ぎていったという。

同家で永年にわたって護持されている若宮八幡宮の勧請由来については分からないが、このような農村の個人の家で、一社を経営することは、加藤家の昔の由緒と繁栄を、無言に物語るものであらう。

二十二、高木氏橋爪に来たる

徳川時代「橋爪総高木、猫も杓子もみな高木」と言われるほど高木氏は栄え、高木姓が多かった。もちろん、一般の農工商民は苗字を表立って名乗ることを許されない時代

で、公文書は名前のみであったが、かげ蔭苗字（かくし苗字）として、かなり堂々と使用していたようである。

象鼻山の山裾にある村上勝氏の祖先の墓碑に、高木六右衛門勝富これ而建つ（享保一七年・一七三二年）とか、高木武平治源通愛の碑を摘男高木六郎右衛門源勝重建之（文化一三年・一八一六年）などとある。

また、村上清氏の祖先の第五代高木武太夫（安永二年・一七七三年）の墓碑にも正面に法名釈道順、側面に高木氏と姓が彫りつけてある。

高木氏は、第五六代清和天皇（元がんぎょう慶四年・八八〇年崩御）の孫、六孫王経基（鎮守府將軍となり源姓を与えられて清和源氏の祖となる）五代の後胤、上総介源頼風といわれている。三河国碧海郡高木（安城市高木か）を領したので高木姓を名乗るようになった。

子孫信成の代は戦国争乱中で、永禄年間に西美濃に流れてきて橋爪に住むようになったという。

永禄六年（一五六三）頃、三河に一向一揆が起こり、徳川家康（当時は松平元康と云った）の家臣でありながら一向宗（浄土真宗）に組して、主人に反抗した者が多数あり（家臣団の半数が加わったといわれる）、信成もそうしたことにより、一向宗が繁栄していた西美濃

の橋爪にきたのであろう。

橋爪は前章に述べたように加藤家がいたが、光泰の代に信長やがて秀吉に隨身し橋爪庄を出たので、高木氏はそのあとを譲り受けたと思われる。

明治維新の際、現在の諸姓に改めた。

二十三、 橋爪集落の変遷と武佐祭

古代の橋詰は主集落が岡ヶ鼻附近、象鼻山麓の西、南、東にあったと思われる。古牧田川は先述したように現右岸堤の更に西側、桜井のすぐ下を流れていた。

中世に至っても中心集落は岡ヶ鼻近辺であつたろうが、橋詰地域は現牧田川河川敷を高畑まで含めて現橋爪地区と合わせた広い範囲にわたり、小集落が散在し或いは人家が点在していたのであろう。

二十一章で述べた加藤家は、八幡神社を中心とした地区にあつたろうし、十日市畑よのきや榎町の地名が示すような繁栄した小集落の存在も考えられる。十日市畑は八幡神社の南

東で名前の如く十日に市が立ったのであろう。榎町は現火葬場の北である。

兵火や水害のたびごとに、家を失った人々の中には遠くへ去った者もいたであろうが、多くは伊勢街道や多良街道の主街道より少し離れた微高地の現在地へ逐次移ってきたものと考えられる。最後まで岡ヶ鼻に残っていた人たちの家も、慶安三年（一六五〇）の大洪水で壊滅した。従つて現橋爪の成立はそれ以後である（ごく一部の人家は幕末まで山の麓にあつたと思われるふしがある）。

徳川時代の橋爪には東西二組があり、二名の名主がそれぞれの組を担当したと見られる記録がある。

これは古代より岡ヶ鼻附近に住み、慶安三年の大洪水まで残っていた人々が中心となつて西組をつくり、加藤光泰が信長に随身して去つたあとに、三河より来た高木家の一族が中心になったのが東組で、現在の居住区にそれほど関係はなかつたようである。

西組と東組とは明治三八年（一九〇五）まで武佐祭の諸行事を執行した。武佐祭は昔より引き続いている橋爪の大祭である、と伝承されている。

武佐祭は神職の祭文では歩射祭とあり、弓を射る業より発して五穀豊穰を祈る祭りに変つたとの記載がある。最初は武技の大会であつたかも知れないが、七日間にわたり酒

食を飽食する村をあげての大祭であるので、恐らくこれは、両組両住人の融和をはかる目的に変化していったものであらう。

この武佐祭は、日露の大戦^{ぐけち}酣となった明治三八年、国運を賭した戦いの最中に、七日間も酒食に明け暮れるような安穩^{あんのん}な行事をしてどうか、との議論が起こり、神様にお聞きしようと云うことになった。

これによって神官は次の三種のおみくじを作った。

一 従来通り執行する

二 酒二升だけにする

三 全部廃止する

神前で神官が、神意をお伺いする祭文を奏上し、くじを引くと、第二の「酒二升だけにする」との神託が下り、それ以後そのように改められた。

その後、従来の東西組を廃し、居住区により東西中北の四組に分けられて今日に至った。

二十四、 関ヶ原合戦と橋爪

莊福寺記録に「長曾我部・長束・安国寺・毛利の軍勢三万余騎、勢州阿濃津城（三重県津市）を攻落し、慶長五年（一六〇〇）九月一二日の暁、橋爪村に來り陣を取る」とある。

この「陣を取る」とは、橋爪に布陣したのではなく、ここで石田三成の指示を受けて、南宮山・栗原山・象鼻山・岡ヶ鼻などに展開したのをさしているようで、橋爪は通過だけであらう。

また、この橋爪は岡ヶ鼻の古橋詰か、しだいに形成されつつあった現橋爪のいずれであるのか不明だが、当時の地理から見て、且つ三万の大軍でもあり両方を通過したと考えてよいだろう。

関ヶ原合戦陣形図（武将と紋）によると、南宮山下に吉川きつかわ広家軍三〇〇〇人、その右後方（東南方）に安国寺えいけい惠瓊軍一八〇〇人を前衛とし、山上に毛利秀元軍一六〇〇人、境野より栗原にかけて長束なつか正家軍一五〇〇人、象鼻山と岡ヶ鼻に長曾我部ちようそかべ盛親軍六六〇〇人となっているが、明治書院日本歴史地図では長束軍は境野の北、安国寺軍は境野の南、

長曾我部軍は栗原の北の垂井街道上、吉川軍は南宮山上、毛利軍は宮代と乙坂を結んだ中央の山頂と位置が多少違っている。

この軍勢の数には若干の疑問がある。これは当時の兵制で高百石につき三人の動員数を各部将の所領より割り出したもので、現在のデモなどの人員も主催者側と警備側の発表人数に違いがある如く、司令部に報告される兵員より実動員が少なくなるのが普通で、これは攻防両軍とも、そうであろう。

象鼻山・岡ヶ鼻は戦略的重要性を持ち、長曾我部軍六〇〇〇人余が配備されたのは事実と思われる。

九月一四日、赤坂方面の東軍が西進のようすを見せたので、大垣城とその附近にあった西軍主力は急拠、守備位置を関ヶ原に変更し大移動を開始した。

石田三成軍五八二〇人、島津義弘と豊久の連合軍一六五八人、小西行長軍六〇〇〇人、宇喜多秀家軍一七二二〇人の諸軍三万人余は午後八時ころ大垣を進発して、青柳・野口・室原・橋爪（岡ヶ鼻の橋詰であろう）・乙坂・牧田を経て関ヶ原に向かう。

出発のころ、雨が降りだして旧暦一四日の月も道を照らさず、象鼻山の上下で長曾我部の兵が焚くかがり火を目標として難行軍を続ける。

橋爪より東は泥んこ道で、すべって歩みにくく、橋爪より西は石道で凹凸があつて転倒し、乗馬の士はもちろん、糧秣りようまつや諸装備器具を輸送する輜重部隊しじゆうは、殊のほか難渋したと思われる。

三成は岡ヶ鼻で長束・安国寺ら南宮山栗原山守備の諸將と明日の合戦の打合せをして、腹痛下痢をこらえながら関ヶ原へ赴いたという。この日は新暦の十月二〇日で、雨は下着までグツシヨリとぬらし、寒さにふるえて泥まみれになり大変だったろう。象鼻山附近は守備兵と通過兵でゴツタがえしたが、住民はどうしていた事だろうか。

この晩、足輕二〇〇人ばかりを対岸桜井に出したと西脇久左衛門自書にあるが、これは長曾我部軍ではないだろうか。

翌一五日は決戦の日である。午後に至って小早川秀秋軍一五〇〇〇人が突如東軍に味方して、西軍の大谷吉継勢に襲いかかったので一五〇〇人の少数の大谷勢がまず敗れ、連鎖的に西軍は総くずれになり、その由を長曾我部の家臣吉田孫右衛門が、はせ帰って知らせたので、象鼻山栗原山南宮山の軍兵は忽ちなだれを打って伊勢方面へ逃げ始めた。

岩道村方面の東軍の徳永法印寿昌（海西郡松ノ木城主）や市橋下総守長勝（今尾城主）などの軍勢はそれを見て進撃し、南方へ散を乱して逃げる西軍を金屋川原に捕捉して、侍

八一人、雑兵六三人の首級をあげた。

三万人が旗や装具を棄て、家来も主人も互いに見失って、野といわず林といわず、将も兵も吾先に逃げるありさまを見て、物かげに息をひそめてかくれていた里人は、恐しさに打ち震えていた事だろう。

橋爪は、合戦後功により五三〇〇〇石（一説には六万石）に増封され高須城主になった徳永法印の所領となる。

二十五、 牧田川の変遷

古牧田川が現流の西側、沢田上町下町を通り桜井・上方・竜泉寺・勢至・石畑の直下を津屋方面に流れ、駒野村前より今尾村下で揖斐川に合流していた事は、すでにたびたび言及してきたが、牧田川流路はどのようにに移り変ってきたのだろうか。また、それは橋爪にどのような変化を与えたのであろうか。

第五章「古橋爪（橋詰）の所在地」でもふれたように、永禄九年（二五六六）新暦十月一四日

「牧田川大洪水にて河状を変じたり」と古記録にあるが、この時に水路は沢田の北より乙坂前を通じて東の象鼻山に直撃するように流路を変え、象鼻山の西南東麓にあった古橋詰の中央を貫いて、大畔おびでと現橋爪を分断した。そして五日市より東に向かい、高田と多岐神社間の南流（昭和七年廃流）と多芸橋下の北流（現本流）に変わった、との説には疑問を感じる。

このとき、溢れた一部の水流が五日市・高畑間を養老女子商業高校・高田中学校・美津濃養老工場の位置より高田橋方向へ支流として流れたろうし、北流にも若干流れたとも思われるが、本流としては、やはり古牧田川を津屋川方面へ落ちていたのではなからうか。

この事については玉井文書に現われる勢至の盛衰から推察することができる。天正一一年（一五八三）以降玉井文書が切れて鉄座は衰退する。とのことはこの年より、いくばくも経ないうちに古牧田川の水路は舟の運航が不能になった。水運に大部を頼っていた勢至の鉄座は衰えた、と考えられる。

舟の運航ができなくなったのは、水量が大幅に減少したか、川そのものが無くなったか、であろう。

だが、上流からの絶えまない水は、どこかへ流れなくてはならない。牧田川が烏江方

面へ水路を変え、主流として大量に流れ始めたのは、その頃からではなからうか。

天正一三年（一五八五）秀吉が関白になった年、美濃で大地震があり「岡ヶ鼻は一夜の内、田地の上にゆり上げ、岡ヶ鼻台出来仕り候」と橋爪村より元禄期、領主に呈出した文書に記載がある。

岡ヶ鼻は東方に広がる耕地より二メートルほど高い台地になっているが、現在では誰も不思議に思わない。山に近いところだから当然としている。が当時の人は大地震に恐れおののいた翌朝、岡ヶ鼻が盛り上がっているのを見て、肝ったまが消しとぶほど驚いたことだろう。

この大地震により養老山脈もかなり震動し、地盤のゆるみや崩壊があったのであろうし、これらは翌天正一四年（一五八六）の大雨と大洪水により麓を埋め、牧田川をせき止め、或いは流れを困難にしたであろう。

これによって牧田川の流路が変わり、古橋詰を大水が貫流したのはこの時ではないだろうか。これ以後水路は東流するようになる。

天正一七年（一五八九）大墳城主丸毛三郎兵衛兼利は、福東城（輪之内町）二万石の城主に変わったが、その理由は明らかでない。だが、天正一四年の大洪水によって大墳城と附

近が大水害を受けて裸城になり、家臣の屋敷や農耕地が流失したとあれば、城地の変更を願ひ出るのも当然であろう。

その際、秀吉が心よく許可したとすれば、一一年後の関ヶ原合戦の折、それまで善隣関係にあった徳永法印や市橋下総守長勝の誘いを断つて、西軍についたのも秀吉の恩誼を思つての事と理解できる。もし、永禄の洪水で大墳城が大被害に遭つていれば、もつと早く移城が行われていた筈である。

元禄六年（一六九三）牧田川筋変遷に付、烏江村より江戸検使宛の口上書に次の記載がある。

「濃州多芸郡烏江村前ノ川、先年ハ九瀬川（杭瀬川）バカリニテ牧田川ハ山通川筋ニテ駒野村前へ出、今尾村下ニテ大川ニ落合申候処、ソノ後徳永法印様御領分ニテ山通落申候川ヲ烏江村前へ御堀替ニナラレ、九瀬川ト落合、烏江高瀬ノ間川通申候」（養老郡志）。

徳永法印寿昌については第一章「念長寺」の項で詳述したが、寿昌が牧田川筋の領主となったのは慶長五年の関ヶ原合戦後の一一月という。牧田川を堀替え烏江高瀬間を通すようにしたのは、それ以後彼が逝去する慶長一七年（一六二二）の間であるが、既に古牧田川は大量の流水不能であり、その時期は早かつたと思われる。

橋爪が法印領となった直後の慶長六年の郷牒では僅かに四五九石九斗八升の村高で、金屋村の四五九石七斗五升到匹敵し、宇田村の一〇〇石三斗七升、直井（江）村の一〇五六石九斗八升到較べて格段に見劣りするの、永禄九年と二〇年後の天正一四年の水害が、橋爪に与えた損害を察することができる。

法印は古牧田川河川敷を美田化し、流水を自然化するため新水路を掘鑿くつきくしたものであらう。

沢田村は旧河川敷が完全に耕地化していない時期の検地と思われる慶長郷牒しやうちやうの村高は四五五石余であったが、三十数年あとの正保郷帳では五九五石余となり一四〇石も増えている。

北流（現牧田川）はいつ頃できたのであらうか。天正一四年の大洪水で川原になった部分が多く、特に多芸橋附近は遊水地がなく被害が大きかったらうが、牧田川主流としては南流だったと考えられる。

それは、正保以前には北流の水害が天正洪水を除いては見られなく、南流のみに被害が見られるからである。

正保四年（一六四七）牧田川出水大墳村堤防五三間切入、正保年間金屋御井神社流失、

ここで始めて北流の被害が記録に顕われる。これ以後、北流沿岸の水害記録が増加してゆくので、正保年間には北流が、かなりの規模に発達していたと考えられる。

明治三十七年（一九〇四）ころに高田・多岐塚間の南流に渡船があり、西町の渡し舟といわれて渡し守が居り、舟賃（渡し賃）が必要だった。北流の多芸橋附近に渡船があったとの伝承はないから、そのあたりの常時の水量は少なかったであろう。しかし、直江・南直江間には大垣・養老間の主街道でもあり、水の深いときには渡船があった。南直江・高田間（美津濃工場の附近）にも渡船があったと聞く。

木造橋が南流北流に架けられたのは明治の末年である（明治四一年頃）。南流橋は高田中学校の運動場の西の方を横切るところにあり、北流橋は多芸橋の西側にあった。

幅は両橋とも一間ほどで、筆者らが小学生のころ、欄干のなかった橋を、こわごわ渡って、中央部にあった荷車行違い用の広い所にたどり着いてホッとしたのを覚えている。また、橋の上流側に流木等から橋を保護する柵があり、木の根っこやツルなどが、からんでいた事も記憶にある。両橋の構造は全く同じであった。

徳川中期頃から、南流と北流とは洪水の際はほぼ同規模となり、分流点の高畑の西の突端将棋頭で板子一枚で水流を操作できると言われる程になった。

しかし、南流は土砂がしだいに堆積し、北流は明治以後は絶えず浚渫されたので、主流は逐次北流に変わってゆく。

南流の美津濃工場の中央部は一段高く運動場にされて、高田小学校や養老郡の消防訓練などに利用された。また、その西北川原に昭和の初年、飛行機が不時着したこともあり、多勢の人が飛行機を始めて間近に見た。

昭和七年（一九三二）に牧田川新堤防が失業対策事業を兼ねて築かれた。右岸は五日市・高畑間、左岸は名神養老サービスエリアの南側の現在の堤防で、西にあった一番堤より四番堤に至る喰い違い堤防も一直線となり（三番堤はその以前に廃止されていたようにある）強化され、流勢が堤防にかかる負担を少なくする猿尾も、丈夫な幾つかの突堤にかえられて、橋爪の住民も永年の水害の恐怖からまぬがれるようになった。

これにより、南流は廃川となって多岐塚・高田間の木橋は廃止され、また、多芸橋もコンクリート橋が新設されて昭和九年（一九三四）七月から供用開始となり現在に及んでいる。

二十六、 橋爪の水害

古牧田川は舟運があつたことから見ても、橋詰より下流の水深はかなりのものだったと思われる。従つて橋詰附近では割合に水はけがよく、水害はあまり無かつたようである。これは古橋詰が、現流路の河川敷内に存在していたことから想像できる。

織田信長が稲葉山城を完全占領する前年の永祿九年（一五六六）閏八月二日（新暦一〇月一四日）の牧田川大洪水は「河状を変じた」大水で、東へ流れる支流も出来て、相当の被害に見舞われた事は間違いないが、前章で述べたように橋詰が最初の大水害を受けたのは天正一四年（一五八六）の大洪水ではなかつたろうか。

このとき、象鼻山の南西にあつた橋詰の人家は流されて、南麓の岡ヶ鼻の現神明神社附近より東にかけて、前年の天正地震にも耐えた人家のみ残つたのであらう。

元禄一四年（一七〇一）の古記録によると「橋爪村之村居、往古は大黒と申所、取統御座候得共、天正年中之地震之せつ、今之橋爪村へ引越申候」

とある。これは

「橋爪村の集落は、昔は大黒（大畔）^{おおふら}と続いて居りましたが、天正年中の地震の際、大畔の住家は今の橋爪へ引越いたしました」

との意味で、この文書も天正以前の橋爪が牧田川河川敷にあった事を表しているが、天正一三年（一五八五）の地震の際に引越したとの事は疑わしい。

この文書が作られたのは地震より一・一六年後で、天正地震の翌天正一四年の水害と混同しているのではないか。地震で壊れたら、その場へ建てればよいが、洪水で田畑が流失したならば、別の所へ移転すると考えるのが妥当である。

ここで少し話題を変えて関連する面白い話をして見よう。

永祿九年の大洪水の直ぐあとで、墨俣^{すのまた}（洲俣）の一夜城を木下藤吉郎秀吉が築城している。大洪水より二〇日後の九月一二日、二一四〇名の蜂須賀小六などの野武士を連れて墨俣到着、一日にはほぼ完成、一五日には信長が自ら入城し、秀吉の功績を賞して銀子一〇〇枚金子五〇枚を与えて三日間滞留したという。築城に先立って上流から材木を流し、製材木取りを行ってから舟・いかだで輸送して現地で組立てたとの事だが、この永祿の洪水も秀吉にとっては恵みの大水だったかも知れない（天正大洪水で一夜城流失の説もある）。

閑話休題、徳川期になり寛永一二年（一六三五）戸田氏鉄^{うしかね}が尼ヶ崎から大垣に移封され、

橋爪はその領地となつてから一五年後の慶安三年（一六五〇）九月一日二日（新曆九月二六日二七日）大雨が降つて未曾有の大洪水となり、岡ヶ鼻ほか牧田川数カ所が破堤した。

この大洪水は「枝広の大水」「ヤロカの大水」と云われ、濃州の低地はことごとく水底に没し、岐阜・養老間は舟で往来できたという。死者三〇〇六人、牛馬七一〇頭死、流失家屋三五〇二戸と記録されている。

岡ヶ鼻に残つていた古橋詰の住家と篠塚神社は流された。神社にあつた宝物古文書類も流失したと伝承されている。流水と土砂は現橋爪と栗原の間を色目（室原）まで達した。それ以後は海みたいな状況にあつたのだろう。このとき、新宮野ができたと云われる。

今、岡ヶ鼻に立つて東北東を、はるかに眺めると、流れたところは僅かながら低地となつていて、濁流がとうとうと泡を嚙んで田や畑を呑みこんでゆくようすが脛に浮かぶようである。

現橋爪には、それより以前の兵乱や水害を逃れた人々が、かなり住んでいたと思われるが、どのような被害があつたのであろうか。

元禄一四年の古文書によると

「慶安三年庚寅^{こういん}之大洪水にて大くろ前乙坂境より岡之うしろ田地其節大分川原に罷成も

つとも村南之方田地ならびに村中水押込家居迄押流依之御検地御帳迄水失仕候」

また、同古文書には

「大久保石見守（長安、初め武田家臣で後、家康に仕え金山奉行・検地奉行など勤めたが歿後不正が発覚、一族は嚴罰に処される）様御検地（慶長一四年・一六〇九年頃）高四百九拾九石余にて御座候処、五拾六年以前正保二乙酉年（おつゆう一六四五年、慶安水害の五年前）御再検被仰付九百廿六石六斗貳升六合罷成…中略…慶安四年九月御検地御奉行浅井六左衛門殿山田惣兵衛殿松原角左衛門殿岡本利兵衛殿被仰付御再検高五百石壹斗二升、当荒高拾貳石余都合五百拾貳石余之御帳にてござ候、延宝六戊午年（はご一六七八）御地場御検地被仰付高七拾九石余御改出高御座候」

これによれば、大洪水五年前の村高は九三六石六斗余りだったのが、洪水翌年の検地では五一二石余になり半分近くに落ちこんでいる。まさに、大被害であるのがよく分かる。二七年後には七九石余復興しているが、ほかは川原になったのであろう。

岡ヶ鼻の篠塚神社のご神体が、現篠塚神社境内の大樹に引っかり止まったと口伝えられているが、筆者の子供の頃、牧田川に大水が出たとき、橋爪側の沿岸部に無数の流木や上流の流失家屋の家具などが流れ着き、河原の灌木の間を漂っていたのを思いだす。

そのような状況だったろうか。

岡ヶ鼻の古橋詰集落流失後に、その住民が現橋爪地区に移り住んだのも、ここなら、また水害があっても被害が無いだろうと考えた結果であろう。そして、それは正鵠を射たものであり、以後、橋爪に大被害をもたらした水害の記録や伝承は見当らない。

だが、橋爪西堤が破壊すれば、橋爪は大被害を受けるとの恐れが住民の脳裡に絶えずあり、その保全と強化には常に意を尽くした。上流より一番堤、二番堤、三番堤、四番堤と食違い堤を順次重なるように築いて、上流堤が壊れた場合、また象鼻山西に溜った水を排水できるように考えたのは、経験による先人の知恵であろう。

橋爪集落のすぐ南側、名神高速道路養老サービスエリアの北側の道路は徳川時代よりあった旧堤防の跡地である。

この道路は大岡孝男氏宅の前で二股に別れているが、北の道が旧堤防で東集会所の前まで行き、少し右に曲がって名神高速の小トンネル附近を通り、金屋御井神社春日神社南側の堤防につながっていたが、昭和三八年（一九六三）高速道路新造のとき、全部取払われて土砂は高速道路の路盤に使用された。

旧堤防は、最西端が四番堤の中程に接続していた。接続箇所に近い部分は高さ一間

(一八〇cm)ほどの低いものだった。このあたりは、あまり水圧がかからない事にもよるが、堤防の東に湧水したり大雨で溜った西部農耕地の水を排水するために、いつでも切開できるよう、わざと低くしたものだっと思われる。

この旧堤防は橋爪集落に近づくほど高さと幅を増し、集落部分ではかなり立派なものになっていた。特に東集会所あたりは広堤ひろつみと呼ばれて幅員も大きく、驚くほど堅固に築かれていた。これはこの附近がしばしば破堤した名残りであろう。古記録に云う橋爪の破堤はこの広堤より東であつたと思われる。

この部分で破堤すれば、水の大部分は東北に流れるだろうが、一部は西に流れて集落東部に浸水する。これが徳川中期以降回数あつたようである。

古老の話によると、集落東部の東西の道を、押寄せた水が川の如く西に溯るのを目撃し、恐怖に震えていたそうである。東部の家で屋敷の周囲を土塁のように高くしてあるのは水を防ぐためであつた、と古老は云う。

また、牧田川が洪水で水量が増した明治期に、旧大神宮燈明の台地で手を洗えたときもあつたそうである。そのような折は村内に湧水が盛んに出た。

サーピスエリア南側の現堤防は佐竹直太郎代議士の尽力により、昭和七年に失業対策

事業を兼ねて造成されたものである。四番堤の末端と金屋の神社南を結び、橋爪を水害の恐怖より開放すると共に、人夫賃で沿岸の人々は大いに潤った。

産業の未発達はその頃は、就職したくても近辺に企業が少なく、多勢の青壮年が農業仕事だけで在宅していたので、一日七五銭から八五銭の現金収入の魅力に引かれて沢山の人が働きに出た。

スコップとツルハシによる手作業で、機械といえど土砂運搬のトロツコぐらいだった。子供たちは、日曜になると川原や堤防に長々と続くレール上でトロツコを動かして、乗って遊んだものである。

◎ 水害史

○永禄九年（一五六六）閏八月二二日（新一〇月一四日）古牧田川に東に流れる支流ができる。古橋詰西部南部の耕地被害。

○天正一四年（一五八六）六月二四日（新八月九日）牧田川流路を変える。古橋詰の真ん中を新牧田川が貫流する。大畔と分離。人家耕地大被害。牧田川の主流水が勢至方面へ流れなくなり、烏江方面へ流路が変わる。

○正保年間（正保四年？。一六四七）金屋御井神社流失。金屋堤が決潰すれば橋爪にも若干入水したかも知れない。

○慶安三年（一六五〇）九月一日二日（新九月二六日二七日）岡ヶ鼻ほか牧田川数カ所破堤。ヤロカの大水。岡ヶ鼻の篠塚神社や人家流失。西部南部北部の耕地大被害。新宮野できる。牧田川堤国役普請（被害に關係のない所を含めて美濃国中の領主に費用を分担させる方式）にて修築。

○安永二年（一七七三）六月二〇日（新八月一〇日）橋爪村段木所切入、一円入水。

○同年七月一二日（新八月二九日）橋爪村下より入水。

○享和二年（一八〇二）六月二九日（新七月二八日）橋爪村西堤新抱の所九〇間余切所

（篠塚神社記録）

○明治三年（一八七〇）八月一八日（新九月一三日）橋爪村五二間破堤入水。

○同年九月十八日（新一〇月二二日）橋爪村破堤、耕地の被害あり。

○明治一四年（一八八二）九月八日金屋村で破堤、安久正覚寺流失。橋爪にも多少入水したであろう。

○同年九月一二日金屋・安久・直江堤破壊。

○明治一八年（一八八五）七月一日橋爪東南破堤。（養老郡志には五月二日と記載する）

橋爪の主な水害は以上のように川岸にある村としては少ないが、これは上流・周辺・下流の村々の破堤で助かる場合が多い。洪水時には非情なようだが、自分の処以外で破堤することを誰でも心に願う。どこかで切入ればたちまち水は引いて自分の地区は助かるからである。ほかの人々には悪いと思いい気の毒だと思えるが、そのような気持になるのも人間の悲しい心情の故であらう。

橋爪の水害を少なくしたと思われる北流牧田川の破堤・水入は次のようである。

正保四年（一六四七）	大墳村堤五三間切入
万治二年（一六五九）	〃 二一 〃
延宝二年（一六七四）	〃 三〇 〃
元禄六年（一六九三）	〃 一二 〃
享保四年（一七一九）	〃 一六 〃
同一三年（一七二八）	直江村堤五〇間切入
宝暦六年（一七五六）	五日市村堤破壊

同 七年（二七五七） 〃 切入

同 八年（二七五八） 〃 切れる

明和五年（二七六八） 七月、五日市村破堤

同 年 八月、 〃

安永八年（二七七九） 直江村破堤

同 年 七月、大畔堤沢田村堤六二間切入

享和二年（二八〇二） 七月、直江村堤切入

同 年 九月、直江村六〇間破堤

文化六年（二八〇九） 五日市村破堤

同 一二年（二八一五） 〃

同 年 大墳村一五間破堤

同 一三年（二八一六） 大墳村堤一二間切入

天保八年（二八三七） 〃 一一 〃

弘化二年（二八四五） 〃 切入

嘉永元年（二八四八） 八月、大墳村四カ所切入

同 年 九月、金屋村堤五〇間破壊。直江村堤三カ所一三〇間破壊

同 二年（一八四九）大墳村堤一五間切入

同 五年（一八五二）七月、大墳村堤二カ所三八間切入。九月、沢田村東・大畔・大墳村切入

安政二年（一八五五）九月二日大墳村一八カ所切入。直江村二カ所一一〇間破壊。

九月三〇日沢田村東一四〇間、大畔四〇間切入

同 四年（一八五七）大墳村二カ所一一間及び一二間破壊

万延元年（一八六〇）沢田村切入

文久元年（一八六一）大墳村堤九間余切入

明治三年（一八七〇）大墳村堤二カ所三〇間及び一三間切入

同 九年（一八七六）沢田村五〇間破壊

同 一四年（一八八二）九月八日金屋村破壊、安久正覚寺流失。九月一二日金屋・安久・大

墳・高畑・直江村破壊

同 一五年（一八八二）高畑・大墳村切入、高畑村全部流失

同 一八年（一八八五）橋爪東南及び大墳村破壊

二十七、地震

橋爪地区は地盤が堅いので、地震の被害についての地元の伝承や記録は殆どない。地震には強弱或いは影響地区の広狭などがあるが、諸書に記載の中で地理的に見て関係があつたと推定されるものの状況や記事を挙げて見よう。

○明応七年（一四九八）三重県津市が潰滅した大地震。昭和の三河地震や東南海地震ほどの震動があつたのではないが

○天正一三年（一五八五）岡ヶ鼻が一夜のうちにゆり上げられて台地となった。牧田川の流路が変わる原因の大地震（橋爪記録）

○慶長元年（一五九六）七月一二日（新八月五日）大地震、多良時の山が崩れて禿山となる（多良浄徳寺記録）

○宝永四年（一七〇七）一〇月四日（新一〇月二八日）垂井宿惣家数二〇五軒のうち一〇軒破損。東海道方面の大規模な地震で宝永大地震という。富士山の噴火は同年十一月二日深夜で、この地震とは異なる

○文政二年（一八一九）六月一二日（新八月二日）八ツ時。壁が壊れ、家屋の倒れるものもあつた（時村円光寺記録）

○嘉永元年（一八四八）六月一四日（新七月一四日）夜七ツ時（午前四時頃）。水瓶の水がゆりこぼれ、土蔵の壁が破損した。同年一月にも同程度の地震があり、それより一〇日程昼夜震動した（円光寺記録）

○嘉永七年（安政元年・一八五四）六月一四日（新七月八日）夜八ツ時（午前二時頃）。一時間ほど鳴動、高田酒屋八十郎方大蔵崩れる。四日市方面では潰家多数出火焼失。

○同年一月四日（新二月三日）朝五ツ時（午前八時頃）大地震。養老郡南部東部被害甚大（烏江吹原文書）。この年より翌年にかけても何回も地震あり

○明治二四年（一八九二）一〇月二八日濃尾大地震。午前六時三七分突然天地が鳴動し水平上下の二動が西南より東北に進み、およそ一分間を経て急に烈しくなり、その方向は東西南北上下左右あらゆる方向に震動した。震源は本巢郡根尾村水鳥附近でマグニチュード八・四、関東大震災より大きかったという。

養老郡の被害は全潰一六六六、半潰一五〇一、死者一〇九人、傷者三六〇人で、日吉村は全潰七、半潰一五、死者一人、傷者八人であり、橋爪の倒壊は三戸だった

○明治三十一年（一八九八）一月一日、壁に亀裂程度

○明治三十九年（一九〇六）四月二日、器物転倒程度

○明治四十二年（一九〇九）八月一日午後二時三十分。灯明台が倒壊したところもあった

○昭和十九年（一九四四）二月七日午後一時三六分マグニチュード八・三。壁に亀裂、器物転倒。東南海地震

○昭和二十年（一九四五）一月一日午前三時三八分マグニチュード七・一。壁に亀裂の家もあった。三河地震

この東南海・三河両度の地震は戦時中の事で新聞に被害状況は発表しなかったが、航空機生産に大きな役割を果たしていた愛知県の工業地帯に多大の被害を与え、大東亜戦争遂行に大きな障害を生じた。人々は戦局の非を感じていた折だったので、地震に追打ちをかけられ、不安と動揺を起こした

○昭和二十二年（一九四七）にも、かなりの地震が未明に発生し、人々は思わず屋外にとびだした。地平線のあたりが一面に雷鳴時の電光のように光って、ドドドーンという鳴動音が遠雷の如く聞こえたが被害はなかった

二十八、神社

1 篠塚神社（旧社格・村社）西川原

「第二章」と「第三章」とに詳述したので棟札の要項と略史を書くことにする。

一、修造、慶安三年（一六五〇）八月朔日美濃国多芸郡氏子繁昌の所（この一ヵ月後に大洪水流失）

一、造立、寛文五年（一六六五）四月一五日橋爪村氏子惣中

一、開眼供養聖觀世音菩薩寛文十年（一六七〇）五月二八日

一、再造上葺、貞享二年（一六八五）八月二七日橋爪村惣氏子中 導師金屋郷仏照山玉泉院律師俊栄 工匠長谷川彦兵衛藤原勝次

一、造立、宝永四年（一七〇七）十一月吉祥日願主高木六郎右衛門源勝舍惣氏子中

一、再造、延享四年（一七四七）二月一九日遷宮橋爪村惣氏子中 遷宮導師大塚村妙徳院法印亮海 工匠宇田村藤原朝臣長谷川彦次良孤春

一、上葺、宝曆十一年（一七六一）九月二九日橋爪村惣氏子中 遷宮導師大塚村妙徳院大

和尚即源

一、享和二年（一八〇二）八月一七日未上刻（午後二時）遷宮

この遷宮についての当時の記録には

「当社及大破候に付牧田村清八へ引会酉の極月（享和元年一二月）より相掛り漸く戌の六月下旬（同二年）迄に出来致し候処遷宮の相談に相及ぶべく存居候然るに六月二十九日夜洪水に付大畔堤沢田村堤長六二間切込当村西堤新抱の所九〇間余切所有之候にて遷宮も大に延引漸く右の普請も八月中旬迄に急所の分出来候に付同一七日遷宮相済候云々」とある。

棟札を見ると徳川期以前は遷宮などの主要行事には仏僧が導師として参加している。

これは当社に仏像が合祀せられている故ではなく、神仏混淆こんこうの時代には他社にも見られることである。

例祭日にもふれておく。明治一五年九月一四日付で、岐阜県島田警察署長警部補神原鉄太郎氏宛に呈出した書類には、当社例祭日は往古より八月一七日であったが、明治維新より九月一七日にしたとある。島田署とは現在の養老警察署の事で、当時は祭礼日まで警察署長の認可を必要としたのである。

なお明治の終りには九月二五日とし、更に小学校を祭礼休業とするため、日吉全村を

統一して一〇月五日に改めている。

明治二七年（一八九四）八月三十一日、宝蔵庫を新設、同時に神社前の小川にかかる土橋を石橋に架けなおしたと、氏子総代大久保庄吉氏の記録にある。

玉垣は、明治四三年（一九一〇）の例祭前につくられた。このときの祭礼は九月二五日である。

大正一二年（一九二三）社務所落成。

賽銭箱の設置は昭和六年（一九三一）一月一八日相談役会で決定し、同会より有志金として三円五〇銭寄付した。目的は「氏神崇拜心の養生のため」としている。

昭和の初めころの祭礼のようは、どのようであったか。昭和七年一〇月五日の神社日誌の記載を見ると

「午前、祭典準備、青年団奉仕。午後零時三〇分大橋社掌（直広氏）来着、任務奉仕。続いて久保田村長（信也氏）来着。氏子総代村上喜市郎、村上肇、河村利作、村上富吉外青年団員十数名。午後一時祭典事務所より、案内村上肇、唐櫃、神饌幣帛料供進使（久保田村長）、神職（大橋直広氏、副村上伝二氏）、氏子総代、神事係、青年会の順序にて参進、神社到着。午後一時二〇分より祭典開始。参拝者一般氏子数十名、小学校生徒約七〇名、

午後二時終了。神酒三升」

と書かれ、盛大さが偲ばれる。

なお、念長寺の南西の三叉路に大のぼりを立て、それより神社入口までの道路に区内四組と青年団・軍人会の屋形が建てられ、その間に高張提灯ちやうちんが掲げられた。

境内には現在と同じように紅灯笼や掛行灯あんどんが並べあげられて、夜に灯が入ると夢の中のように華やかで賑々しかった。

昭和八年三月三〇日、神饌田として村上喜市郎氏が西川原の田一畝一七歩を奉献し、基本財産として登記を完了している。それより神饌田で田植行事などが行われた。

昭和十一年（一九三六）三月五日、御神実をお納めする御樋代御舟代と、観世音菩薩を奉納する御厨子みずしがいたんでいたので、改めて木簡二枚と共にお納め申し上げる。木簡の記載は次の通りである。

（表）

美濃国神名記所載

奉新造正六位上大酒明神

御樋代
御船代

多芸十六社之内 社掌大橋直広

(裏)

昭和十一年(紀元二千五百九十六年)

参月五日祈年祭当日

岐阜県養老郡日吉村橋爪氏子惣中

工匠 高田町 星野享

(表)

種々重罪五逆消滅

奉改造大慈大悲觀世音菩薩御厨子

自他平等即身成佛

(裏)

昭和十一年参月五日

岐阜県養老郡日吉村橋爪氏子惣中

工匠 高田町 星野享

昭和一九年二月七日午後一時四〇分（正確には三六分）大地震（東南海地震）で境内の大松が倒れた。根より切断して神社の修繕に利用した。

昭和二三年四月一日、拝殿改築奉告祭。

昭和三四年九月、一五号（伊勢湾）台風。倒木四本、社殿の鬼瓦飛び宝蔵庫傾く。一月二十九日修理完了。

昭和三九年四月二十八日、賽銭箱盗難相次ぎ鉄板で作り換える。

昭和五九年九月一六日、社務所（橋爪青少年集会所と兼用）再造・太鼓庫再造落成。宝蔵庫修理。

昭和六二年七月一七日より神殿・接続廊下・拝殿の屋根瓦総葺替、新瓦であるが全部原形通りにする。施工者別庄久保山正夫氏。神殿・廊下の一部修理は橋爪木村正二氏。

昭和六二年八月二五日、遷座祭。午後二時より四時三〇分まで総代々表準備。六時総代集合。六時四〇分神職大橋正広社掌参着。七時三〇分橋爪四区長担当集合。七月一七日に宝蔵庫飯宮に奉安の御神実二柱・木簡二枚・御幣・大麻を神殿にお遷しする儀式を行う。

服装。神職は正装。氏子総代四氏（村上喜代志、村上静雄、木村強、村上由男）は礼服。

区長四氏（大久保長寿、村上秀夫、河村利信、中山勇）は神職持参の白上衣を着用。神職、総代、区長とも全員白マスク白手袋を着して奉仕する。担当八人は拝殿に座して迎える。午後八時遷座祭開始。仮宮で神職祝詞奏上。のりこ境内全部の電灯を消灯し、提灯二張の照明だけで執行する。御神実二柱を大橋神職と総代々表村上喜代志氏奉持、木簡二枚、御幣、大麻を村上静雄氏、木村強氏、村上由男氏奉持し、区長は介添随伴する。

神殿へ御遷座したのち電灯を点灯する。神前灯は六角灯、拝殿は神灯、吹き流し色旗、神鏡、剣、勾玉を例祭と同様にお飾りする。御遷座完了の神職の祝詞。終って玉串奉奠。時々の降雨烈しく一同外からの雨と中からの汗で衣服を濡らす。午後九時三〇分全終了。

2 白山神社（旧社格・村社）天待

別庄の鎮守神。ご祭神は伊弉冉尊いざなみのみことで合祀神が伊弉諸尊いざさのみことと菊理姫であると養老郡志に記してあるが、一般には白山大権現と申し上げている。

第十章「別所寺焼討ち」で触れたが、鎌倉時代の初め別所寺内に騒動が起こり、二代將軍源頼家は黒田真与に命じて鎮圧させた。これが建仁二年（一一〇二）で、その四年後の建永元年（一二〇六）二月に黒田氏が当社を建立した。

黒田氏の出身が白山に近い越前中島城で、日頃崇敬する白山大権現を祀ったのであろう。建武二年（一二三三）に足利・新田両勢力の争いで別所寺ともども焼失したので、元の鎮座地は不明である。

棟札には、その節、重役（支配役）であつた黒田三七郎源正常が氏神として、このところ（現鎮座地ではなからうか）に安置したとある。

下つて徳川時代となり、三代將軍家光の正保二年（一六四五）初秋、久保寺氏（正常のとき改姓）が一字を再造し、更に享保四年初冬（一七一九）八代將軍吉宗の時に再造した。

それより三三年後の宝暦二年（一七五二）夏の正祭日に再興したと記載するが、再造と再興では意味が違う。享保から宝暦までの間に何が起こつたのか。

このときは濃州不破郡別所郷惣氏子講中となつてゐる。更に文政九年（一八二六）八月新建するとあるが、これは新造と同義であらう。

3 中山神社（白山神社境内社）

ご祭神不詳。養老郡志には、当社は美濃國神名帳に載せられた多芸郡一六社の中の「正六位上中山南明神」であらうと記している。

今津洪嶽氏（元花園大学教授・養老町金屋出身・昭和四〇年逝去）は、別所は本来不破郡に属するので多芸郡一六社中には入らない、とされる。だが郡境は領主などが交代したり行政の変革によつて変更される事がしばしば見られる。

また、そのような立派な格式を持つ神社が、果たして一〇〇〇年の前から、この境内社の場所に鎮座されていたのか疑問を持つ。

更に今津氏は、中山南明神は牧田上野の麦房神社がそうであろうとされるが、養老郡志の編著者大久保休吾氏は、多芸郡一六社中に従五位上と正六位上の中山南明神二社があり、麦房神社は従五位上の方であるとしていられる。

今津氏は、美濃国神名帳不破郡八二社の中の「正六位上中山若御子明神」が別庄の中の明神ではなからうか、と云われるが何れも確たる証明はない。

ただ、中山とは「美濃の中山」の事と思われるので、中山南明神は中山の、南の方に位置して居られたことは間違いないであろう。

4 山神神社（旧杜格・無格社）天待

ご祭神 大山祇神^{おうやまづみのかみ}。伊弉諾・伊弉冉二尊の子で山を掌る神。由緒不詳。

5 八幡神社（旧社格・村社）村下

ご祭神 応神天皇・比咩大神・神功皇后。徳川時代には「若宮八幡」と呼ばれていた。

応神天皇（一五代）は仲哀天皇（一四代）の第四皇子、母は神功皇后。在位中百濟より王仁^{わに}等が来日、漢学論語を伝え、また縫工・織工・鍛工・船匠などが百濟新羅から多数帰化した。神功皇后は仲哀帝の皇后で朝鮮の新羅を征した。比咩大神は不詳。

八幡宮は弓矢の神で九州の宇佐八幡宮が基。京都に岩清水八幡宮ができ、更に頼朝が鶴ヶ岡八幡宮をつくった。源氏の氏神（氏の神、その種族、一族の神、略して氏神）とされる。これに対して平家の氏神は嚴島神宮としている。

元禄古文書は当社は十日市の人たちの氏神と記す。

当社は加藤家で護持され、永禄年間以前より存続しているものと推定される。縁故不詳。

6 神明神社（旧社格・無格社）岡ヶ鼻

ご祭神 天照大神・豊受姫命

伝承によれば、慶安三年の大洪水で岡ヶ鼻堤が決潰し篠塚神社が流失、その跡地にここ

より取水する生活農耕用水に関係ある村々で建立したという。

往昔は祭礼の折、井組各村より参詣者が多く盛大に行われたが、現在は橋爪と別庄のみで執行している。

勧請年は明らかでないが、慶安洪水（一六五〇）よりそれ程年月の過ぎない間で、篠塚神社の再建（寛文五年・一六六五）の年か、それ以後若干年のうちであろう。

最初の記録にも勧請年はなく、棟札写しとして次の記載がのこっている。

一、（表）延享二年（一七四五）六月二六日未上刻（午後二時頃）奉再立岡ヶ鼻神明宮五穀豊饒氏子繁栄所。（裏）往昔奉勧請村、橋爪村・宇田村・中村・豊村・金屋村・大坪村・室原村惣氏子中、神主新井主計

一、宝暦六年（一七五六）奉再立神明社美濃国多芸郡橋爪村惣氏子中。境内横拾間長貳十間御除地

一、奉再立神明宮、大善院、寛政三年（一七九一）四月二一日遷宮多芸郡橋爪村惣氏子、橋爪村大工弥三八

神主新井主計は、時村湯葉神社の棟札中に『多芸郡石畑村新井主計太夫盛光』とある人だろうか。この棟札は安永六年（一七七七）三月一七日と記載する。

昭和三八年（一九六三）日本最初の自動車専用高速道路である名神高速道路が建設されるにあたり、岡ヶ鼻台地と当社周囲にあった森は取り払われて広々とした平地となり、背後には二車線の道路が造られて、絶え間なく自動車が通るようになった。

この神明社の地が大垣・垂井の西濃主要地域と、牧田・一之瀬・多良・時を結ぶ主要路にあたることは、一千数百年の昔から少しも変わっていない。

昔はこれに加えて桑名へ赴く街道があった。この桑名街道（伊勢街道）には、川を渡って桜井より養老經由の道と、古牧田川の左岸をえんえんと伝う街道の二つがあった。左岸道は関ヶ原合戦ころまで存在していたようで、同合戦のみぎり、南宮山展開軍が利用した形跡がある。

昭和四〇年一〇月一二日、東洋ブロックに神明社境内地を貸地する契約が成立し、その貸地料が橋爪神社会計に入り、以後は年末各戸より玄米一升宛と祭典費（当時は百円宛）を寄進していたのを中止する事になった。

昭和四〇年一二月三〇日、木製鳥居建設。

昭和五〇年一二月二七日 木製鳥居再建。

昭和六三年九月二六日 木製鳥居再建、施工者河村諭氏。

7 厳島神社（旧社格・無格社）岡山

ご祭神 伊都伎島神（養老郡志）。市杵島姫命。

弁才天、弁財天、弁天（七福神の一神）。福德、知恵、財宝、弁才を司る。また海と水の神であり、海の交通安全、水運、治水等、水の守護神である。

文久三年（一八六三）当地方で旱魃が続き飲料水にも事欠く難儀の状態になったので、雨乞いの為八月二六日竹生島の弁財天のご繪像を戴きお祭りをした。当日は井組の村々の多数の人々が参詣し、祭式は甚だ盛んであったと伝えられている。

初めは神明神社の境内にお祀りしてあったが、一狂人がある日『ほこら』を背負って岡山に登り山上に放置した。それより山上に鎮座される事になった。

昭和六年（一九三二）四月一九日遷座祭。改造奉仕は橋爪別庄青年団。費用一五〇円、一組当り三〇円。社殿大垣市新馬場町村田氏より購入。石材は村上伝二氏寄贈。

昭和四三年（一九六八）山上火災で当社全焼。五月一八日社殿再建。

昭和五五年（一九八〇）四月五日、御神体紛失につき竹生島宝厳寺より弁財天のご繪像を奉戴する。

8 御鋤神社（篠塚神社境内社）

ご祭神 豊受姫命

勧請年月不詳。五穀を掌る神。五穀（米・麦・粟・黍・豆）穀類の総称。

文政三年（一八二〇）五月二十七日御鋤社大破につき修覆、遷宮、大工橋爪村藤内。
昭和四二年（一九六七）三月五日御鋤社再造。

9 招魂社 岡山

ご祭神 日露戦争より大東亜戦争までの橋爪別庄の戦歿者二八柱。

明治三九年（一九〇六）最初の祭式。

ご祭神御名、官等級、戦歿年月日、戦歿地を次に記して永久に榮譽をたたえる（敬称謹略）。

河村治吉 陸軍歩兵上等兵 明治三十七年八月一九日 清国旅順

村上喜代吉 海軍一等水兵 明治三十八年八月一〇日 対馬竹敷要港部

洪谷友吉 陸軍歩兵上等兵 昭和二年一〇月四日 中華民国江蘇省宝山県北梅宅

三田清 陸軍伍長 昭和二年一〇月一四日 中華民国上海大場鎮附近鎮家宅

木村甚市 海軍三等飛行兵曹 昭和一七年六月五日 ミッドウェー海戦

村上武夫 陸軍軍医中佐 昭和一七年八月二五日 フィリッピン、ルソン島タヤバス州

ルセナ

大岡貞市 陸軍伍長 昭和一九年三月一日 台湾東方海上

加藤清造 陸軍一等兵 昭和一九年五月一六日 ビルマ国モールメン

黒田豊 軍属 昭和一九年七月八日 サイパン島

大久保正俊 陸軍主計大尉 昭和一九年七月一八日 サイパン島

三田正美 陸軍伍長 昭和一九年七月一八日 マリアナ群島方面

木村求 陸軍兵長 昭和一九年八月二二日 中華民國湖南省東陽西方獅子岩

村上国男 陸軍兵長 昭和一九年一〇月二日 バシー海峡

村上文造 陸軍上等兵 昭和一九年一〇月三日 バシー海峡

大橋定夫 陸軍兵長 昭和一九年一〇月二五日 中華民國漢口

村上利夫 陸軍兵長 昭和一九年一二月一〇日 フィリッピン、レイテ島オルモック

中山篤男 海軍水兵長 昭和一九年一二月三一日 パラオ島

安福惣藏 海軍一等工作兵 昭和二〇年三月一〇日 東支那海

久保田忠男 陸軍上等兵 昭和二〇年三月三〇日 イリサン西側附近

村上仙蔵 海軍水兵長 昭和二〇年四月七日 西南太平洋

大久保増雄 海軍少尉 昭和二〇年四月二四日 フィリッピン、ルソン島クラーク地区

中山肇 海軍上等兵曹 昭和二〇年五月六日 タラカン島

村上正雄 海軍二等兵曹 昭和二〇年五月二五日 中華民国アモイ南方六〇哩

河村利美 海軍一等飛行兵曹 昭和二〇年六月一〇日 霞ヶ浦

堀江克巳 陸軍伍長 昭和二〇年八月一日 フィリッピン、アグアン山

村上繁夫 陸軍伍長 昭和二〇年八月三日 ソロモン群島ブーゲンビル島キエタ高地

久保田仁六 陸軍兵長 昭和二〇年九月五日 中華民国広東省

久保山美吉 陸軍兵長 昭和二一年四月二一日 中華民国湖北省金口鎮

平成四年四月 社殿再造

10 金刀比羅社 南川原

俗称を金毘羅・金比羅・こんぴらさんという。本元は讃岐国（香川県）仲多度郡琴平町象頭山（琴平山）の中腹にある。この本社のご祭神は大物主命と、この地で亡くなられた

七五代崇徳天皇をお祀りしてあるが、本来の神様は天竺の靈鷲^{りようじゆせん}山の鬼神で魚神で蛇形、尾に宝玉を蔵されている。薬師如来の十二神將の一神で宮毘羅^{くびら}大將または金毘羅^{こんびら}童子と申し上げる（ばん語KUMBHIRA鰐魚の意）。

航海の安全を守る神様として古来より舟人が最も尊崇している。当社が橋爪にお祀りしてあるのは、昔は牧田川のこの附近まで舟が着いたのであろうか。宝暦治水の薩摩工事のときには橋爪より石を積み出した。

こんびらさんの元の位置は河村諭氏の作業場の東あたりであった。

昭和二〇年一〇月一〇日、地震により倒壊していたのを原形に立ち起こす。午後一時より青年団奉仕。

昭和四〇年七月一五日、名神高速道路工事のため三年ごし取りこわし中の金比羅社と大神宮常夜灯を現在地に再築落成。

11 大神宮常夜灯（とうみょうさん）南川原

天保五年（一八三四）一二月、代官所へ橋爪村前提南角に、五穀成就村中安全のため、大神宮常夜灯を建てたき旨、場所の墨引（略図で橋爪中央部の南堤上）を添えて願ひ出てい

る。翌年二月郡奉行より代官へ、代官より橋爪村へ許可が下りている。

願書には寄附となっていて、百姓代、五人組頭二名、名主名を連署している。

天保六年乙未（一八三五）建立。橋爪の記録にはないが、その頃大飢饉が続いたと歴史書にある。建立後、武佐祭の当元（統元、統本）二人が毎晩交代で菜種油で点灯した。

明治二年（一八六九）大神宮遷宮とあるが場所が変わったのであろうか。名神養老サービスエリアができるまでは、大岡和男氏南側の旧堤防を数間外側にふくらませた上にあった。

戦前までは、七月一五日の灯明さん祭りは「野（農）休み」と云って村中の人が野良仕事（農作業）を休み、一軒から一人ずつ集まり、灯明さんの東側にあった広場に「むしろ」を敷いて酒を飲む楽しみの一日であった。大太鼓を打ち鳴らし掛行灯、紅灯籠を出した。

昭和の初めころ、灯明さん広場の西北隅に鉄骨製の高い火の見やぐらが建設され、橋爪の名物^{（わいあつ）}になっていたが、昭和一八年の金属回収で念長寺の梵鐘などと共に国に供出された。

昭和四〇年七月一五日、名神高速道路工事のため取りこわし中の大神宮常夜灯及び金比羅社を現在地に再築。

昭和五六年四月再改築。

12 その他

明治二年（一八六九）六月の橋爪神社書上帳には篠塚社白山社など前述の神社の外に

稻荷大明神一社 境内一畝八歩

三社明神一社 境内一畝一〇歩

大黒天一社 境内三畝七歩

とあるが、この社はどこにあったのだろうか。当時橋爪の戸長が管理していた高畑だろうか。

高畑とすれば、明治一二年（一八七九）一月一四日付で橋爪戸長に報告した『高畑村八幡社外式社宝物古文書目録』には、八幡神社・神明神社・稻荷社の三社がある。その書類には、多芸郡高畑村受持神官少講義大橋平三郎、右社信徒惣代大橋嘉市・大橋博三郎、右村戸長久保田宗八の署名捺印がある。

三社明神は三種の神社を合同したものであろう。同社と大黒天社は目録にないが、洪水で流失したのだろうか、不詳である。

二十九、 仏閣

1 念長寺（浄土真宗大谷派）村内

本尊 阿弥陀仏

大谷派を東本願寺派ともいう。「第一章」で詳述した。元禄文書には元龜元年（一五七〇）空元が開基したと記するが伝承と異なるのはどうした事だろうか。

2 阿弥陀堂（道場）別庄

本尊 阿弥陀仏

大永三年（一五三三）三月創立とあるから牧田合戦の二年前、念長寺が真宗に改宗する五年前である。また、織田信長が生まれる一一年前だが、本願寺九世実如のときと云う。一之瀬の本善寺（真宗大谷派）は西田坊俊成が道場を草創したが、これも大永三年である。天保九年（一八三八）鹿縁山広徳寺の寺号の公称を大垣藩主に願い出たが許可されなかった。

明治一五年（一八八二）十一月、県丙第六〇号達によって、橋爪戸長村上宗造氏に提出した予約書^{よくしよ}には「多芸郡橋爪村二番地真宗大谷派阿弥陀堂、右堂受持住職不破郡表佐村宝光寺住職林巖秀、信徒惣代多芸郡橋爪村久保田元右衛門・久保田宗八・久保田宇三郎」と書き捺印がある。

半鐘の銘。文政一〇年（一八二七）三月中旬美濃国多芸郡別庄村、勢州桑名住広瀬与左衛門藤原政次作。（戦時金属供出）

3 別所寺（天台宗） 廃寺 別庄附近

「第九章・第十章」で詳述した。象鼻山を背にして南側に万仁寺、北側に清水寺が並んでいたと推察するが、九十九坊と俗称する百余の属坊を入れて別所寺と総称したと思われる。

久保寺双寺は、この二寺の事だと考えられるが、支配役黒田正常が久保寺と改姓したのは、ずっと後世の建武二年（一三三五）の焼亡の頃である。その以前から別所寺が久保寺と言われていたのか明らかでない。

4 地蔵堂 廃堂 別庄附近

元禄古文書に「往古橋爪村岡山別所と申す所に天台宗象鼻山万仁寺並に地蔵堂御座候」とあり、この地蔵堂の楓が池田郡に移され野村楓になったと云う。

また、地蔵本尊は昔近江国木ノ本村に遷されたが、これはここにあったものと申し伝えている、と記載する。現在の『木ノ本地蔵』が、この地蔵尊だとする証明はない。

地蔵堂は天台宗で、拾間と拾弐間の跡地の荒野が残っていると同書にある。

5 釈迦堂 廃堂 篠塚神社の東方

元禄古文書に「信濃墳大明神境内の東の方、畑の中に往古釈迦堂御座候、未だ墳御座候」と記す。

むかし釈迦堂が篠塚神社の東方の畑の中にあつたが、今（元禄一四年・一七〇一）は墳が残っている、と云うが現在は跡形もない。

6 薬師堂 廃堂 十日市か？

慶安年中（一六四八〜五二）に本尊が盗難に遭い堂を破却した。境内は拾間と拾五間、五

畝歩、荒野となり所々松林であつた。と貞享二年（一六八五）文書と元禄文書に記載。

7 真入堂 廢堂 橋爪

真入庵と云うものが、篠塚神社の西南境にあつた、と享保五年（一七二〇）屋敷繪図に在るが、その荒廢年月不詳と養老郡志に記載するが、この真入堂をさすのかどうかは分からない。

明治一五年（一八八二）十一月の予約書よやくしよには「橋爪村真宗大谷派真入堂、受持住職安久村伊東義洞」と署名朱印があり、信徒惣代として村上宗造・村上豊吉・村上藤造各氏の署名がある。

同書によれば明治一五年には堂と財産を保有していた事がわかる。現安久徳願寺住職伊東義導氏に尋ねたが不詳とのこと。現在は痕跡もない。

8 牛馬堂 南川原

一般には『ぎばどう』と云う。さんめんろくび三面六臂の石仏が安置されている。顔が三つと腕が六本の意味だが、どうして珍しいこの仏像が祀られているのか不詳である。牛馬堂の目的

は牛馬の慰霊でいつごろ建立されたか分かっていない。

橋爪に牛がいるころは、ここで牛の蹄切りひづめが行なわれていた。名神工事前は、橋爪の中央南の大神宮常夜灯より七、八〇メートル離れた南川原畑の中にあつた。名神工事後、東方の共同墓地の現在地に移転した。

三十、 橋爪の領主と明治以後の変遷

象鼻山古墳より考えると三〇五世紀頃は、この埋葬者がそれに関係ある人が橋爪附近を支配していたと思われるが、氏名は全く分かっていない。

五、六世紀頃から栗原で勢力を持つようになった柴原勝しばはらのすぐりは七八一年、桓武天皇のお許しを賜わつて中臣栗原連なかとみのくりはらのむらじの姓を名乗つたが、別庄或いは橋爪もその圈内けんないにあつたかも知れない。

篠塚神社に係のある秦氏の盛んなときは六〇八世紀ではなかつたろうか。

橋爪は多芸荘に属したと考えられるが、九世紀貞観じやうがん一四年（八七二）ころ多芸荘は貞観

寺領だったとされる。

もちろん、その頃は国司が権力を持ち郡司が支配していたのであろうが、逐次その権限は薄れて豪族が台頭してくる。

別所寺の興隆は九世紀以後だが、橋爪別庄とも勢力範囲に含まれていただろう。

建仁二年（一一二〇）黒田氏が別所寺の支配役となつてからは、その支配に属したと思われる。

少しさかのぼつて建久三年（一一九二）（こけつ）額結源五盛安が多記（芸）庄半分を頼朝から貰うと平治物語は記すが、これは別所寺領を除いたものであつたろう。

建武二年（一一三五）別所寺が焼討ちにあつてからはどうなつたか。

貞治二年（一一六三）九月、小笠原の一族の丸毛（まるも）六郎兼頼が京都南禅寺の住僧天関和尚大禪師を招いて莊福寺を開山中興したという。草創は鎌倉時代初め（養老郡志）。

莊福寺は丸毛氏が歴代城主であつた大墳城の跡地に建立されたと伝承される。同寺は昭和七年（一九三二）の牧田川改修工事まで多芸橋南詰の地にあつた。

大墳城の丸毛氏が福束城に移つたのは天正の水害後の天正一七年（一五八九）と云われるから、丸毛氏は貞治以来、大墳城或いはその附近に居住していたのであろう。

大墳城に近い金屋西境から象鼻山西の乙坂境まで牧田川河川敷全部が橋爪分だったところから考えても、橋爪は丸毛領ではなかったろうか。

ただ「第二十一章」で述べたように、加藤氏が七〇貫を領して後斉藤家（道三・義竜・竜興）に仕えていた（守護土岐家の時代からか、以前か分かっていない）し、また大橋長兵衛尉が高畑で一〇〇〇疋を給せられていたので（木下秀吉折紙に『其方給所千疋の儀』）、丸毛・加藤・大橋の各氏に分割されていたかも知れない。

大橋氏が丸毛氏の指揮下にあったかどうかは分らないが、高畑で勢力を持ち、かなりの数の家来を持っていたようである。

なお、貫と疋について昭和三〇年刊の広辞苑には「一貫は約一〇石とし、一疋は古くは鳥目一〇文次いで二五文とした」とあるが、昭和六一年刊の広辞苑には「貫は室町時代に武家の知行高を表示するのに用いた名。一疋は古くは鳥目一〇文、後に二五文とした」と訂正されている。貫については異論があるのでそうしたのであろう。一〇〇〇文で一貫とするので、大橋氏の所領は一疋一〇文とすれば一〇貫、二五文とすれば二五貫となるが、天正時代だから後者であらう。

加藤氏が信長・秀吉に仕えて去ったあと、高木氏が跡を受けついでとされるが、秀吉

の兵農分離により高木氏は武士を廃して庄屋名主となり、高畑の大橋氏も同様だったと考えられ、丸毛氏の領になったと思われる。

関ヶ原合戦（一六〇〇）以後は徳永式部卿法印寿昌が領したが、その子昌重の代の寛永五年（一六二八）に改易され、幕府直轄となつて美濃郡代岡田将監伊勢守善同よしあつが筆頭代官となり支配したが、寛永一〇年（一六三三）四月松平越中守定綱の領となった。

日ならずして定綱が桑名城に転封したあと寛永一二年（一六三五）七月、戸田氏鉄うじかねが尼ヶ崎より移封されて大垣城に入り、その領土に編入されて明治維新に至つた。

明治四年（一八七二）七月の廢藩置県により大垣県に属し、同年十一月二日岐阜県が創設されて岐阜県多芸郡橋爪村（別庄を含む）となり明治三二年（一八八九）七月、橋爪村・宇田村・中村・豊村・安久村が合併し、多芸郡日吉村と称した。

明治三〇年（一八九七）四月一日、多芸郡上石津郡が合併し養老郡が創設され、橋爪は養老郡日吉村大字橋爪となり、更に昭和二九年（一九五四）十一月三日、養老町橋爪となった。

三十一、橋爪村高

○天正一七年（一五八九）太閤秀吉檢地

○慶長四年（一五九九）九月一六日檢地、田畑合計三六町七段四步、分米五〇〇石一斗二升七勺（養老郡志）

○慶長一四年（一六〇九）大久保石見守檢地、四九九石余（慶長鄉牒）。四五九石余（元祿

古文書）

○元和高帳（一六一五、一六三三）四五九石九斗八升（養老郡志）

○正保高帳（一六四四、一六四七）四九九石五斗七升一合（養老郡志）

○正保二年（一六四五）再檢、九三六石六斗二升六合（元祿古文書）

○慶安四年（一六五二）九月檢地、五〇〇石一斗二升。荒高一二石（元祿古文書）

○延宝六年（一六七八）檢地改出高七九石余（元祿古文書）

○元祿高帳（一六八八、一七〇三）五五三石九斗五升六合（養老郡志）

○天保鄉帳（一八三〇、一八四三）一〇一〇石余（日本地名大辭典）

○明治五年（一八七二）ころ、一〇三〇石余（日本地名大辞典）

○明治一三年（一八八〇）五月六日、総反別一二九町九反四畝三步、地価五五八六八円七八錢（養老町史）

三十二、牧田川両岸地域の水の争い

橋爪を含めて養老町西部と栗原地区の高地帯は、水害と水利の二種類の相反する問題がある。これが東部の低湿地帯と大きく異なるところである。

牧田川右岸（南岸）の沢田・桜井・上方・竜泉寺・勢至・石畑・五日市・押越等の旧養老村高田町地域と、左岸（北岸）の乙坂・橋爪・宇田・中村・豊村・安久・室原・栗原等の旧日吉村合原村牧田村東部の地域とは、水利水害に相反する利害を持ち、永年にわたって水に関する争いを続けてきた。

元禄六年（一六九三）、川南一九カ村は川北三カ村（橋爪・高畑・大塚）に対して「岡ヶ鼻の猿尾（堤防より川を中心に突き出た突堤）は、以前は十四、五間のはねかごだったが、

唯今は二二七間に突き出しをした。従つて水流は五日市側に寄つて八年前の貞享三年（一六八六）には五日市村堤が切れ、元禄四年（一六九二）には押越村堤が切れたので大變に難儀をしている。猿尾を元のように短かくして欲しい」と要求し、幕府へ訴へ出た。

これに対し川北三カ村は「岡ヶ鼻の場所は繪図面のように、水下二万石余を囲う大切な場所ので四三年前（慶安三年大洪水）に堤が切れた時も、その翌年の慶安四年にも御検使村越長門守様が御見分ごけんぶんなされて、お差図によつて堤ができたので、今もその頃と變つているところはない。

ここが切れると大垣城まで水が押し寄せる大切な処で、川南の言い分は納得できないし、猿尾を取り払つてくれとの訴訟には全く驚いた」と逆に訴状を提出した。

幕府評定所は検使多田五平と師崎武右衛門を派遣し調査をさせた。兩人は二月一七日江戸発足、同月二六日宇田村三五郎方へ参着、牧田川筋を詳細に臨検し、三月一九日発向、江戸に帰り報告した。

評定所は種々協議の末、同年（元禄六年）六月二五日付で老中七名の連署を以て判決を下した。それには

「猿尾を継ぎ足したとの事は全く見られなく古来の通りの如く見える。従つてそのまま

にすること。また、沢田下より高畑上まで四八〇間の石堤があり、これが近年破損したというが、そのような石垣の跡は一切見られない」

として、川北三村の言い分を認め、現在の状況を変更する必要は無いとして、勝訴の裁定を申し渡した。

その他にも元禄年中に井堰^{いせき}について石畑井組と争論があり裁許を下したと、正徳の裁定書にある。

正徳五年^{しょうとく}（一七一五）十一月二五日、幕府評定所は、沢田村と北岸六カ村の井堰論争に老中以下一人の連署を以て、北岸有利の判定を下している。この時の六カ村名は橋爪・宇田・中・吉田（豊）・栗原・乙坂である。

享保九年^{きやうほう}（一七二四）には石畑井組が番水について笠松の美濃郡代役所へ提訴している。その内容は、正徳五年に山田井組と沢田村で井堰論争があり御裁許があつたが、山田井水へ沢山流れ石畑井組へは少々の日照りでも水が流れなくなると云い、石畑井水は山田井水の^{みずしも}水下にあつて取水し難いので、上流で取る分を石畑井水に廻して欲しい、と訴えている。

訴状中の井組の取水順は、広瀬川筋（広瀬橋附近であろう）第一掛井、壺番沢田村井水、

式番乙坂村井水、三番桜井村井水、四番山田井水（橋爪・中・豊・宇田・栗原等にかかる水）、五番石畑村井水、六番宇田村井水で、七番より六番の宇田井水までの三〇町程の間に井数が六筋あったとしている。

宇田井水は最後尾の取水で四番堤、現在のサーブスエリア南西に樋を設け橋爪地内を宇田南部方面に流れていたらしい。宇田北部は山田井水を利用している。

延享四年（一七四七）の石畑井組番水申合書には、橋爪の大畔は高二五石余で石畑井組の五番で配水時間は半日となっている。

宝暦元年（一七五二）には石津郡市之瀬村（一之瀬）で畑に水を引くので川下の村々に水が流れない。それを止めて欲しいと市之瀬の領主石河伊賀守に橋爪・宇田・中・豊・乙坂・桜井・上方・竜泉寺・石畑の九カ村が願い出ている。畑に引くぐらひは僅かだが、旱魃のときはそれすら欲しいのである。

安永九年（一七八〇）石畑村・竜泉寺村・上方村の井水堀堰の事で、橋爪村・中村・豊村・宇田村との間に争論があり、長松・木戸・乙坂・大墳・鷺巣五カ村の名主が中に入って内済にしている。

明治十一年（一八七八）には井堰位置について石畑井組が宇田井組（橋爪・中村を含む）

を相手に告訴したが、翌一二年三月一日名古屋裁判所岐阜支庁で北岸に有利の採決がなされた。石畑井組は東京上裁判所に控訴したが、同年七月一五日中午裁人沢田村日比貞三郎・乙坂村佐藤良造・島田村寄留大橋平三郎三氏の中裁（仲裁）で内済が成立した。

明治三十一年（一八九八）五月二十九日、大畔帰属問題で日吉村長金森祝氏が、養老郡長川喜多壮蔵氏に、南岸地区の論を承服し難い旨を上申している。

その中に元禄年度・正徳年度・明治一一年度の論争裁許図と裏書の写しを添え、安永六年（一七七七）の争論書は紙数二十余枚で繁雑の感あり省略するとあり、最後に「右ノ外、ササタル事件争論八年々絶へズト云フモ過言ニアラズ」と書いている。

大正八年（一九一九）九月四日、旱天続きにより灌漑用水が欠乏したため沢田・竜泉寺・桜井・上方・石畑・五日市の南岸地区民は牧田川の堰止め工事を行なった。

それを見て北岸の栗原・橋爪・宇田・中村・豊村・山村の住民は堰止めを切り落とすべく集合し始めた。岐阜日報の六日付記事には「夜に入るや刻々不穩の形勢となり、五日前一時頃北部の農民約八百名は炬火に天を輝し、手に手に鋤鍬を携へ現場へ乗り込み来り、件の堰止めを切落さんとしたるより、南部にては鐘を乱打して急を報じ、これ

また六百余名が獲物を携へ現場へ乗り込み、ここに一大乱斗起ころんとせしが、警官の鎮撫にて三時頃に至り漸く堰止めを四分通り切り、無事双方解散したり」。

前年の大正七年に喜多輪中水害予防組合が創設され、これには水利問題も含まれていたが、南北の水争いは更に深刻化した。

大正一五年（一九二六）岐阜県知事は新山田樋管の新設工事の施行を許可したが、養老村はこれに反対して昭和四年（一九二九）養老村長林喜市氏を原告とし、岐阜県知事を被告として行政裁判所へ工事許可取消を提訴した。県知事は北岸の状況を諒とし、北側に立って努力したのである。

昭和六年四月二六日、この行政訴訟は知事（北岸側）敗訴となり、県庁より至急報で通知してきた。元禄以来敗訴になったのは始めてで、日吉村では直ちに村議会と区長合同の総集会を開き、慎重協議、県庁と度重なる打合せをして九月控訴する。

然し、兩岸それぞれの言い分があり裁判所も決定が出せず和解をすすめる。そして昭和七年頃、和解調停が成立し漸く妥協を見た。

兩岸地域の取水源である牧田川は上流より絶えまなく流れる砂礫によって川底が構成され、流水は砂礫層に吸いこまれて伏流水となり、東方平野部の自噴水となる。

また、農耕地も表土が浅く、その下は礫質で用水の水持ちが悪く、少し旱天が続くと、すぐ用水の取得に困難を生じた。僅かの水を左岸右岸の両地域が取りあい、上流域と下流域の争いが日常茶飯時の如く起きたのである。

各村に水を引く大番水、村内で順次配水する小番水も宰領や人夫を繰出し大騒動であり、村内の個々の我田に引水するときは村民同志の争いが、毎年の如く繰りひろげられたのである。

三十三、 橋爪の教育

橋爪は土地面積が少ないので農業での発展は望めず、学問によって振興しようと幕末以来先人は努力してきたという。

著名な先覚者としては、村上杏園^{きようえん}・久保田象外^{しょうがい}氏があげられる。

(一) 村上杏園塾

杏園先生は橋爪の今の中組の地で医業を開業しながら、文政の終りから明治初年に至

る四〇年以上にわたって、橋爪・宇田・中村を始め近隣の村々から教えを乞う人たちに、懇切に学問や人としての心掛け、趣味教養とし謡曲まで指導した。教えを受けた者が多かった橋爪は礼節正しく向上心の旺盛な村になった。

教科書として用いたのは次のようである。

四書（大学・中庸・論語・孟子）五經（易經・書經・詩經・春秋・礼記）。今川状（今川壁書とも今川帖とも云い江戸時代に子供の手習本兼修身書として使われた）。商売往来（江戸時代に商用の文字を集めた寺子屋用の教科書）。庭訓往来（初めて学ぶ者の書簡文の見本として正月から一二月に至る消息文を集めたもの）。

（二） 久保田象外塾^{しやうがい}

別庄で明治六年頃より三二―三年頃まで塾を開いて近郷の子弟を教育した。学制發布後で小学校の尋常科卒業業者或いは高等科を修了した者や高等科在学中の者が通塾し、主に漢学を教えている。

四書五經や諸子（古代中国シナ春秋戦国時代の人でその著書）、史伝（歴史と伝記）、左伝（春秋左氏伝の略）、史記（シナ古代の前漢初期にできた史書）、十八史略（古代シナの歴史書）を主とした。

初期には小学校へ行かなかった者のために、村付、国尽くし（日本諸国の国名を列举し誦し易い口調に綴ったもの、習字手本の一種として使用）、往来物（商売往来や庭訓往来のような寺小屋用教科書）なども教えた。その他趣味教養として謡曲・碁・将棋も手ほどきをしたようである。

門弟は橋爪別庄のみでなく、近郷はもちろん養老郡全体に及び延数百人という。

橋爪地区で、明治末、大正、昭和初期にかけて中心となった人物には、象外塾出身者が多い。

（三） 日新義校

多芸郡内で第一番に設立されたのは橋爪の日新義校である。

明治六年（一八七三）二月、念長寺堂宇を校舎に充て、橋爪・高畑・中・豊・安久・宇田・大墳の諸村が連合して創立した。

日新とは書経の『日新日日又新』から名付けた。後、念長寺東方の村上拙男氏の家を借りて校舎とした。

明治六年二月の長谷部岐阜県令（県知事）あての開業願書には、教師は大橋平三郎・村上譲甫・鼻橋慈鳳・村上哲三の四氏が就任するとあり、午前七時に入塾し午後四時に退

散することになっている。

三月に宇田に致遠義校ができたので、宇田の者はそちらへ移ったようだが、多くの者は日新義校にそのまま通った。

日新と致遠は再三の郡役所の説得にも合併しなかったが、明治一八年（一八八五）に強く説諭を受けて、小畑の敬業学校と合併して三校で謙益学校を作り、翌一九年宇田尋常小学校と改称し、小畑と分離した。後に日吉尋常高等小学校となる。

教師は次々と変ったようで、明治六年四月に報告された教員履歴には

○皇漢学校授 本村医師 村上讓甫 明治六年四二歳。西京皆川誠蔵に随従、天保一四年三月より弘化元年八月まで都合一〇ヶ年の間皇漢学研究

○筆道教授 本村平民 久保田五蔵 明治六年二七歳。元大垣藩士族岩瀬忠蔵に入門、明治元年三月より同五年十一月まで都合五ヶ年の間筆道研究

○算術教授 本郡金屋村平民 伊藤太一郎

明治六年五五歳。本国不破郡表佐村川村宇兵衛入門、天保三年五月より同六年三月まで都合四ヶ年の間数学研究

と書かれ、給料としては次のようである。

○皇漢学教授年給凡そ三〇円 同助教凡そ一〇円

○筆道教授年給凡そ二〇円 同助教凡そ一〇円

○算術教授年給凡そ一五円 同助教凡そ七円

明治九年には安田義啓氏が赴任し、明治十一年には六級訓導補大久保謙一氏(月給五円)助教村上嘉間太氏(月給二円)で就任している。

明治一〇年(一八七七)の統計では、橋爪一三七軒人口六一四人(男三〇七女三〇七)学令人員(六歳〜一四歳)六四人(男三〇女三四)就学四六人(男二四女二二)不就学一八人(男六人女二二)。豊二六軒人口一〇三人(男五三女五〇)学令人員七人(男三女四)就学四人(男一女三)不就学三人(男一女二)。中村四六軒人口一九九人(男九八女一〇一)学令人員二三人(男一三女一〇)就学八人(男五女三)不就学一五人(男八女七)とある。この橋爪の戸数には別庄・新宮・色目も含んでいるのであろう。

この通学区域を見ると現在の日吉の北半分に相当するが、日新校(最初は日新義校のち日新学校日新小学校と改称された)存続中は教師陣の優秀さと生徒の転校を忌避する動きがあり、明治六年の発足当時の地域の通学者が多かったと云われる。

三十四、生活を支えた養蚕業と割畑

明治四五年（一九一二）四月、橋爪に養蚕組合が設立された。

資源の乏しい日本は、明治大正の新興期に外国貿易の輸出品として、養蚕によつて製造される生糸と、それを原料とする絹製品が、総輸出金額の八割に及んだ。

工業後進国の日本は、それを代価として鉄鋼、機械、車輛、船舶等を輸入した。そしてこれは昭和初期まで続いたが、この間の日本の貿易従つて生存を支えたのは養蚕農家と製糸工業女子工員の汗と涙である、と言つても決して過言ではなからう。

しかし農家は養蚕によつて大きな収益を得た。大正八年頃の橋爪の養蚕農家では三、四百円の年収が、かなりの家にあつた。一般会社員の月給が二、三十円あるかなしの頃である。

養蚕組合設立に奔走したのは村上喜市郎氏である。自らも養蚕講習会に出席し、また下笠の西脇武造氏を教師に招いて、蚕の飼育の講習を実施した。こうして橋爪の殆どが養蚕農家となつたが、養蚕が盛んになると同時に生じたのは飼料となる桑の葉の不足で

ある。

いまの橋爪とサービスエリアの間の広い道路は旧堤防があつたところである。その南側は、ごく一部を除き大半が牧田川河川敷であつた。現在のサービスエリア全部と東方の金屋に至るまでの畑の部分である。

エリア南の新堤防は昭和七年に築堤されたもので、その頃はなかつた。

この広大な地帯を桑畑にすれば橋爪の養蚕業は大いに進展するだろう、と考えた村上喜市郎氏は、当時郡会議員であつた大久保精一郎氏（勁節）や県会議員の佐竹直太郎氏（後の代議士）に働きかけ、郡長、知事に陳情し、ついに内務省の許可を得て河川敷の払下げに成功した。

そして橋爪区民に分配して、いわゆる割畑とし、その登記まで完了した。

三十五、 薪炭の供給源の象鼻山割山

村上喜市郎氏が岡山（象鼻山）の割山に取り組んだのは、牧田川河川敷割畑の翌年の大

正二年（一九一三）である。

その頃はプロパンガスも石油もない。まして天日水槽などは考えもしなかった。橋爪には未だ電気も来ていなかった時代である。

風呂沸かしぐらいの燃料は麦ワラか稲ワラでもよかったが、食物の煮焚きには薪炭が欲しかった。そのためには森や林を自家用で保持する必要があったが、持っている家は僅かだった。

喜市郎氏が目を着けたのは岡山である。岡山は麓の部分は一部の地主が保有していたが、その他は公有地であった。彼は地元有力者を説得し、割山として橋爪別庄地区民に分配する事業に取りかかったのは同年九月である。

山は急斜面もあれば高さの上下もある。木材の搬出の難易、日当りの差、それを公平に分割することは難事業である。喜市郎氏は寢食を忘れてこの仕事に没頭し、毎日山に登り、くまなく歩きまわって図面を引き、遂にこの割山と云う難問題を解決した。

橋爪の人々は、先に彼が果たした牧田川河川敷の割畑と、この割山を持つようになり、「娘やりたや婿欲しや」と、橋爪が言われるようになった。

この割山は、昭和一三年五月一日付で岐阜地方裁判所所属公証人倉橋隼太郎氏の公

証により、橋爪以外の者には譲渡或いは売却せず相続人且つ橋爪在住者に限り所有を認めるとなっている。

三十六、 兵役と昭和大戰

明治六年（一八七三）に徴兵令が公布されて、満二〇歳になった日本男児は徴兵検査を受けることになった。

終戦までは兵役は納税・選挙と共に国民の三大義務と称された。

養老郡は初め名古屋鎮台に徴兵されたが、その後若干の変動を経て明治二九年に不破郡と共に鯖江連隊区に属し、明治四〇年より桑名、大正一四年より西濃一市五郡は敦賀、昭和一七年岐阜連隊区に編入された。

徴兵検査は、ふつうには高田町の現老人福祉センターになっている郡役所（郡制廃止後は団体事務所更に南濃県事務所となる）で行われ、徴兵官が主催し学科試験と身体検査があった。

身体検査は新調のフンドシ一つで行われたが大正昭和生まれは越中禪なでしを使用した事がなく、何かヒンヤリと風通しがよく戸惑ったが、使用してみると非常に便利で、除隊してから長年愛用する人が多かった。

検査は軍医と補助の衛生部下士官兵により身長・体重・視力・聴力・内部疾患・性病・肛門（痔）が調べられた。

徴兵検査が済むと一人前と認められ、酒や煙草も公けに飲むことができるようになり、結婚や一生の仕事を決めるのもそれからとされた。検査の該当者がほとんど小学校の同級生であるので、当日の夜は高田の料亭でドンチャン騒ぎもあったという。

検査の結果は甲乙丙丁戊の五種に分けられ、乙種は第一第二になっていたが昭和に第三乙種まで区分された。甲乙は合格だったが後には丙種も合格になった。戊種は翌年再検査である。

甲種合格者の中から抽選により軍隊に入営する（抽選にはずれた者をくじのがれと云った）。日吉村では毎年数人だったが、昭和一〇年ころから甲種全員、やがて乙種も対象になつてしだいに多くなり、大東亜戦争が末期になると丙種までが徴集されるようになった。

陸軍が大半だったが海軍入隊もあり、陸軍は二年、海軍は三年が原則であった。

入営が近付くと親戚知人を招いて祝宴をする。選ばれて国家国民を護る名誉ある天皇の軍隊に、はいれると云うのである。本人も親兄弟も不安一杯だが、人には「光栄です」と云い、他の人は「おめでとうございます」とお祝いを云う。

家の前には紅白の布を支柱に巻いた入営門を親戚や隣家がつくり「祝入営」の扁額を掲げる。

出発当日は橋爪全戸より一人ずつの見送り人が出て篠塚神社に集合し、参拝してから送辞を受け、美濃高田駅に徒歩で向かう。小学校に入営者全員が集合したときもあった。近畿日本鉄道の養老線の前身、養老鉄道が池野、養老間二四・七キロの営業を開始したのは大正二年七月三一日だから、その以前の入営者は垂井駅より東海道線に乗車したと思うが、垂井まで見送ったかどうかは明らかでない。

「祝入営何某君」などと書いた幟旗を数旗ひるがえし、日の丸の小旗を持つものもあり、ゾロゾロと全員が高田駅まで見送る。

二、三年の苦難の兵役を了えて橋爪に帰ると親戚縁者が集まって祝宴をする。本人も責務を果たして大威張りである。記念として陸軍は金色の星や軍旗など、海軍は錨に軍

艦旗などをあしらった品物を配布した。盃が最も多かったようである。軍旗も軍艦旗も真ん中の日の丸より一六本の紅の線が放射状に出る旭日旗で、本当に鮮やかで美しい旗である。

それより予備役を経て後備役の期限が切れる約一五年間は在郷軍人として「帝国在郷軍人会日吉村分会」に入り、郷土の中堅となって活躍する（後に後備役は予備役に吸収廃止）。

軍隊を退営除隊した人は、身体強健で真面目、困難に耐え、また責任感が強い立派な人であると信頼され、若い娘たちのあこがれの的となった。

満州事変が勃発したのは昭和六年（一九三一）であるが、殆ど現役兵のみで戦って日吉村の橋爪も出征兵はほんの僅かで、平穩であつた。

昭和一二年（一九三七）七月七日の七夕の日に支那事変（政府布告の公式名称で、日中戦争とも呼ばれる）が始まると、橋爪からも多数の若者が召集され出征するようになった。

軍隊には現役兵と召集兵があり、徴兵検査が済んで一定期間後の決められた日（ふつうは一二月一日。大東亜戦初期前後から変動が見られる）現役兵証書によって入隊する者、また、志願兵は現役だった。

この志願兵は二〇歳未満でも入隊が可能で一般兵科はもちろん、軍楽兵・少年飛行兵・少年戦車兵・少年通信兵・特別幹部候補生（特幹）などがあり、海軍ではやはり一般兵科・軍楽兵・飛行予科練習生（予科練）など、いろいろあつて優秀な人が多かった。

召集は予測できない突然の日にくるもので充員・臨時・演習・教育などの種類があり、在郷軍人を必要時に召集した。戦時や事変時には充員と臨時召集が大部分であつた。

軍隊、特に陸軍の平時編成は戦時編制の半分以下の人員装備で、戦地出動となると在郷軍人に通知を出して必要部隊に集める。これが召集令状、いわゆる赤紙である。現役兵証書は白い紙であつた。

戦時編成に人員装備を充足することを動員と云い、平時の状態に戻すことを復員と云う。

大陸戦線が拡大するにつれて新しい部隊が編成され、現役兵の割合が少なくなり召集兵が増えていった。出征兵のいる家は高い木の上などに日の丸の旗を掲げ、名誉と尊敬を得たが、この事は戦争が烈しくなつたころ、防諜上の理由から禁止された。

戦歿者もしだいに増え始めた。新聞に顔写真と住所、留守家族などが紹介される「どこどこさんのお家の息子さんも、お気の毒になあ」と胸をつまらせ、両親や家族の心の

うちを思う。若い妻や幼児を残して戦歿する人も多くなってきた。兵員が不足し召集年令範圍が広まったからである。

終戦のころ、橋爪の現役入営者と召集軍人数は確実ではないが、八〇名を越えていたのではなからうか。

戦歿者芳名は「第二十八章」招魂社の項に掲載させていただいたが、日露戦争二柱、支那事变橋爪別庄各一柱、大東亜戦争橋爪二〇柱別庄四柱の合わせて二八柱にのぼる。

謹しんで、ご冥福とご遺族並びに橋爪地区のご加護を祈念し、国家と国民を護ろうとして、生命を捧げられた栄光と名誉を、永遠に保持するのが日本国民の責務だと考える。

三十七、 史上の人物

（史上の人物については敬称は省略させていただきます）

1 秦公豊足

「第四章」で触れたが、天平四年（七三三）の正倉院文書にあらわれる人物で、橋爪が

垂穂郷であつたころの三宅里に住み、智識優婆塞ちしきうばそくの一人であつた。

優婆塞は在家であるが仏道に入り、三宝に帰依して五戒を護り仏道修行に志す男子を云う。

彼は法華經その他の多数の經文を読み誦し、呪験力じゆけんりよくを持つていた。天平六年の太政官奏では、淨行三年以上の者を得度させると規準を示しているが、彼は淨行八年であつた。なお彼の貢進解こうしんげは、現存する正倉院優婆塞貢進解百余通のうちでは最も古いと云う。

2 黒田次郎真与まきよし

五九代宇多天皇うだの皇子敦実親王一品式部卿より九代の後胤佐々木太郎檢非違使左衛門少尉六男の黒田右近少輔源直氏の三男が真与であるという。

父の直氏は越前国（福井県）中島城主であつたが、建仁二年（一一〇二）別所寺内で騒動が起こり、その鎮撫を鎌倉二代將軍頼家に命ぜられ、真与を派遣した。

真与は軍勢を以て騒動を収めると、別所寺の支配役として居住するようになり、彼の子孫も代々別所寺（後の久保寺双寺）を支配した。鎮守白山神社を創建したのも真与と思われる。

3 黒田三七郎源正常（久保寺正常）

真与―信氏―治輔―氏綱―正綱―氏重―光元―守光―正利―正常と続いたが、この正常のときの建武二年（一二三五）、後醍醐天皇側の新田義貞軍に加担した黒田氏は、足利尊氏軍に敗れて別所寺を失い、家来たちは離散したり寺の田地や焼跡を耕地として作人となり、正常は地頭庄屋となったそうである。このころ黒田氏は久保寺氏と改姓した。

4 慶順

別所寺九十九坊の一坊舎主で、建武の焼討ちの際、逃れて橋爪にきて天台宗の一道場を創ったという。

これが後に象鼻山念長寺となるのだが、道場の位置が現在の地かどうかは分からない。それより一九三年後の享祿元年（一二五八）に、同名の慶順なる僧が、本願寺証如に帰依して真宗に改宗したという。

ただ、天台宗時代は僧侶の肉食妻帯が許されず、法弟が相続したので、最初の慶順が現住の血族上の祖であることはない。

5 加藤權兵衛景泰

藤原時長の子利仁より二三代目の景泰は、橋爪庄七〇貫を領して齊藤家に属していたと藩翰譜頭注にある。

いつ頃からか分からないが永禄の頃まで橋爪を支配していたのであろう。

6 加藤遠江守光泰

加藤景泰の子で作内といった。

光泰は永禄のころ橋爪を出て、初め織田信長に仕えたが元龜元年（一五七〇）春より羽柴秀吉に属し、度重なる戦功により天正一二年（一五八四）近江国高島城を与えられて遠江守に任ぜられた。

更に天正一八年武田家が滅亡し、その甲斐の国二四万石を賜わった。

文禄の朝鮮出兵にあたり、光泰も軍勢を率いて朝鮮に渡って戦ったが、その陣中で逝去した。

7 高木信成

永祿のころ三河国（愛知県）より橋爪へ移住した。徳川時代、橋爪は高木姓を名乗る家が多く『橋爪総高木』と称された。

高木氏の祖先は、五六代清和天皇の第六皇子貞純親王の長子、清和源氏の祖の六孫王経基で、その五代の後胤上総介源頼風が三河国碧海郡高木を領して高木を姓とした。

この子孫の信成が橋爪へ来たと言われる。

8 高木勝舎

篠塚神社の入口東の手洗石に「正徳三癸巳年（キシ、ミズノトミ）勝舎」と刻字してある。

勝舎が寄進したものであろう。正徳三年は一七一三年で徳川八代吉宗が將軍になる三年前である。

勝舎は享保七年（一七二二）二月に死去し、法名を釈宗恵信士という。墓は岡山東麓にある。

9 高木六右衛門

西濃風俗志に

「この人の氣風、西美濃になし、身持花やかにしていやしからず、この辺の巨頭なり。家筋いふに及ばず、さて、お酒はご好物にして、おもしろき上戸。さもあらん此所の風儀として、神事には俗にぶさまつりとやら申して、酒食ともにうつむく事のならぬ程たべると申す。それ故、この所をはしつめ（箸詰）と申すと」。

宝暦の頃の人と養老郡志に記してあるが、正しくは高木六右衛門勝富と云い、前項の高木勝舎の嫡子である。

10 村上（高木）杏園

橋爪在住の名医で、また学者であつた人で名は主計かずえ、杏園きようえんは号である。

近江国（滋賀県）神崎郡金堂村、伊藤伝左衛門の子で文化三年（一八〇六）に生まれた。祖父唯次のときに彦根藩井伊家の藩臣となり医業を以て仕えたが、祖父も父も儒家として名高く、行ないも立派であつたと云う。

杏園は少年の頃から京都で漢学と医術を修め、一八歳のとき橋爪の高木喜内の養子と

なる。心やさしく慈愛の心に富み、医を業としながら近郷の子弟に学問や謡曲を教えた。自宅を博濟堂と名付け、治療に親切熱心で医業は繁昌し、領主の戸田候は賞して村上の苗字を与えられた。

明治五年（一八七二）一月二〇日逝去、同十一年（一八九八）四月門人と有志者によって岡ヶ鼻に顕彰碑が建てられた。碑文は門人高木政勝が撰（せん）し巖谷一六が書した。

辞世の歌

生涯を　つかひはたして　年明に

しきせはかれて　はたかてそ行く

建碑後、六〇有余年にわたって先生の徳を慕う橋爪別庄の有志八家が『杏園先生記念碑掃除会』と称して遺族を招き、毎年五月六日に当番二人が主催して掃除と法要を行なっていたが、杏園先生の橋爪地区に与えた美風を知る人がしだいに歿するにおよんで、昭和三十六年ころ自然消滅した。

11 久保田象外

別庄が産んだ高名の学者である。弘化元年（一八四四）十二月二日、久保田弥一郎の五

男として生まれ、名は吾三、象外しょうがいと号した。

九歳で村上杏園の門に入り漢籍を学び、一六歳のとき宝光寺で剃髪し聞成もんじょうと名乗る。万延元年（一八六〇）四月、京都の高倉学寮に入り仏典を修めたが病いを得て元治元年（一八六四）別庄に帰郷、五月病い癒えて大垣藩儒井田澹泊塾に入塾、明治三年（一八七〇）四月豊後日田の咸宜園に入園した。

同園は江戸末期の漢詩人で門生三、四千人と云われた大学者の広瀬淡窓が開いた家塾で、幕末の有名人多数を輩出したが、このときは淡窓の後継者が指導をしていて、明治二六年まで存続したという。

明治六年、業成つて帰り別庄に家塾を開き、それより三〇年近くの年月に数百人に及ぶ近郷の人々を指導教授したが明治二六年（一九〇三）五月二七日、六〇年の生涯を閉じた。

象外は、つつしみ深くしてまじめ、しかも快活でこだわりが無く多くの人に慕われ、翌三七年五月、門弟により岡ヶ鼻に顕彰碑が建立された。

12 高木政勝

弘化四年（一八四七）九月橋爪に生まれる。幼年から学を好み村上杏園の門に入り、ま

た高田町の柏渕拙藏の私塾にも通った。

明治二年（一八六九）より二年間、日田の咸宜園に遊学し、二〇歳で近江国堀田藩主の儒臣となったが、同六年東京に出て私塾を開いた。程なく華族学校で漢籍を教授するようになり、その後、法律を研究して辯護士となった。

ある日、感ずるところがあつて仏門に志し、小栗栖香頂の指導を受けて真宗の信者となり、護法会及び是真会等を起こして全国を巡歴し仏教弘布につとめた。晩年には少壯の僧侶を集めて仏学を講じたと云う。

樵山と号し漢詩を能くした。樵山居士詩集がある。

大正五年（一九一六）三月一六日逝去。

13 村上真一

天保九年（一八三八）に生まれる。滋賀県柏原の五大坊勝泉（鷲嶺）につき插花、松月堂古流を学び研鑽を積んで大日本総会頭となり青松軒旭水と号する。家元植松子爵の顧問として流儀の普及に尽くし、多数の門人を指導した。

煙火も巧みで、全国各地の煙火大会に入賞している。

象鼻山上に碑があり

「大日本生花司 松月堂古流正統 日本総会頭顧問 青松軒宗匠碑 正三位子爵植松雅平書」

と、書かれ、裏面には

「大正四年三月、門弟中」とある。

碑の周囲に六本の石杭あり、正面右のものに「謡会中」、左のものに「大正八年四月」と刻んである。

謡会は大正一一年に村上喜市郎が主宰して橋爪区内二二名の有志でつくられた親睦と趣味の華謡会（華道と謡曲）の前身である。

大正一〇年（一九二二）二月六日逝去、行年八四歳。辞世は

ろもかぢも いらぬ他力の 弘誓船

南無阿弥陀仏の 風の力で

14 村上其鶴きかく

村上旭水の兄で本名は拙男である。俳句を好んで常に国内の至るところを遊歴した。

安政五年（一八五八）郡内外の俳人が句会を催したとき

風凪し、暮手の届く 柳かな

と詠んだ。明治一八年（一八八五）一月二七日六一歳で逝去したが、明治二年岡ヶ鼻に芭蕉句碑を建立し名を残した。芭蕉句は元禄六年の藤の実にあるものである。碑記は「第四十章」4項を参照。

15 村上巖

女医で橋爪の人たちの面倒をよく見た人である。

元治元年（一八六四）村上杏園の長男の医師譲甫と岩手村より嫁いだうめとの間に長女として生まれた。

譲甫夫妻には男子がなかったので、岩道より養子に寛を迎えた。寛も医師であつたが巖も^{いわを}医を志し、夫の同意を得て明治三年（一八九〇）二六歳のときに幼児三人を置いて上京し、済生学舎で医学を修め、更に順天堂大学で研究を積み、帰郷して夫と共に医業に従事した。

寛は当時の事とて乗馬で往診していたが、明治三十七年落馬して死亡した。その時六人

の子が残っていたという。

巖は益々医業に精を出すと同時に子供たちを立派に育て、男の子は三人共医学博士になった。

女医の少ない時代で遠近に名声が高く、洋服を着用し人力車で往診した。橋爪中組で開業していたが後に高田西町に移転して医業を続けた。昭和四年（一九二九）に逝去した。

16 大久保勁節

名は精一郎、勁節^{けいせつ}は号である。

文久元年（一八六二）十一月一八日に生まれ、佐藤牧山について漢学を修めた。明治二四年と二五年岐阜県会議員となり、同四〇年より大正一二年三月三十一日郡制廃止まで養老郡会議員、そのうち大正八年より郡制廃止まで郡会議長の職にあった。

日吉村長、日吉消防組々頭、日吉産業組合長を逝去するまで勤めた人で、養老郡では押しも押されもしない大政治家であり、日吉村や橋爪に尽くす事は大であった。

村長を長年勤めたが、牧田川水利問題では大変苦しんだ。

書を能くし、勁節と署名した遺墨が各所に残っている。

昭和七年（一九三二）地方自治功労者として表彰せられたが、同年五月二九日中村の高木秀雄宅で夜、村政についての役員の集会があり先着の安田為三郎と懇談中卒倒し逝去した。村葬が行われたが彼を惜しむ村内外の多数が参列した。御霊神社境内に顕彰碑がある。

17 大久保休吾

明治一〇年（一八七七）七月八日生まれる。独学で小学校訓導検定試験に合格し二二歳で小学校長となった。

大正一〇年（一九二一）笠郷小学校長を退職し養老郡社会主事兼地方改良協会主事となり『養老郡志』編纂に着手した。

彼は郡内を隈なく歩いて古文書・伝説・神社仏閣の由緒・政治・文化・歴史等を詳細にわたって身魂を傾けて調査し、遂に大正一四年（一九二五）五月、大著『養老郡志』を刊行した。

郷土史家としてはもちろん、一般史学においても、橋爪のみならず養老郡にも、かつてない大学者であったと言つてよい。

神道にも造詣が深かったが、惜しくも六〇歳で昭和十一年（一九三六）八月二〇日に逝

去した。

18 村上繁太郎

安政三年（一八五六）五月六日に生まれる。村上杏園、久保田象外につき漢学を修めた。温厚篤実で思い遣りがあり他人の面倒見がよかった。

橋爪区長を長年にわたって勤め、区政に全力を尽くした。明治の中程から大正時代まで橋爪区内が諍^{いさか}いもなく、平穏安寧にまともりよく過ごせたのは、村上真一と大久保勁節、それに村上繁太郎の政治力によるものだと言っても過言ではなからう。

昭和二年（一九二七）一月二四日逝去。雪が降り続いて漸く止んだ二八日、積もった雪を排除して葬儀を執行したが盛大で僧侶一四人、小学校の学童、青年会、消防組、在郷軍人会など各種団体が参列し、軍人会は旭日の団旗を先頭にラッパを吹奏した。村葬に匹敵する大葬儀だったと伝えられている。

19 村上喜市郎

明治一四年（一八八一）二月二一日に生まれる。塘陰舍天溪或いは単に塘陰^{とういん}はその号で

ある。

喜市郎は少年時代、久保田象外の漢学塾に六年間通塾し、終世漢詩を友としたが謡曲や旭水宗匠より伝授された生花も趣味であった。

だが、喜市郎の本当の姿は郷土橋爪と日吉村のために全身全霊を捧げた事にある。彼は第八代日吉村長だったが、その跡を継いだ第九代藤井良三村長の弔辞の一節に「人情は厚く清廉潔白で進取の気象に富み、たくましい気魂を備え一貫した信念に生き、内にあつては良き父であり外にあつては熱誠溢れる指導者として、地区民の信頼を一身に集め、深く感謝せられ云々」

と述べられているが、まさにその通りの一生であつた。

明治三四年鯖江の歩兵第三六連隊に入営、日露戦争には歩兵軍曹で参加、戦功により勲七等青色桐葉章を賜わり、明治四〇年歩兵曹長で除隊。

それより郷土に尽くした事がらは枚挙にいとまないが、橋爪と日吉村とに分けて主なものをあげてみると

「橋爪地区」

○橋爪養蚕組合の設立と育成

- 南川原の現サービスエリアと東方一帯の旧牧田川河川敷を割畑として橋爪住民に分配
- 象鼻山（岡山）共有地を割山として地区民に分配。薪炭材料産地として有用であつた
- 山上、明治記念碑の設立
- 山田樋管の設置。水利問題に努力
- 報徳会の育成。知恩報徳、協同互睦、美風良俗、自治民育
- 神社理事総代と念長寺門徒総代を二〇年以上勤め、維持管理と敬神崇祖の念の養成

「日吉地区」

- 日吉消防組と水防組の小頭、組頭、後援会役員として三〇年以上指導育成
- 在郷軍人会日吉分会長七年と軍友会長（在郷軍人〇Ｂ会）
- 喜多輪中水害予防組合と牧田川水利組合評議員を三〇年以上勤務し水害水利問題尽力
- 日吉産業組合（農協の前身）専務理事と組合長、農業会長を二二年間（助役兼務）
- 日吉村助役と村長を二七年間
- 岐阜地方裁判所金銭債務調停委員四期
- 愛国婦人会、大日本国防婦人会参与と委員
- 岐阜県社会教育委員

○日吉戦歿者遺族会長一六年間

喜市郎は責任感が強く何事にも全力で当たったが、特筆すべきものは牧田川水利問題の処理と日吉産業組合の育成、並びに戦後の戦歿者遺族の援護と処遇であった。

日吉村の元老とたたえられた彼は、大正から昭和中期にかけての橋爪の重鎮でもあった。

昭和三十三年（一九五八）九月五日逝去。

昭和二八年新春の自叙の詩を次に記する

合衾回頭六十年　双棲無恙共怡然

曾孫加二斟春酒　醉筆揮来自寿篇

20 村上龍助（竜助）

明治三四年（一九〇二）八月一日、村上繁太郎を父として橋爪で生まれる。龍介りゅうけいの名を使う場合が多かった。

東京農業大学卒業後、米国ワシントン大学に留学、卒業帰国後拓務省に入る。程なくブラジルのサンパウロ総領事館に赴任する。その頃は日本の農村が疲弊して新天地を求めブラジルへ渡航する人が多く、その中心地サンパウロで彼は移民の世話に渾身の努力

を傾ける。

支那事変（日中戦争）後は、興亜院調査官兼北京大使館書記官として大陸の農業指導に奮闘した。

昭和二一年終戦で引揚げてから、山口県大阪事務所長をしていたが、政界を志し、参議院議員鮎川義介の秘書となり政治の勉強に打ちこみながらも剣道六段の練習に怠らなかった。

漸く機が熟して岐阜県より衆議院に出馬しようとした矢先、突然病気で東京下谷公民館で演説中に倒れた。

その後、数年間再起を期しながら松葉杖の生活を送っていたが、昭和四三年（一九六八）七月二四日東京の聖路加病院で逝去した。六八歳であった。

21 村上武夫

明治四三年（一九一〇）六月一日、村上喜市郎の長男として出生。昭和四年大垣中学校を卒業、東京医学専門学校（東京医科大学）入学。在学中陸軍衛生部依託学生に合格採用され昭和八年卒業、軍医少尉任官。

昭和一〇年近衛歩兵第四連隊附より満州に派遣され、熱河省承德の部隊附となる。

昭和一二年北支事変（拡大して支那事変日中戦争となる）が勃発するや古北口を経て中華民国張家口、大同の蒙古に出動。友軍のみならず現地住民の医療を積極的にして、蒙古徳王より感激の謝詞を贈られる。

昭和一五年、大尉のときに内地帰還して軍医学校甲種学生（軍医の陸軍大学に相当）として入校。

昭和一六年一二月大東亜戦争開始により、第一六師団第四野戦病院長（垣六五六七部隊長）としてフィリッピン島のルソン島アチモンに上陸、マニラ攻略戦やバターン半島平定作戦に野戦病院を率いて参加。千古のジャングル中を悪戦苦闘して傷病兵やフィリッピン人の治療看護に率先して身を挺した。

昭和一七年（一九四二）八月二五日、ルソン島タヤバス州ルセナで戦歿。陸軍々医中佐正六位。勲三等に叙せられ旭日中綬章及び功五級金鷄勲章を賜わった。

武夫は琴古流尺八をよくし、七カ年にわたる外地の戦陣の余暇に尺八を吹奏し、その清澄の音色は、遠く家郷を離れた将兵に、家族や妻子を想い出させて涙する者が多かったと云う。

三十八、煙火（打上花火）

橋爪は徳川時代のいつ頃からか、煙火と云われる打上花火が盛んであった。

明治一四年（一八八一）一〇月三日に島田警察署長九等警部三輪芳太郎氏に提出した由來書には

「篠塚神社例祭には昔より煙火を執行してきた。その由来は、ある年、大旱魃^{かんばつ}があり田畑の作物はもちろん草木も枯れ衰え、村民の飲み水まで一滴も無くなった。

そのとき、村中一同が篠塚神社へ雨乞のため二日間宮ごもりをして祈願し、満日に至って煙火を行なったら、こつぜんとして雨が降ってきた。

それより例祭には打上煙火をして、神様をお慰めし、豊凶にかかわらず毎年行なってきた」

と書かれ「なお、近年はお上より禁ぜられて中絶していたが、煙火用の諸道具があるので前川原で十一月三日（明治天皇お誕生日）実行させて欲しい」

と願書を呈出したが、この年は「願之趣聞届難く候事」と不許可になっている。

しかし、翌一五年九月に村民七四名の連署をもって再び島田警察署長警部補榊原鉄太郎氏に願ひ出たときは「書面願之趣聞届候事」と許可された。島田警察署とは現在の養老警察署の前身である。

明治一七年九月五日の出願書には、花火玉の大きさ（四寸とか六寸とかの）と種類（エン・フクレ・星・引など）製造者氏名が書かれ、昼の部四五発夜の部三九発を午後一時より同一一時まで打上げたいと記されている。

橋爪全戸が参加した煙火の催しであるが、得意とする人が多数おり特に村上真一氏は名手で率先して行なった。

南川原四番堤の東南で打上げたが、有力者は家紋の入った幔幕まんまくを張り、四段かさねの重箱などに料理を一杯詰めて持ちこみ、家族友人と酒宴をしながら打上げたり見物したりした。煙火をつくることも打上げも、楽しい行事であったと明治の古老は述懐している。

その後も、毎年続けられていたらしいが、いつ頃取り止められたかは分からない。記録には大正ご大典にもあり、昭和ご大典には岡山々上で一八〇発、昭和五年三月九日の忠魂碑の除幕式にも三〇八発が打上げられている。

なお、小さい竹筒に硝石・硫黄・木炭と鑄鉄鍋などを粉にして詰め、導火線みちびに火を

つけると火の粉が噴出する仕掛け花火も沢山つくられ、お宮や家庭などで観賞された。橋爪はどの家にも煙火用具があり、花火打上筒は太い木をくりぬき、外側に編竹を幾重にも巻き補強してあった。物置の隅に今も眠っているかも知れない。

三十九、 近代の象鼻山と爆弾投下

大正四年（一九一五）のご大典のとき、栄ある明治を永遠に記念するため、山頂に明治記念碑を建立し、煙火大会を催したことは既に述べた。

昭和三年（一九二八）の、昭和天皇ご即位のご大典は、日本にかつて無かったと思われるほど盛大だった。

十日間ほど日本全国がお祭り騒ぎで、学校も昼間は旗行列、夜は提灯行列が毎日続いた。大人も、軍人会・青年団・区、それぞれおみこしを作り仮装行列に奇を競い、処女会婦人会は花笠道中や踊りなどで、日吉村内は言うに及ばず、他村までねり歩いた。

ご即位当日は象鼻山上で橋爪村民の祝賀会が開かれる。一八〇発の煙火を打上げ、お

みこしやお囃子車はやしを持ち上げ、幔幕を張り、ご馳走を食べ酒を呑み、盆と正月と祭礼を十年分ぐらい一度にしたような騒ぎだった。

よそのお客がくると、山上へ案内するのが例で山は橋爪の名所であつた。山頂より見る濃尾平野の景観は素晴しく、大垣城は真下の如く、木曽・長良・揖斐の三大川はゆるやかに北から南へ流れ、右には牧田川がうねり下池が白く光る。はるかに岐阜・一宮が遠望され名古屋は雲霧の下である。町や村、小さい森が田圃の中に点在する中を、東海道線や養老線の列車が長蛇のように走るのが、手に取るように見えた。

大東亜戦争がしだいに烈しくなると、食糧難も深刻になり、山頂も耕されてサツマイモなどが学童らによつて栽培された。空閑地はすべて利用し、念長寺の前庭も畑になった。

戦争末期の昭和二〇年（一九四五）六月二六日は田植の最中だった。この年は旱魃で田植が少し遅れていたようである。

B二九らしい敵一機が象鼻山上空を通過するとき爆弾十数発を山の西部に投下した。大音響ともうもうとした砂塵が全山を覆つて田植の人々を驚かせた。

筆者は戦争中、三式戦闘機『飛燕ひえん』の操縦者であつたが、その経験に基づいて推察す

ると、この爆弾投下は誤爆とか明治記念碑を狙ったものではなく、日本機との空戦か地上砲火で被弾して損傷を受けた敵爆撃機が、退去中に邪魔になる搭載爆弾を投棄したものであると考える。

どこの国の軍用機でも損傷を受け或いは帰還の際には、少しでも身軽になり敵の追尾を避けるため、それに基地着陸の際の衝撃で搭載爆弾の爆発を恐れるために、全弾を投下して帰るのが常識である。また、爆撃機の地上観測機器や技術は優秀なので、対空部隊の抵抗もないとき、地上目標を誤ることは考えられない。

とにかく、橋爪や附近の人々にとっては、敵機の爆弾投下を経験した事は前代未聞で、戦争の実感を身にしみて味わったに違いない。

四十、 橋爪の碑

1 杏園先生碑 岡ヶ鼻

村上杏園氏の略史を銘に録する。明治三〇年（一八九七）門人及び有志者が建立。

銘文は略する。養老郡志六六〇頁にあり。

2 象外先生碑 岡ヶ鼻

久保田象外氏の略史を銘に録する。明治三十七年（一九〇四）五月、門人の有志者が建立。銘文は略する。養老郡志六七〇頁にあり。

3 青松軒宗匠碑 岡山々上

碑銘は「第三十七章」13項にあり、村上真一氏（旭水）の門人が大正四年（一九一五）三月に建立。周囲の石杭六本は大正八年（一九一九）四月、謠会が作る。宗匠在世中である。

4 芭蕉句碑 岡ヶ鼻

最初の位置は神明神社の西方、山田川水門のすぐ東側の林の中に、大垣―多良道より二、三間の山側にあった。現在はその場所が県道になり、自動車がつきりなしに往来している。昭和三八年名神高速道路付帯工事の際、現在地に移転した。

建立者は其鶴村上拙男氏である。

(表面)

杜鵑声 はととぎすこえ

芭蕉翁

横当婦や よこたかみ

水農上 みずのうえ

(裏面)

牧田川や螢の

麦庵

送る もどりうし
戻里牛

明治二巳年十月 友松軒其鶴建之

と、なっているが、麦庵については不明である。明治二年は一八六九年である。

5 明治記念碑 岡山々上

大正四年（一九一五）十一月、大正天皇ご即位のご大典に際して、徳川の鎖国時代より世界の一等国になった栄光ある明治時代を、永久に記念するために、橋爪青年会長であった村上喜市郎氏が発案企画し、橋爪青年会員が勤労奉仕をして完成した。

6 嗚呼日中戦碑 神明下

(表面)

嗚呼日中戦(左横書)

討つ人も うたるる

人も心せよ

一つ世界の

人にあらずや

禿

(裏面)

木村求 昭和一九年八月二十二日 中華民國湖南省来洋県来洋城西南十七軒獅子岩南方
高地において戦死

昭和五十七年五月

木村禿建之

邑鶴書

7 牧田合戦碑 岡ヶ鼻

(北側)

丸毛兵庫頭 稻葉備中守等 奮戦の地

(西側)

大永五年(一五二五)江州小谷城主浅井亮政は牧田に陣を構えた。これに対して美濃守護職土岐頼芸は栗原山に軍を進めた。八月二日両軍は栗原・別所・橋爪・牧田付近で激戦を交えたが、勝敗のつかぬまま両軍とも引き上げてしまった。これを牧田合戦という。

(東側)

この戦いで大墳城主丸毛兵庫頭の一族は奮戦して、大手柄を立てた。稻葉備中守通則はその子五人と共に討死してしまったので、出家していた末子が還俗して稻葉家を継いだ。この人が勇将と称えられた稻葉一鉄である。

(南側)

平成元年三月吉日建之

養老町教育委員会

四十一、戦前より戦後へ

第一次世界大戦が終つたのは大正七年（一九一八）である。日本は日英同盟によつて戦勝国側に味方し、戦後も暫くは好景氣が続いたが、やがて世界的な不況の波を受けて深刻な不景氣に襲われた。

銀行や企業は倒産或いは併合し、岐阜県でも大垣共立・十六と共に県下の三大銀行と云われた蘇原銀行が昭和五年（一九三〇）一二月休業に追いこまれた。それが連鎖反応を起こして六年末までに県内に本店を置く普通銀行九行、貯蓄銀行一行が休業した。

「大学は出たけれど」との言葉が流行し、失業者は巷に溢れ、農村は疲弊し、小学校六年を卒業して丁稚、小僧、女中などに働きに出る子供が多くなつた。

日吉小学校の十数銭の紙代（用紙代）が払えず、卒業記念の三〇銭の写真が買えない子供も何人かいた。

新聞を买える家庭も橋爪で数軒だったし、冷害に苦しんだ東北地方の青森県などでは四五〇〇人の娘が売られたと云われる。西濃に戦前戦後にいた芸者なども東北出身者が多かつた。

東北地方では冷害で凶作になると先ず娘を売り、更に生活が苦しくなつて馬を売つたと聞く。馬は生産手段として必要だから後にしたそうである。西濃では、それほどでもなかつたが苦しい事は同様であつた。

満州事変が起つたのは、そのドン底の不況の最中で昭和六年（一九三二）九月一八日である。農村出身者が多数を占める軍隊で、農村の悲惨な状態を見かねた中堅将校が、日本の活路を求めて引き起こしたものと云われる。

昭和十一年（一九三六）二月二六日の一千数百人の陸軍部隊反乱事件である二・二六事件も、疲弊した農村を救済できない政府を倒し、哀れな農民を助けようとした下級将校が決起したものだ、松本清張の昭和史は述べている。

この頃から農村の青年で軍隊を志願する人がしだいに多くなつた。満足な学歴を持たない若者が、出世する道は軍隊しか無かつたのである。

軍国主義が盛んになるにつれて軍需産業も発展し、日本の景気は逐次好転してきた。農村の青年の働き口も増えてきたが、その成功によつて政府並びに軍部、それに国民が増長した結果が支那事変（日中戦争）の拡大であり大東亜戦争であつた。

これは悔ゆとも戻らない大失敗であり、二〇〇万に近い前途有為の青年を死に至らし

め、多大の国家国民の財産を消耗せしめたのである。

然し、このような経緯により敗戦とはなったが、その反省により、その後の世界の形勢は、資源を持たない弱小民族を救わなければ争乱は避けられないと考えるようになり、戦前では余り考えられなかった自由貿易を伸展させる機運となった。

日本はそのおかげで、経済に優位となり、国民生活も昭和初年に比べれば、天地雲泥の幸福な状態になったのである。

四十二、 橋爪雜記

1 水戸天狗党

元治元年（一八六四）水戸の尊皇攘夷派が筑波山に挙兵、武田耕雲斎を首領として中仙道より京都に上ろうとした。いわゆる天狗党の乱である。

幕命により大垣藩はこれを阻止すべく、藩兵だけでは少ないので農民を大量動員した。天狗党約八百名は警備の嚴重を避け、大垣を通らず積雪の中を揖斐より越前へ抜けたが、

ここで上京の無理を知り加賀藩に降伏し処刑された。

橋爪の農民の若者数名が徴集され、家族と水盃をかわして、びくびくしながら出ていったそうだが、結局、かなりの金子きんすをもらって喜んで帰ってきたとの話が残っている。

2 雨乞

用水問題で多年苦しんできた橋爪は、しばらく雨が降らないと田畑の灌漑水はもちろん、飲料水にも事欠き、すぐ雨乞あまごいが行われた。

まず、篠塚神社や山上の厳島神社に参詣してお祈りをする。それでも降らないときは神社の拝殿に交代でおこもりをする。昼も夜も蚊にさされながら雨の降るまで行なう。また白い紙でつくった御幣や数々の飾り物をもって山に登り厳島神社の弁天様に祈願する。多度大社にもお詣りする。

旱天の折の橋爪は火の消えたような淋しさだった。山の南側の象外先生の碑のあたりに一カ所、僅かの水がチヨロチヨロと山よりしみ出る場所があった。筆者が子供のとき大旱魃で、そこへ飲み水を汲みにいったことがある。村中の人があるので大変混雑をした事を覚えている。

3 松茸山

橋爪の山に松茸が生えていた、と云えば若い人たちは驚くであろう。

昭和三〇年代の半ばまで松茸が採れたのである。しかし、個人で採集すると争いの原因となり、また濫獲して根絶やしになるのを恐れて請負制度とし、毎年九月頃入札して請負人を決めた。

請負人以外は許可がない限り入山を許さず、いわゆる「止山」^{とめやま}をして維持にあたった。止山の期間は大体九月二五ころより六〇日間とした。

請負人は松茸の採集だけでなく、客を集めて山上で料亭的な商売をし、そのポスターは「象鼻山松茸狩」として高田駅を始め各所に掲示された。芸者などを連れてくる客もあつて賑わしく、この附近ではチョット有名であつた。

昭和二四年の請負入札価格一〇一八〇円、三二年三六五〇〇円、三四年二八九〇〇円で入札金は神社諸経費に使用された。

4 牧田川の水遊びと小川の魚採り

子供の楽しみは学校より帰るとカバンを家に放り投げておいて牧田川へ行き「水遊び」

をすることだった。ほとんど男の子であつたが女の子も混じっていた。

泳ぎたい者は二番堤や四番堤附近にやや深い所があり、そこで泳いだ。五、六メートルぐらいの長さしかなかったが、木片などにつかまって足のたたない深さの処を横切るのも楽しかった。

水が無いときも何やかやをして遊んだが、どうしても泳ぎたい者は乙坂や広瀬橋あたりまで出かけた。「ゆーり」や井川では小さい子が男女でバチャバチャしていた。

小魚は牧田川でも村内の小川でも至るところにいて子供の遊び相手になった。夏休みの頃は田圃に水を入れているが、夜ひそかに小川を堰止めると魚やウナギが下流からのはってくる。それを手づかみで取るのも面白かった。

しかし、何と言つても牧田川原は橋爪の子供の一番の遊び場所で、砂を盛りあげたり小さい水路をつくつたりして流れの中で衣服を濡らしながら時間のたつのも忘れて、大きい子も小さい子も遊んだ。

5 天狗が話しかける

橋爪の三味（火葬場）のすぐ南側を通るのが橋爪別庄児童の通学路であり、これは中村

方面へ通ずる主要道でもあった。

葬式があると、火葬場の煙突から人を焼く煙と臭いが出ている頃に児童たちは帰宅するが、鼻を押さえ息を止めて駆けぬけた。

旧小学校の西百メートルほどに小さい林があり道はこの林を通っていた。
夜遅く通ると天狗が声をかけたそうである。

6 火の玉

養老山脈のことを橋爪の人は南山という。その南山の立岩のところから火の玉が飛んでくる。目をそらさずジッと見ていると、また一直線に帰ってゆく。

昔は見た人が随分いたが、近頃はサービスエリアが明るいせいか、飛んでこなくなつた。

火の玉の話は橋爪にだいぶんあるようである。

附 表

1 戸数・人口・牛数の古統計

(橋爪・別庄・新宮・橋爪分色目の古橋爪)

年	西暦	戸数	男	女	計	牡牛	牝牛	計
文政 7	1824	127	273	253	526	—	—	—
天保 7	1836	133	288	288	576	11	4	15
天保 8	1837	133	290	292	582	11	4	15
弘化 4	1847	132	306	305	611	11	4	15
嘉永 1	1848	133	299	299	598	11	4	15
慶応 2	1866	148	315	311	626	11	4	15
〃 3	1867	149	321	312	633	11	4	15
〃 4	1868	149	318	319	637	—	—	—
明治 2	1869	151	320	320	640	—	—	—

参考 平成 4 年 橋爪別庄合計125軒

2 橋爪地区小字 昭和14年 5 月日吉村土地宝典による

岡 山	大 畔	岡ヶ鼻	宮ノ下	村 下	南川原
神明下	西川原	村 内	天 待	山 田	北川原
池 田	色 目	三ツ塚	桑ノ木原	新宮野	

参考文献

- 1 養老郡志
- 2 養老町史
- 3 美濃の前期古墳 (美濃古墳文化研究会)
- 4 岐阜県西濃地方の
前方後方(円)墳の測量調査 (東海古墳文化研究会)
- 5 日本史総覧全七巻
(新人物往来社以下略して往来社とする)
- 6 年表要説日本歴史 (安田元久)
- 7 暦の百科事典 (往来社)
- 8 古事記・日本書紀総覧 (往来社)
- 9 日本歴史伝記総覧 (往来社)
- 10 日本歴史古典籍総覧 (往来社)

- 11 日本史人物総覧 (往来社)
- 12 日本歴史古記録総覧上・下 (往来社)
- 13 万葉の衣食住 (飛鳥資料館)
- 14 不破の地名 (不破郡教育振興会)
- 15 岐阜県地名大辞典 (角川文庫)
- 16 源義経のすべて (往来社)
- 17 北畠氏の研究 (大西源一)
- 18 戦国合戦大事典 (戦国合戦史研究会)
- 19 信長公記 (桑田忠親校注)
- 20 日本経済史概要・同統編 (土屋喬雄)
- 21 私本太平記 (吉川英治)
- 22 豊臣秀吉 (鈴木良一)
- 23 木下藤吉郎秀吉墨俣築城への道 (墨俣町)
- 24 栗原山九十九坊・象鼻山別所寺の歴史を
尋ねて (安福彦七)
- 25 岐阜県の歴史 (中野効四郎)

- | | | |
|----|-----------|-----------------|
| 26 | 新撰美濃志 | (岡田文園) |
| 27 | 美濃明細記 | (伊東実臣) |
| 28 | 美濃雜事記 | (間宮宗好) |
| 29 | 日吉小学校百年史 | (百年史編集委員会) |
| 30 | 岐阜県の昭和史 | (毎日新聞社) |
| 31 | 昭和史 | (岩波新書) |
| 32 | 第二次世界大戦史 | (岩波新書) |
| 33 | 祭神記考・由緒記考 | (大久保休吾) |
| 34 | 神事由緒録 | (村上喜市郎) |
| 35 | 神社日誌 | (篠塚神社) |
| 36 | 英霊鑑 | (昭和二十一年村上喜市郎編集) |
| 37 | 養老町遺族会記録 | (村上喜市郎) |
| 38 | 日吉村土地宝典 | (昭和十四年版) |
| 39 | 関係古文書 | |
-

著者略歴

大正8年（1919）養老郡日吉村橋爪に生まれる。

大東亜戦争に当初陸軍自動車隊、中途航空隊に転科し戦闘機操縦者として参加。

復員後、会社勤務。のち岐阜県内中学校及び大垣市役所奉職。

昭和57年（1982）退職後日本歴史研究に専念。

橋爪の歴史 非売品

発行 平成4年11月3日

著者 村上喜代志

岐阜県養老郡養老町橋爪1182 ☎ <0584> 34-0260

印刷 中邦印刷株式会社

代表取締役 黒田恒彰

〒502 岐阜市鷺山本通り3丁目

☎ <0582> 94-1771(代) 図 <0582> 94-1758
